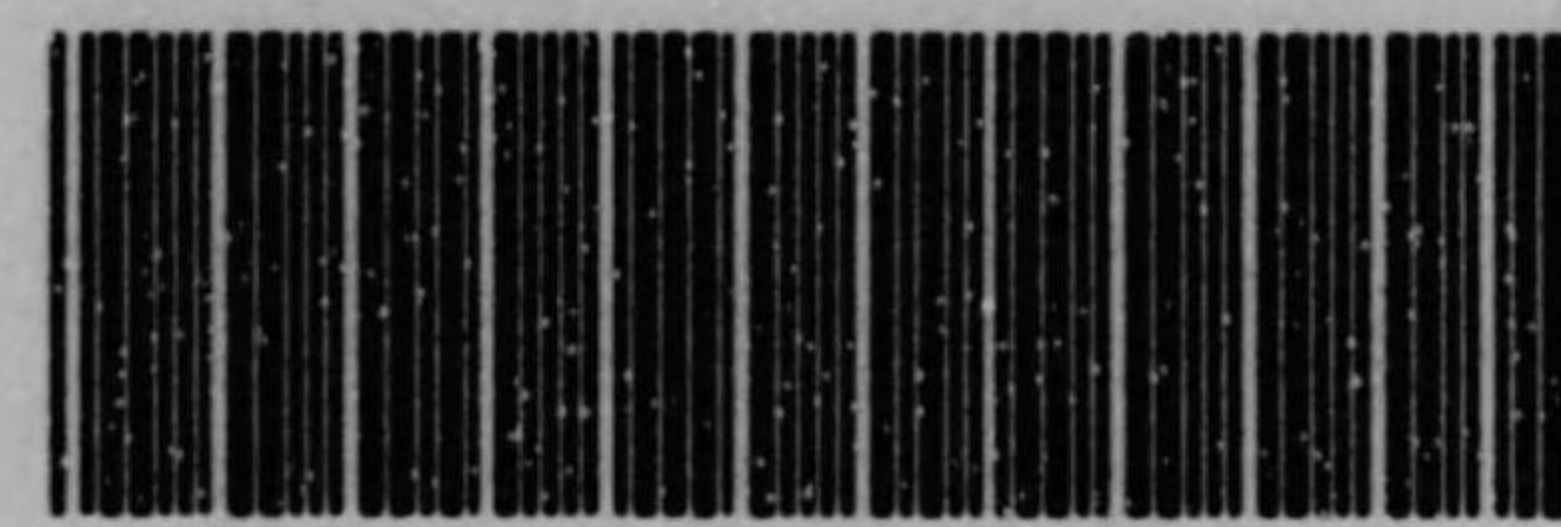


GB611  
281



\* 0057547000 \*

0057547-000

GB 611-281

步兵第二十聯隊史

帝国在郷軍人会本部・編纂

帝国在郷軍人会本部

1931. 10

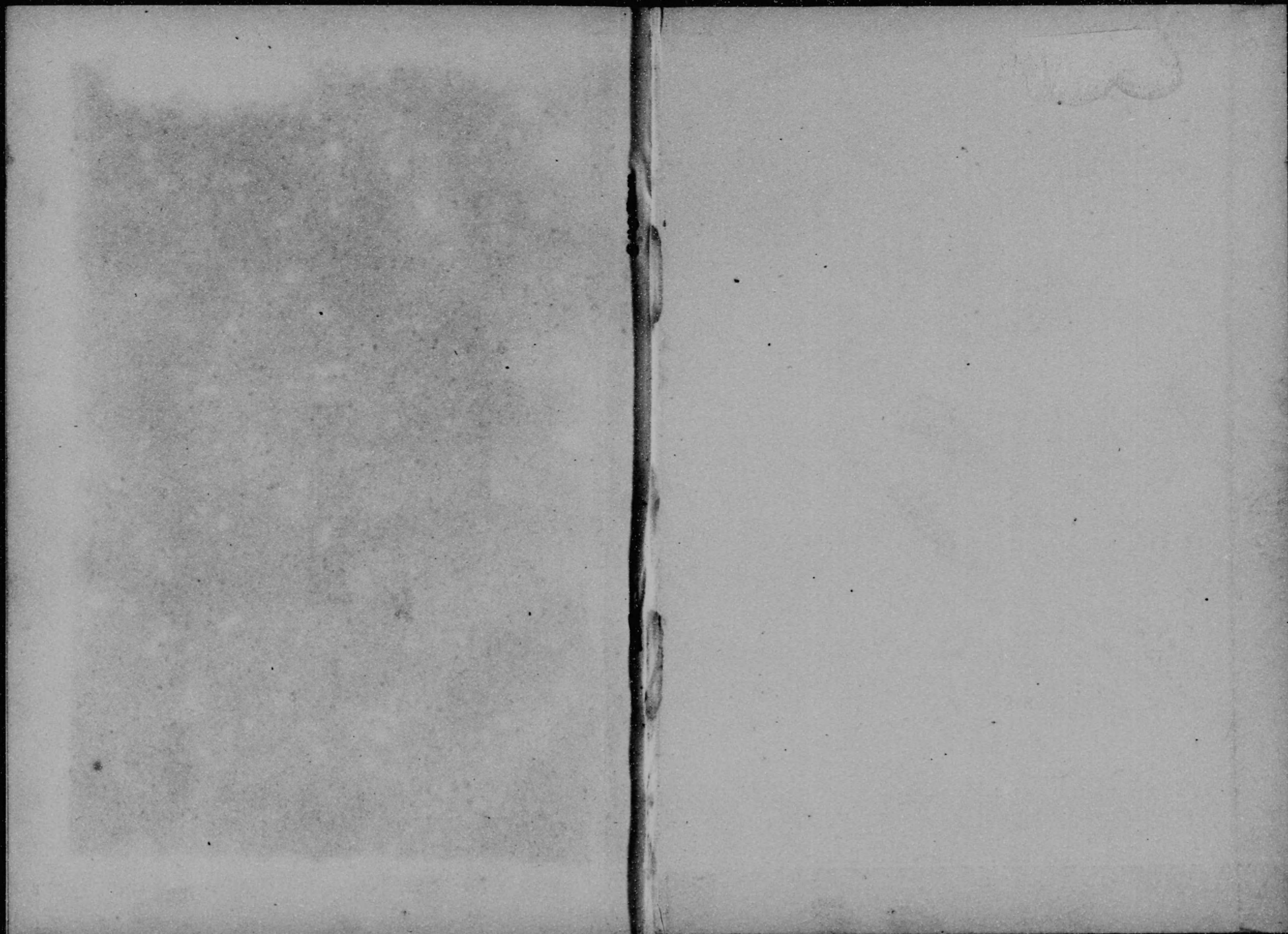
AJF



GB611  
281

步兵第二十聯隊史







步兵第二十聯隊本部校閱

# 步兵第二十聯隊史

帝國在鄉軍人會本部編集



第一冊  
黃為知以

GB611  
281



86W17737



### 聯隊歴史序

凡そ教育の主眼とする所、忠孝至純の人格を陶冶するより急なるはなし。其人忠孝ならざれば百技百能あるも毫末も國家に利する所あらず。此に於てか歴史は乃ち教育の基本となる。蓋家を念ひ國を愛するは其家其國の尊貴神聖を信念するが爲にして、此信念は歴史の討究に由つて初めて涵養せらるゝを以て也。

聯隊は平時にありては將卒の家なり。生活を一にし、教養を共にし、軍旗を中心として協心戮力其團結をなす。戦時にありては國家の干城なり、諸員、一令に由りて死生を軍旗下に決し、國土防衛の爲めに其全力



を傾注す。故に聯隊にありては其聯隊歴史を教育の  
大本となさざるべからず。則ち聯隊過去の名譽ある  
歴史を知るは、將來聯隊の名譽を發揚すべき精神的  
基礎にして忠孝の信念之に由りて益々鞏固なるを  
得べきなり。  
帝國在郷軍人會本部が聯隊歴史を修めて公にする  
所以は、上述の趣旨に基きて聯隊諸員の教養に資せ  
んとするに外ならず。一言して序文となす。

昭和六年九月一日

帝國在郷軍人會會長 鈴 木 莊 六

序

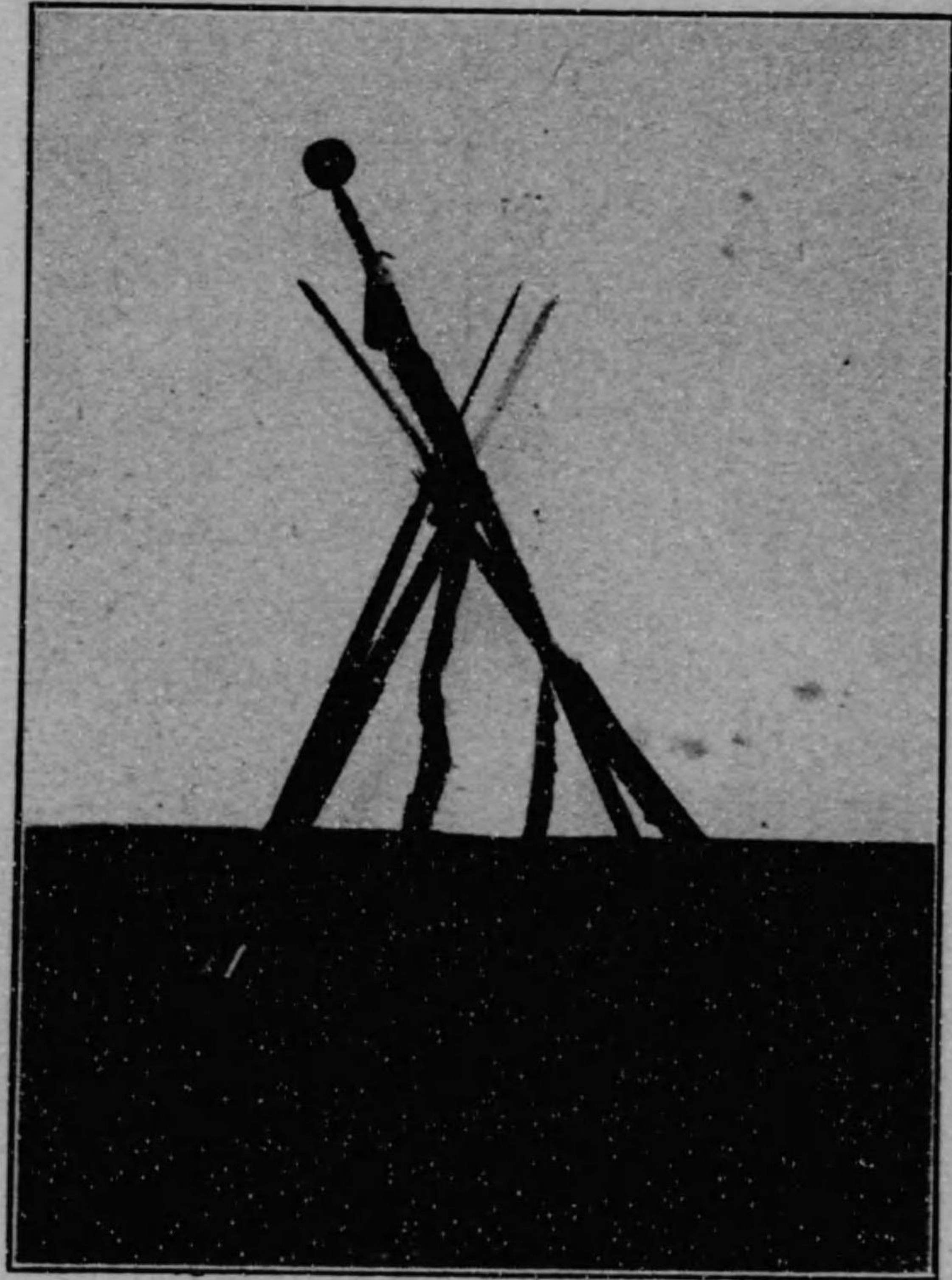
古云政之要在武事矣明治聖代大政維新武事悉備  
戰即勝攻必取我武維揚國威嚴振惟

聖上稜威赫灼億兆一心以致此未曾有之成跡也我  
福知山歩兵第二十聯隊明治十八年所設置兵員概近  
畿山陰之健兒也質寔剛健教必守令必行焉以是夙馳  
盛名矣一旦緩急桓々如虎如貔猛健奮擊拔堅挫銳聯  
隊之偉蹟將卒之功勳炳焉昭々兮仍茲撮其梗概錄爲  
一卷庶幾將校下士卒鑑先人之偉業補將來之功課上  
以對

聖上尙武之休命下以濟億兆奉公之至誠云爾



昭和六年春三月於滿洲遼陽陸軍官舎  
 第二十五代聯隊長 陸軍歩兵大佐 堀 田 修 造



歩兵第二十聯隊軍旗

聯 隊 感 狀

**感 狀**

歩兵第二十聯隊

遼陽攻撃、除九月三日、上イフ、  
 附近最も堅固ニ防備シテ敵ニ對シテ  
 戦一日上長官志ヲ負傷シ北陽續出  
 其ノ兵力、半ヲ失ヒ特ニ第二大隊、  
 如ク將校士、此場ハルニ至ルニ能ク  
 奮戦シ全聯隊ノ秩序整然トシテ敢テ  
 亂レズ以テ攻撃ノ機會ヲ得ルニ至リ  
 歩兵第十聯隊、增加シテ猛烈ニ攻撃  
 實行シ終ニ敵ノ壘ヲ陥ルニ成功シ  
 先ニ遼陽城門、歩兵、驅逐シ全軍ニ  
 先ニ遼陽ヲ進入シ其ノ東南門、占領  
 二實ニ赫々ト武功ノ人仍テ茲ニ感狀  
 ノ所トス

明治三十七年九月二十日

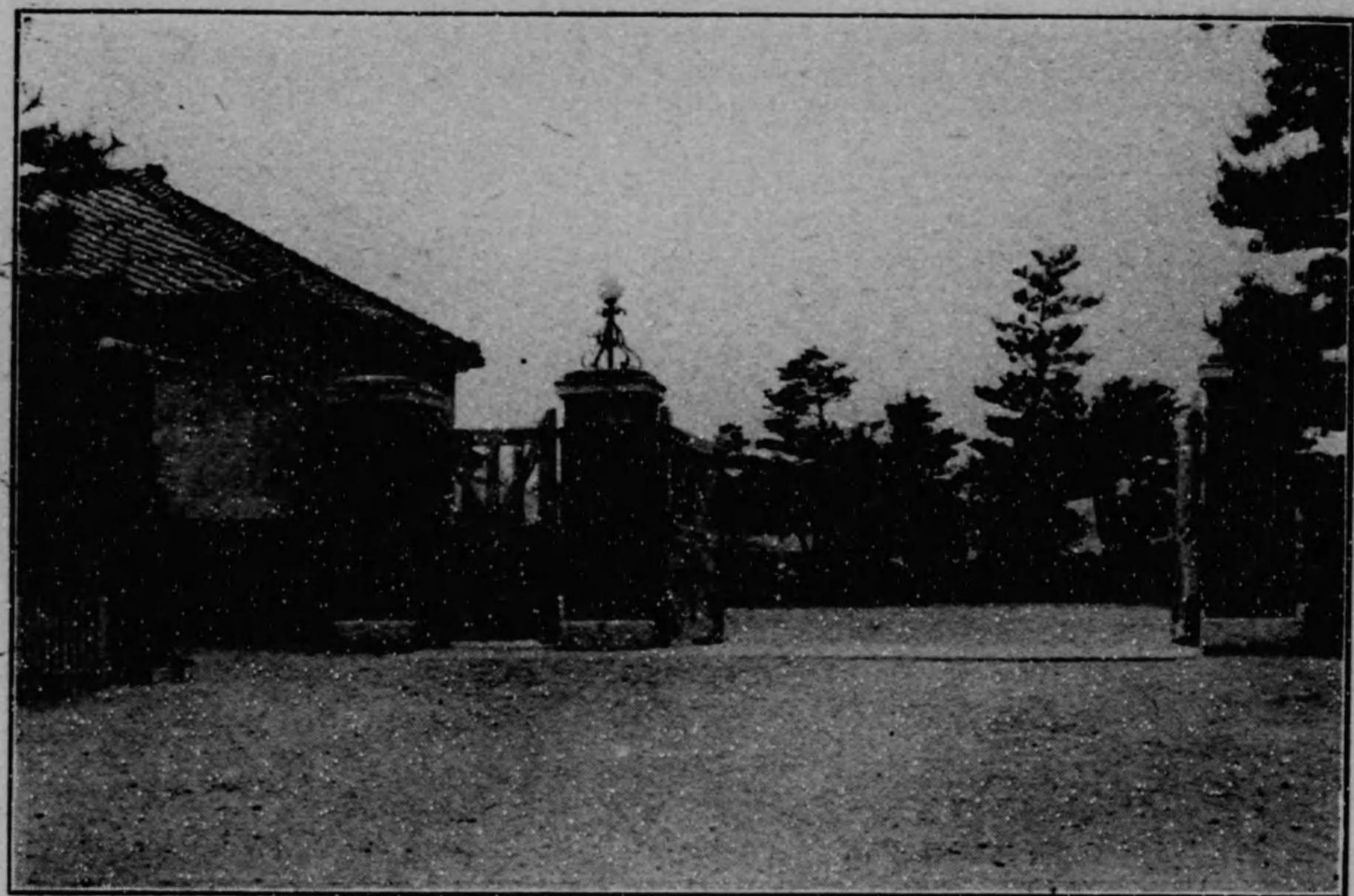
陸軍大臣 官位 陸軍少將 津道貫 宣







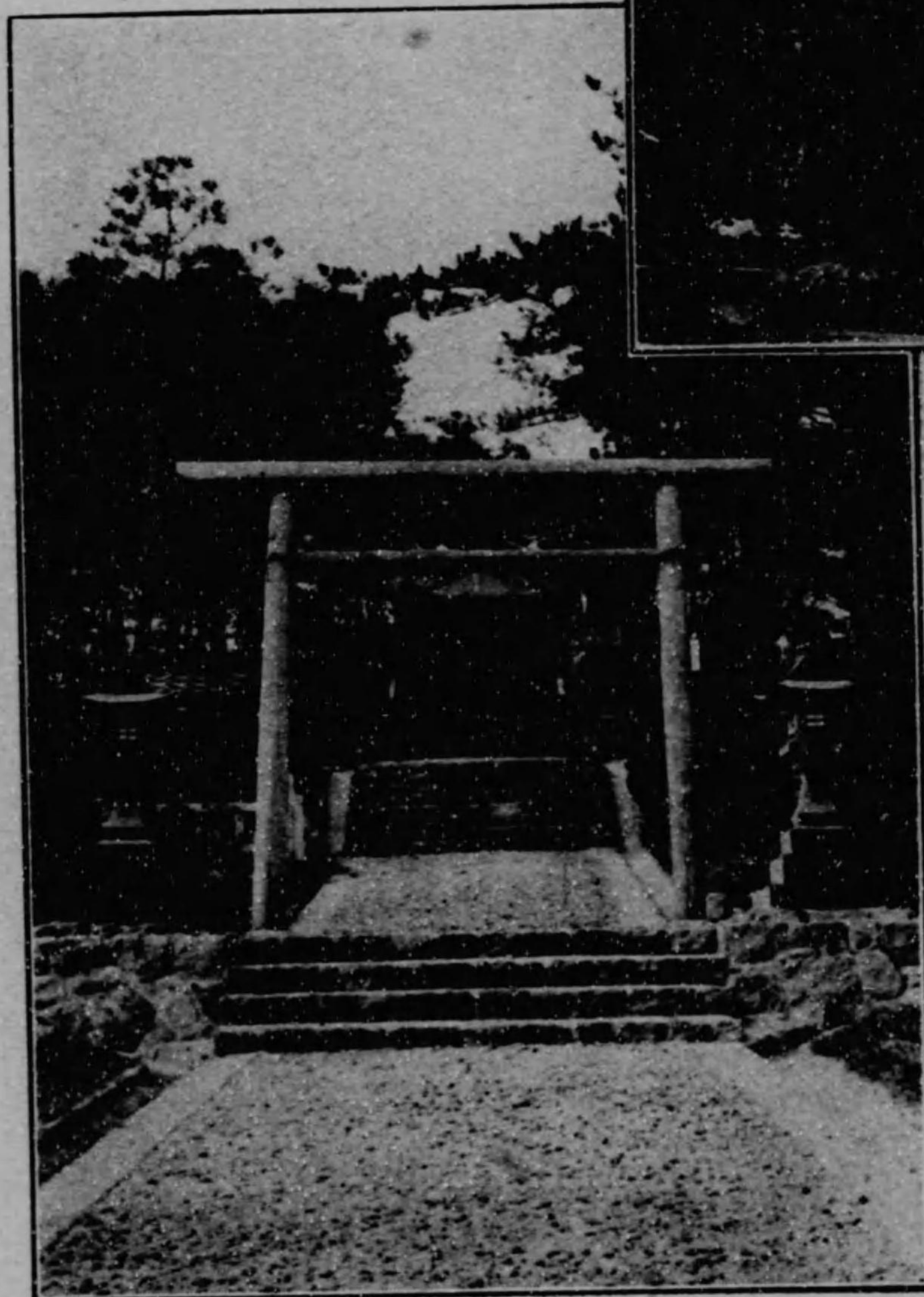
歩兵第十二聯隊營門



同全景



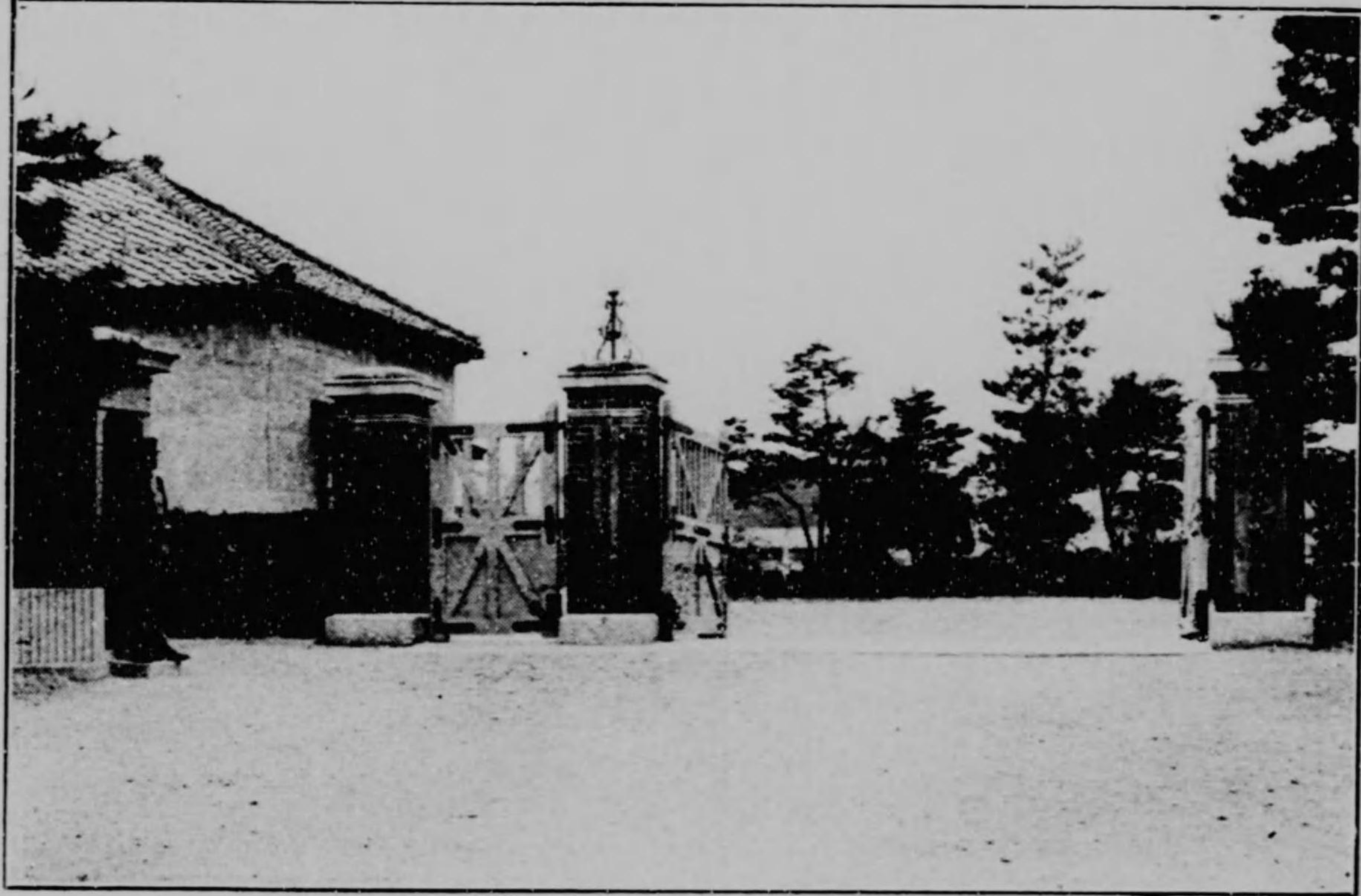
松植手御



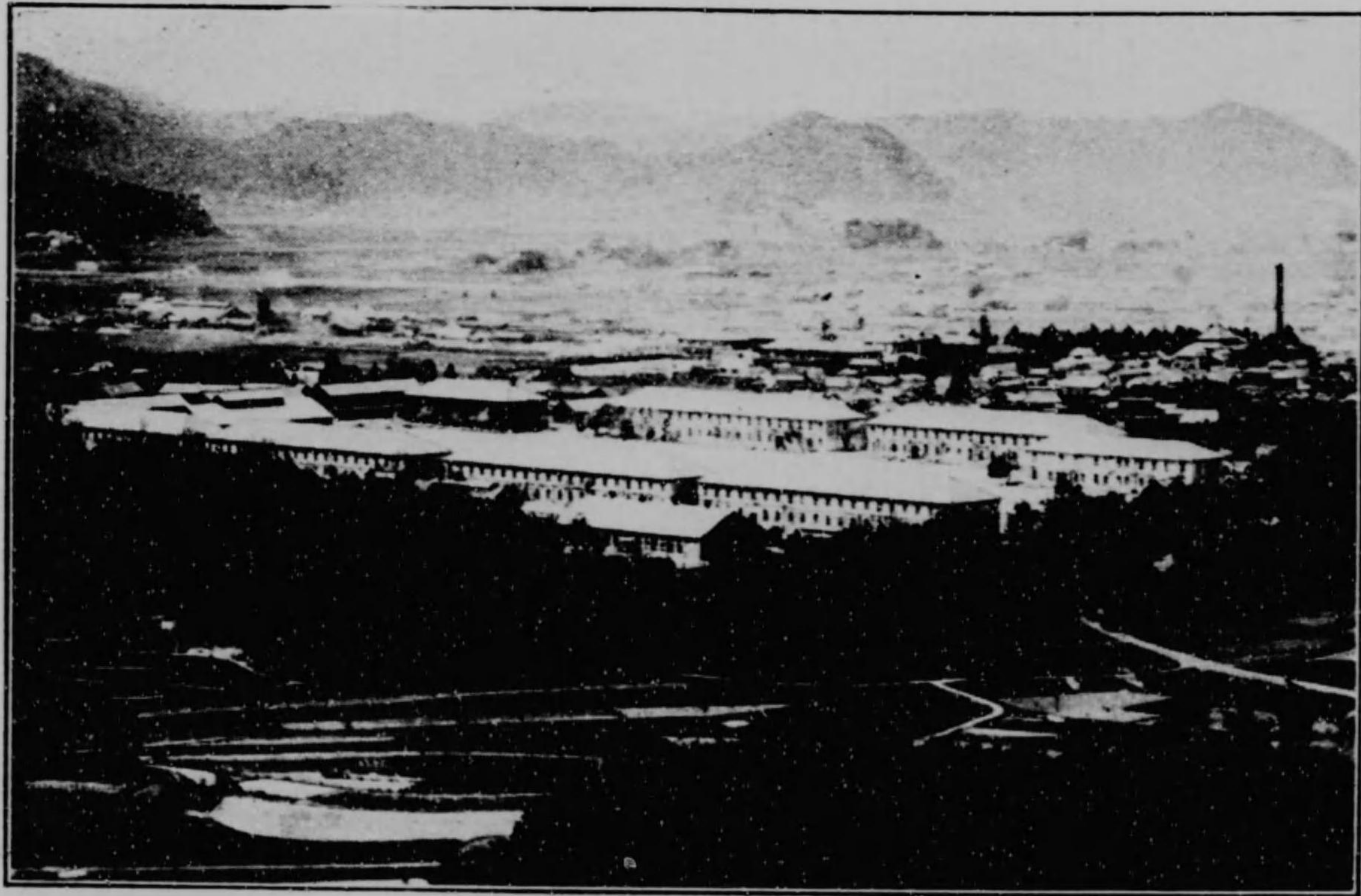
社鎮鎮を祀奉に内隊聯



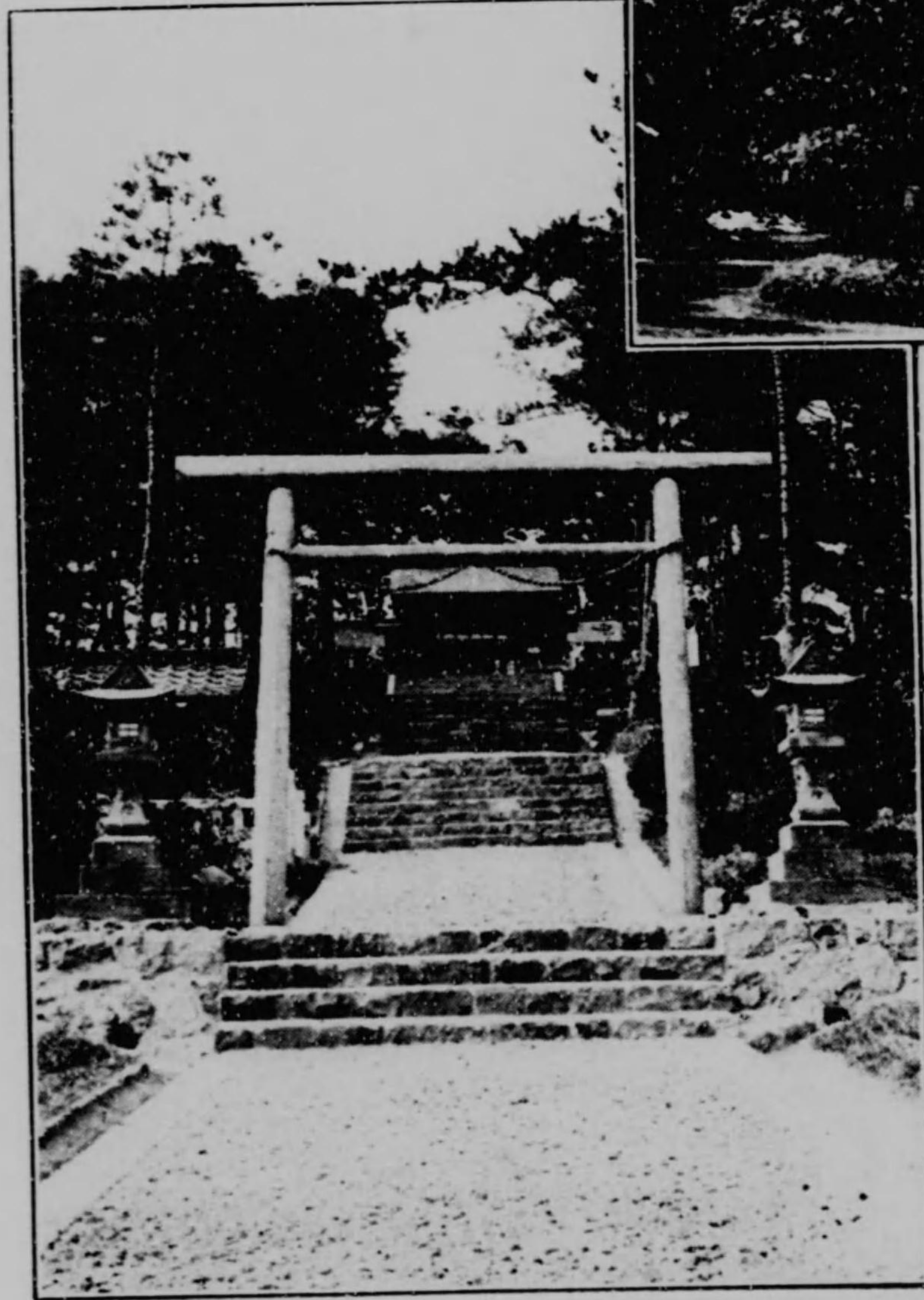
歩兵第十二聯隊營門



同全景



松植手御



社鎮國に奉祀せる隊聯内



歴代聯隊長



第一代  
中佐 河野 通行  
明治十八年就職

第二代  
中佐 矢上 義房  
同十九年就職

第三代  
中佐 土屋 光春  
同二十二年就職

第四代  
中一大佐 大久保 利貞  
同二十三年就職

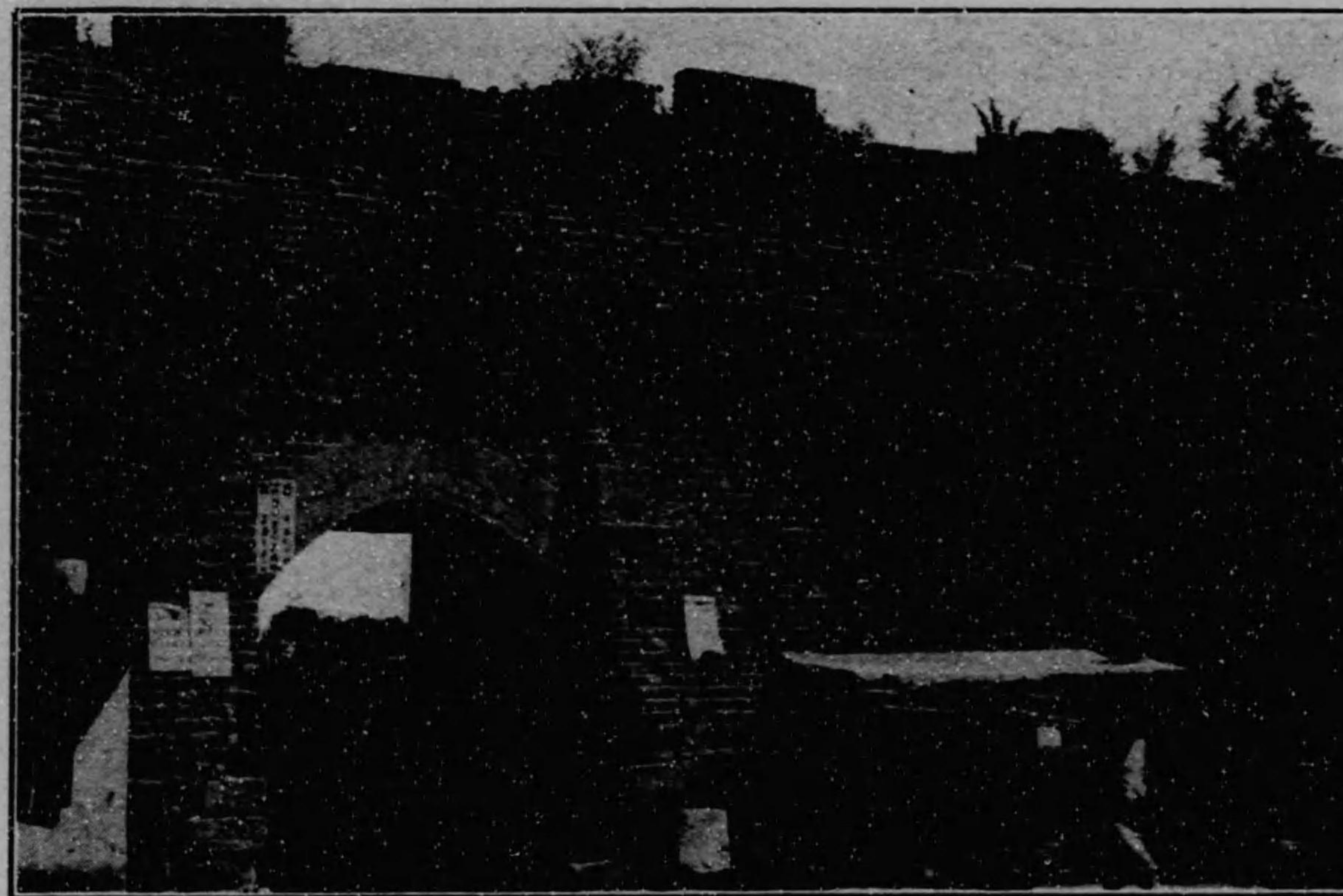


第五代  
中一大佐 飯田 俊助  
明治二十七年就職

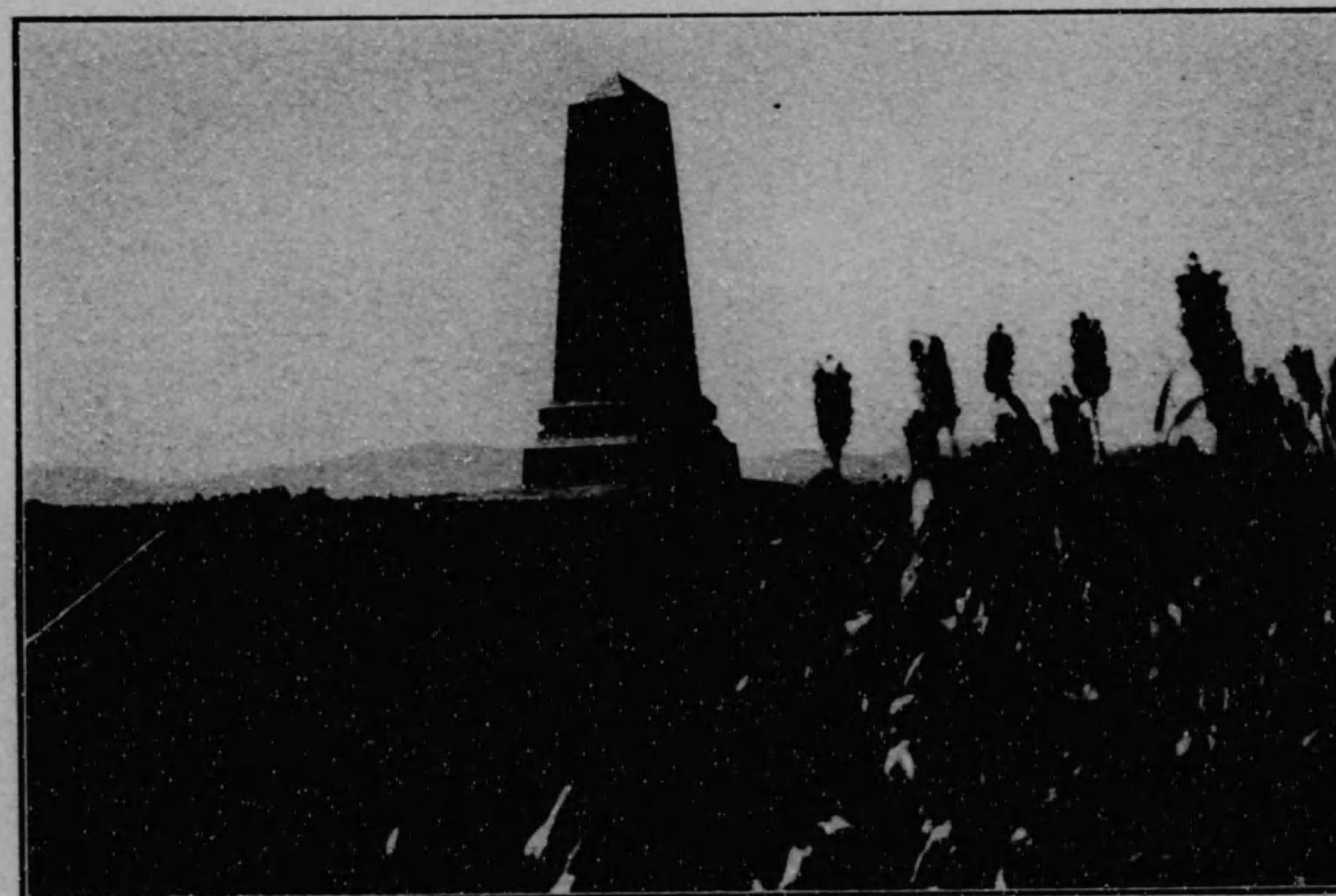
第六代  
大佐 池田 正介  
同二十九年就職

第七代  
中一大佐 遠山 規方  
同三十年就職

第八代  
中一大佐 師岡 政宣  
同三十年就職



明治三十三年九月三日全軍に魁して  
聯隊の占領せしめたる陽城南門



玉皇朝堡壘に建設せし記念碑



歴代聯隊長

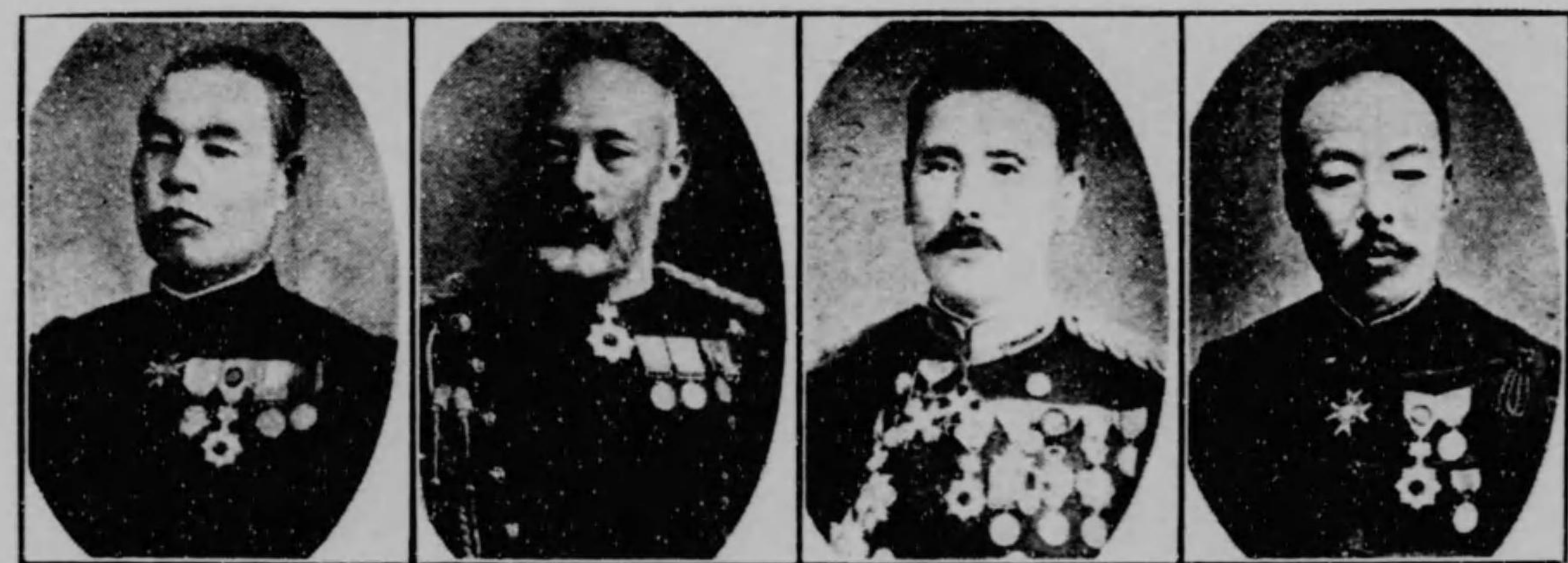


第一代  
中佐 河野通  
行  
明治十八年就職

第二代  
中佐 矢上義房  
同十九年就職

第三代  
中佐 土屋光春  
同二十二年就職

第四代  
中一大佐 大久保利貞  
同二十三年就職

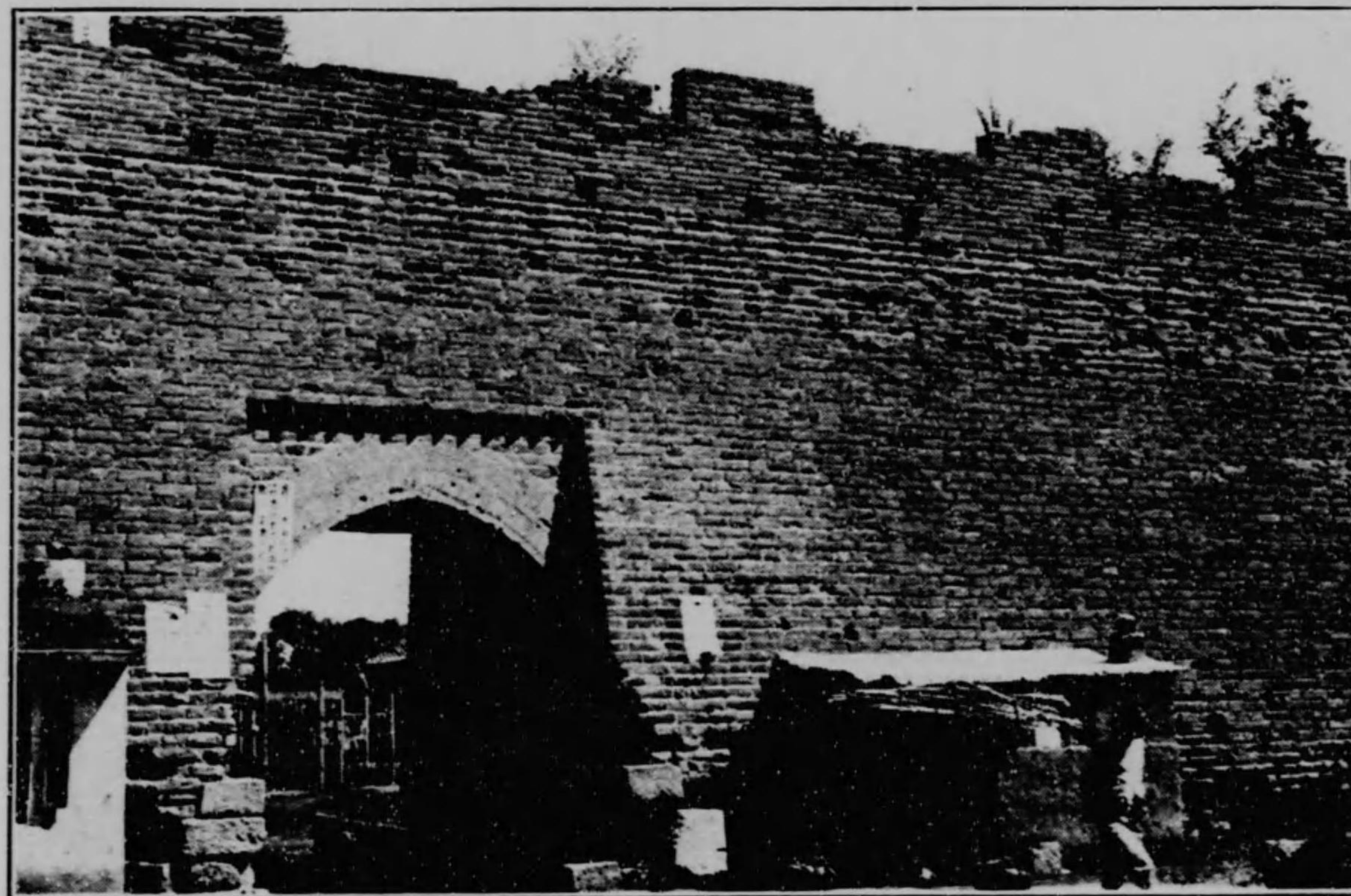


第五代  
中一大佐 飯田俊助  
明治二十七年就職

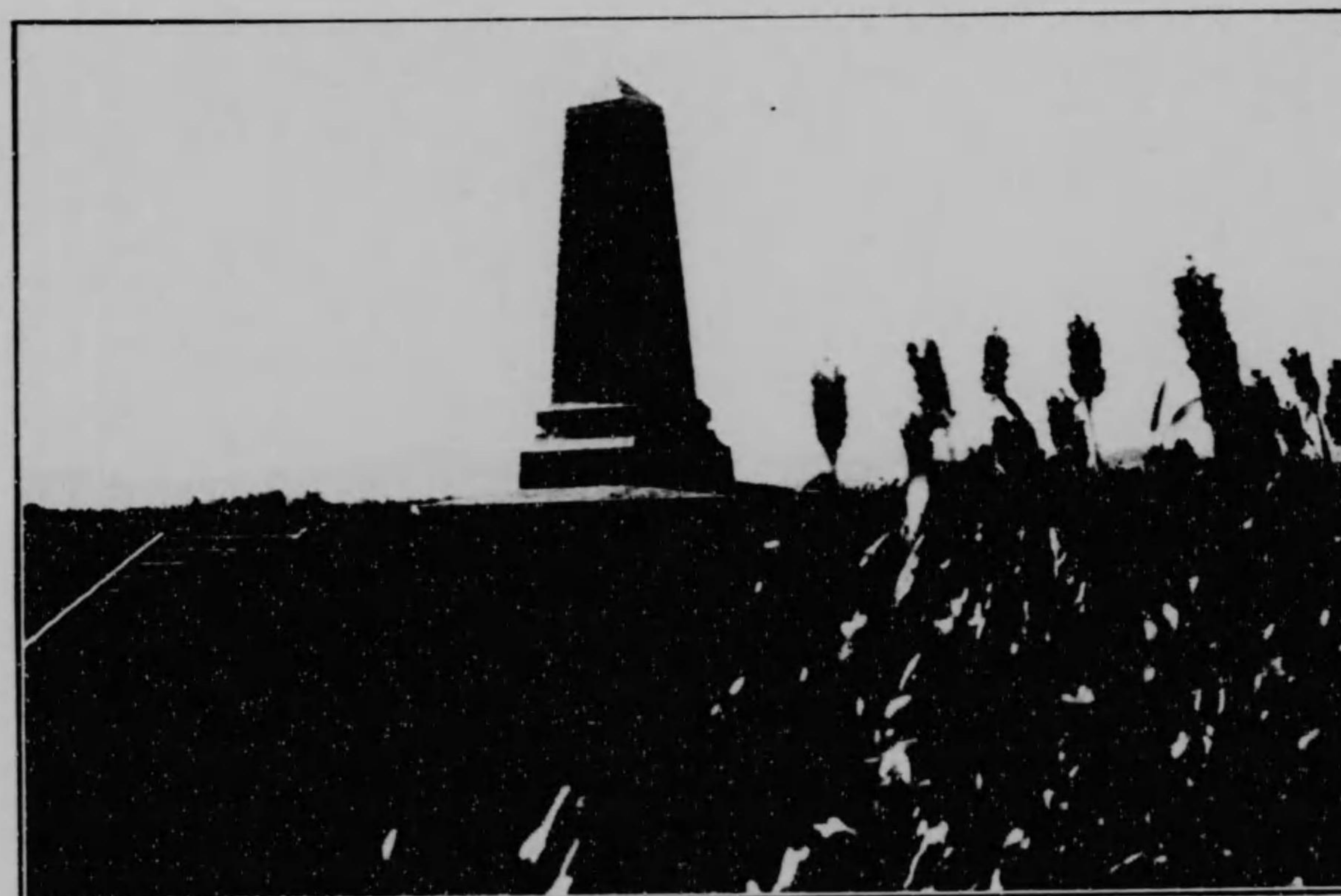
第六代  
大佐 池田正介  
同二十九年就職

第七代  
中一大佐 遠山規方  
同三十年就職

第八代  
中一大佐 師岡政宣  
同三十年就職



明治三十三年九月三日全軍に魁し  
聯隊の占領せしる陽城南門



玉皇朝堡址に建設せしる記念碑



長隊聯代歴

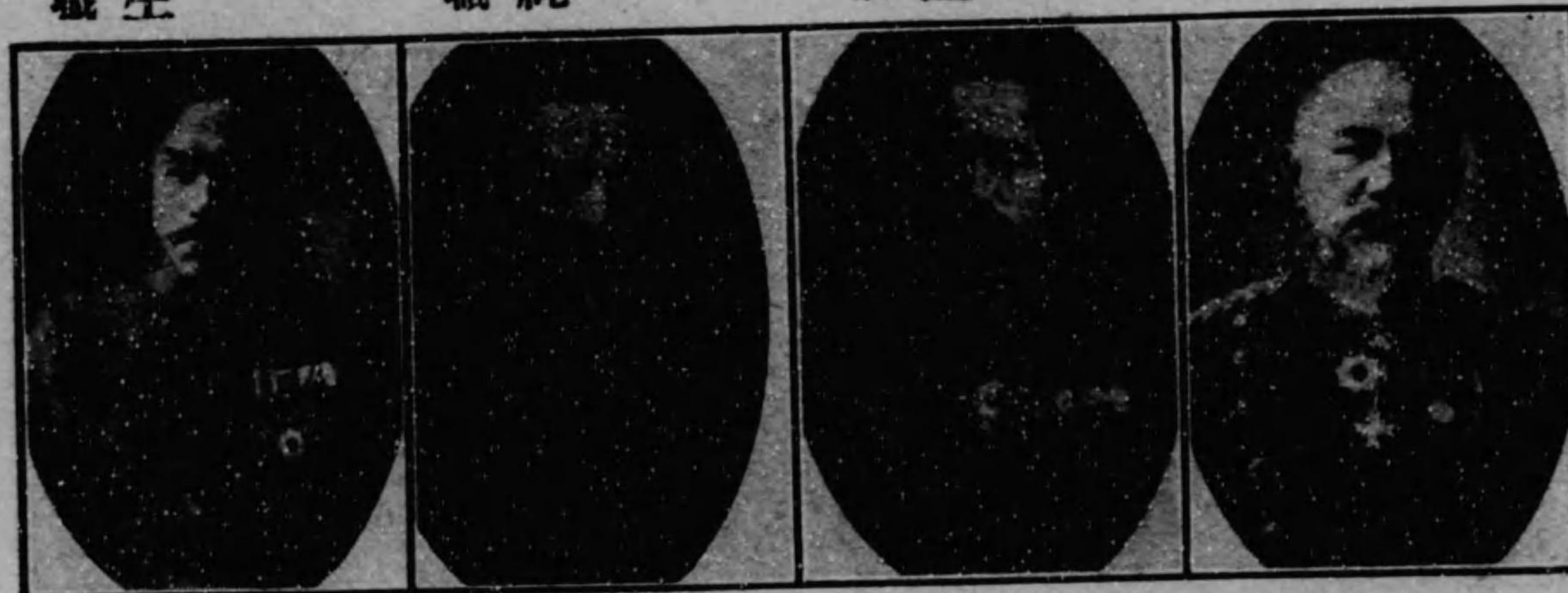


第九代  
中一大佐  
門司和太郎  
明治三十三年就職

第十代  
中一大佐  
桂真澄  
同三十五年就職

第十一代  
中佐  
八木下純  
同三十七年就職

第十二代  
中一大佐  
清水金生  
同三十七年就職



第十三代  
大佐  
前田喜准  
明治三十七年就職

第十四代  
大佐  
小澤秀治  
同三十九年就職

第十五代  
大佐  
鈴木朝資  
同四十三年就職

第十六代  
大佐  
清水三男  
同四十五年就職

長隊聯代歴



第十七代  
大佐  
杉村勇次郎  
大正二年就職

第十八代  
大佐  
長谷川直敏  
同五年就職

第十九代  
大佐  
長渡忠被  
同六年就職

第二十代  
大佐  
益満竹之助  
同十年就職



第二十一代  
大佐  
岸孝一  
大正十二年就職

第二十二代  
大佐  
山田勝康  
同十三年就職

第二十三代  
大佐  
高田友助  
昭和三年就職

第二十四代  
大佐  
赤松寅七  
同四年就職



長隊聯代歴



第九代  
中一大佐 門司和太郎  
明治三十三年就職

第十代  
中一大佐 桂真澄  
同三十五年就職

第十一代  
中佐 八木下純  
同三十七年就職

第十二代  
中一大佐 清水金生  
同三十七年就職



第十三代  
大佐 前田喜准  
明治三十七年就職

第十四代  
大佐 小澤秀治  
同三十九年就職

第十五代  
大佐 鈴木朝資  
同四十三年就職

第十六代  
大佐 清水三男  
同四十五年就職

長隊聯代歴

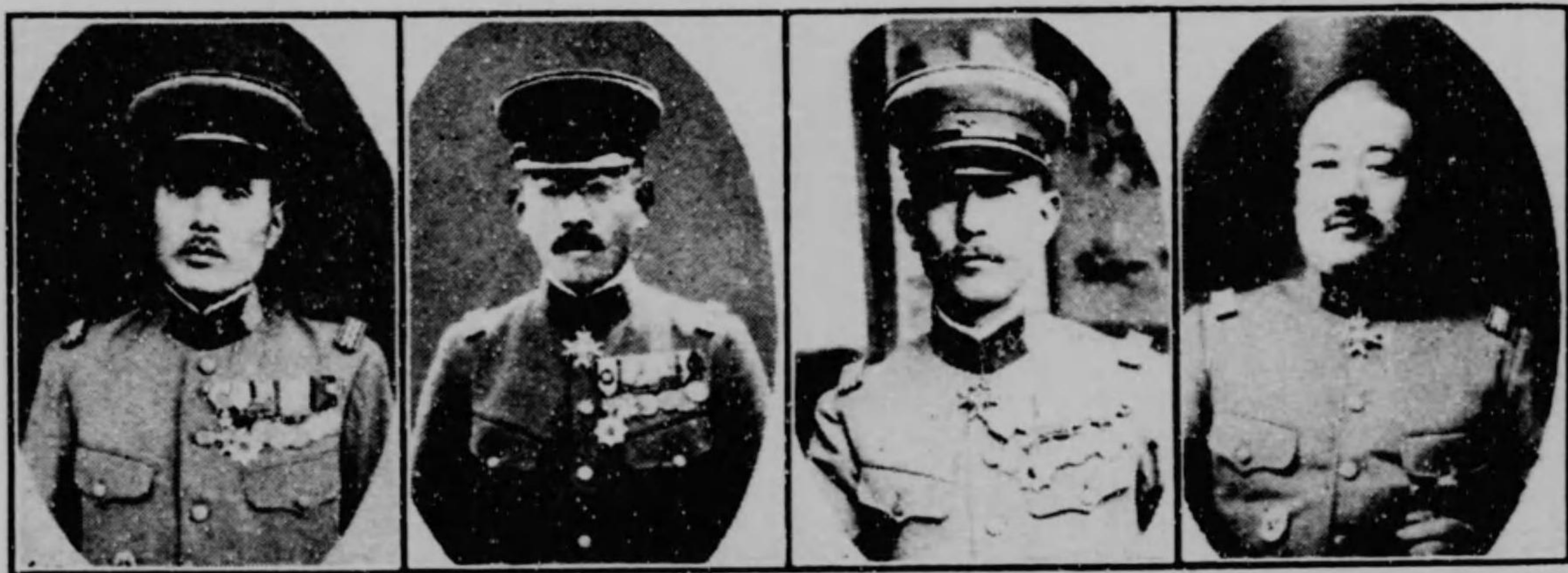


第十七代  
大佐 杉村勇次郎  
大正二年就職

第十八代  
大佐 長谷川直敏  
同五年就職

第十九代  
大佐 長渡忠被  
同六年就職

第二十代  
大佐 益満竹之助  
同十年就職



第二十一代  
大佐 岸孝一  
大正十二年就職

第二十二代  
大佐 山田勝康  
同十三年就職

第二十三代  
大佐 高田友助  
昭和三年就職

第二十四代  
大佐 赤松寅七  
同四年就職



忠 靈 英 姿



少 守	少 矢	少 森	中 古	大 桂
佐 田	佐 橋	佐 野	佐 澤	佐 真
利	榮	駿	兵	澄
貞	太	三	三	
	郎	郎	郎	



中 侯	中 沖	大 須	大 阪	大 杉
尉 野	尉 親	尉 山	尉 口	尉 山
延	治	正	英	宗
次		雄	一	助
郎				

歷 代 聯 隊 長



第二十五代(現)  
大 堀  
佐 田  
同 五 年 就 職  
修 造



忠 靈 英 姿



少 守	少 矢	少 森	中 古	大 桂
佐 田	佐 橋	佐 隆	佐 澤	佐 真
利	榮	駿	兵	
貞	太	三	三	
	郎	郎	郎	澄



中 侯	中 沖	大 須	大 阪	大 杉
尉 野	尉 親	尉 山	尉 口	尉 山
延	親	正	英	宗
次	治	雄	一	助
郎				

歷 代 聯 隊 長



第二十五代(現)  
大 堀  
佐 田  
同 五  
年 就 職  
修 造



忠 靈 英 姿



鎌 少	奥 少	林 中	平 中	尾 中
倉 尉	奥 尉	尉	方 尉	山 尉
誠	之		兵	隆 三 郎
一	亟	勇	三	



谷 少	秋 少	杉 少	佐 少	明 少
口 尉	木 尉	山 尉	久 間 尉	田 尉
禎	禮	兵	寛	數
吉	造	治	一	馬

忠 靈 英 姿



岡 中	加 中	八 中	中 中	山 中
尉	瀬 尉	島 尉	川 尉	名 尉
敏	澤 喜 之 作	恒 夫	和 三 郎	秀 太 郎
政				



赤 中	沼 中	杉 中	長 中	岡 中
見 坂 義 太 郎 尉	田 信 成 尉	山 樺 尉	谷 川 民 三 郎 尉	本 岩 二 尉



忠 靈 英 姿



鎌 少	奥 少	林 中	平 中	尾 中
倉 尉	與 尉	尉	方 尉	山 尉
誠	之		兵	隆
一	亟	勇	三	三 郎



谷 少	秋 少	杉 少	佐 少	明 少
口 尉	木 尉	山 尉	久 尉	田 尉
禎	禮	兵	寬	數
吉	造	治	一	馬

忠 靈 英 姿



岡 中	加 中	八 中	中 中	山 中
尉	瀬 尉	島 尉	川 尉	名 尉
敏	喜	恒	和	秀
政	之 作	夫	三 郎	太 郎



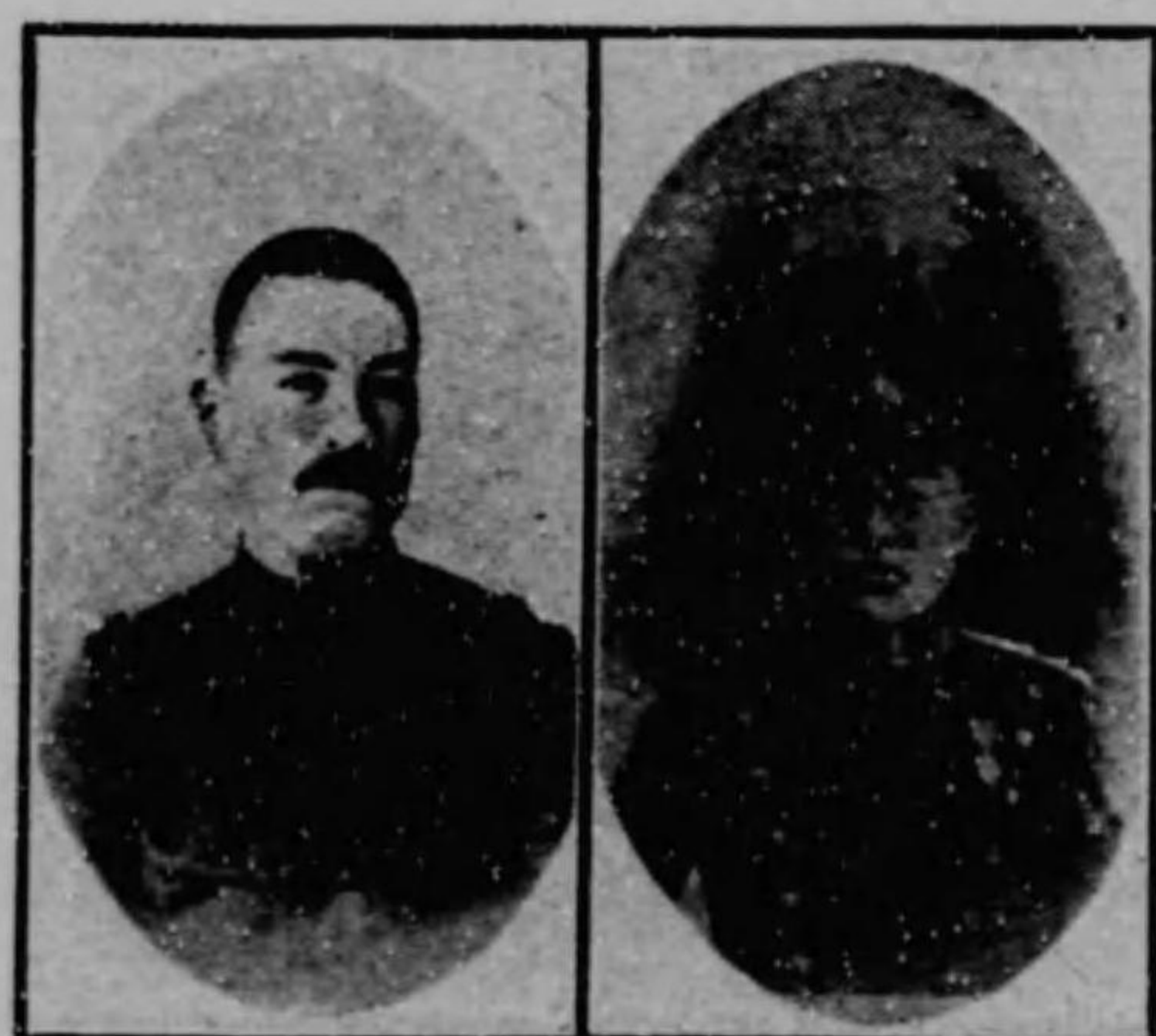
赤 中	沼 中	杉 中	長 中	岡 中
見 尉	田 尉	山 尉	谷 尉	本 尉
坂	信		川	岩
義 太 郎	成	棒	民 三 郎	二



忠 靈 英 姿



田 少尉 副 鎮 助	市 少尉 野 原 太 郎	人 少尉 見 米 三	衣 少尉 川 榮 吉	井 少尉 尻 潤 三
---------------	-----------------	---------------	---------------	---------------



泉 少尉 秀 彌 壽	梶 少尉 谷 芳 之 助
---------------	-----------------

步兵第二十聯隊史

目 次

第一章 聯隊の創設と軍旗	一
一、聯隊の創設と變遷	一
二、我が聯隊の軍旗	四
第二章 皇室と我が聯隊	八
一、明治天皇	八
二、昭憲皇太后御大喪	九
三、大正天皇	一〇
四、今上天皇陛下	二
五、各宮殿下の御來營	三
六、侍從武官の御差遣	四
第三章 日 清 戰 役	七
一、我が軍の連戰連捷	七
二、動員と出征	八



忠 靈 英 姿



田 少 副 尉 鎮 助	市 少 野 尉 原 太 郎	人 少 見 尉 米 三	衣 少 川 尉 榮 吉	井 少 尻 尉 潤 三
-------------------	---------------------	-------------------	-------------------	-------------------



泉 少 秀 尉 彌 壽	梶 少 谷 尉 芳 之 助
-------------------	---------------------

歩兵第二十聯隊史

目 次

第一章 聯隊の創設と軍旗.....	一
一、聯隊の創設と變遷.....	一
二、我が聯隊の軍旗.....	四
第二章 皇室と我が聯隊.....	八
一、明 治 天 皇.....	八
二、昭憲皇太后御大喪.....	九
三、大 正 天 皇.....	一〇
四、今上天皇陛下.....	一三
五、各宮殿下の御來營.....	一三
六、侍從武官の御差遣.....	一四
第三章 日 清 戰 役.....	一七
一、我が軍の連戰連捷.....	一七
二、動員と出征.....	一八



三、占領地守備と凱旋……………二〇

第四章 日 露 戦 役……………三

一、開戦の理由……………三

二、動員と出征……………三

三、岫巖附近の戦闘……………六

四、分水嶺附近の戦闘……………九

五、柞木城附近の戦闘……………一〇

六、遼陽の會戦……………一五

七、沙河の會戦と對陣……………一五

八、奉天大會戦……………一六

九、平和克復と凱旋……………一六

一〇、個人感狀の勇士……………一六

一一、陣 中 美 談……………一六

第五章 聯 隊 雜 俎……………一六

一、特別大演習……………一六

二、特 命 檢 閲……………一七

三、派遣と轉出……………一七

四、鎮國神社の由來……………一八

我が聯隊の環境……………一八

一、福知山城趾……………一八

二、鬼ヶ城山……………一八

年 表……………一八

在郷軍人の心得



歩兵第二十聯隊の歌

北天遠く聳ゆるは

仰げゆかしき大江山

眼下にゆるく流るゝは

山河襟帯繪の如き

中や天府の土地肥沃

明治十有七年の

浪に華さく難波江の

高き理想を抱きつゝ

越えて十有八年の

汝等協力同心し

わが帝國を保護せよと

ひらめき渡る旗風に

その傳説に名も高き

紺碧なして洋々と

名に負ふ音無瀬水清し

自然の城を繞らせる

此處に衛戍の聯隊は

夏六月の初十日

豊大閣の城あとに

呱呱の聲をばあげたりき

軍旗拜受の折なれや

ますく威武を宣揚して

畏き勅語忘れめや

吹きも靡かぬ草やある



征清役後三年経て

しづめとなりて福知なる

舞鶴港と呼應して

由來山陰人淳朴

思へば今も肉躍る

征露の戦さ 関に

ユイフアシミオヤの附近なる

明くれば三日霧深し

忠勇無雙のわが軍は

尙ほも全線勇敢に

先頭一の功を立て

遼陽城の朝風に

かゝる名譽の軍旗守る

日月懸る 勅諭

この美しき山國に

高臺にこそ移りしが

實に山陰の重鎮ぞ

剛健忠烈比ひなし

過ぎにし三十有七年

高梁實る秋九月

苦戦の迹を辿らんか

加はる敵の銃砲火

將卒半ばを失へど

一舉に堅壘突破しつ

息をもつがず追撃し

翻へしけり聯隊旗

われらの責務やいかばかり

五條の文のいやちこに

泰山よりも義は重く

感狀賜ひし聯隊の

丹若男兒の本領を

自然の神は長へに

鴻毛よりも身は輕し

輝く歴史に光り添へ

世に發揮さんことあらば

わが聯隊を護るなり



# 歩兵第二十聯隊史

## 第一章 聯隊の創設と軍旗

### 一、聯隊の創設と變遷

聯隊の編制成るオルフラン聯隊。明治十七年六月十日。歩兵第二十聯隊の編制を定められ、先づその第一大隊を大阪城内第三營に設置し、大隊長少佐寺内清祐以下幹部の補職あり、同時に歩兵第十聯隊から下士五十二名、兵卒二百九十八名（百三十四名は十五年兵）が轉入して、こゝに大隊を編成した。これ實にわが聯隊の濫觴である。同月二十三日歩兵第十聯隊からまた兵卒百〇一名、二十九日同じく二百〇四名轉入し、更に七月七日新兵百九十八名、越えて十八年五月二日同じく百三十八名の入隊があつて、こゝに完全に第二大隊の編成が成り、左の達令によつて聯隊組織になつたのである。

庶丁六號一六號



本年六月其臺歩兵第二十聯隊第二大隊ヲ設置シ聯隊に編成セラレ候條此旨相達シ候事

明治十八年五月十九日

陸軍卿 伯爵 大山 巖

かくて五月二十六日歩兵中佐河野通行初代聯隊長に補せられ。六月九日大阪鎮臺司令官高島勲之助より

其隊明十日より開設可致此旨相達候事

との達令をうけ、翌十日はじめて大阪城内第三營内に聯隊本部を開設した。そして六月十八日陸軍省から、「オルフラン」の暗號をもつてわが聯隊の譜號と定められたので、誰いふとなくわが聯隊のこととを、オルフラン聯隊と呼ぶやうになつたが、その後この稱呼はいつとなく廢れるに至つた。

二十年三月二十四日、大阪府下東區圓阪町に新築中の兵舎が竣功したので、聯隊本部をこゝに移轉し、同二十九日第三營の第一大隊を新兵舎第十一營に移轉した。更に五月十七日、第三大隊を大阪城内の第三營に設置して、こゝに聯隊の編成は全く完了し、二十四年一月十六日第三大隊を第三營から、新築の第十一營に移した。爾後三十一年八月三十日福知山兵營に移轉するまで、大阪に屯してゐたのである。

### 所屬變更と兵營移轉

明治十八年六月十一日、歩兵第八旅團の編成を定められ、旅團司令部を姫路市に設置せらるゝや、聯隊は歩兵第十聯隊と、もに、同旅團に屬することとなつた。初代旅團長小將岡澤精。

越えて二十一年鎮臺を廢して、新たに師團編成となるや、わが第八旅團は歩兵第七旅團と、もに第四師團に屬することとなつたが、日清戰役後における軍備擴張の結果、聯隊は從來の第八旅團を脱し歩兵第三十九聯隊と、もに第二十旅團に轉屬、第八旅團と、もに第十師團に屬することとなつた。

しかるに大正十四年五月一日陸軍軍備整理のため四個師團を廢止せられ、平時編制表を改定せられた結果、聯隊は從來の第十師團を脱し歩兵第九聯隊と、もに第十九旅團に屬し、第三十旅團と、もに第十六師團に屬することとなり、爾來今日に及んでゐる。この間大正九年十二月機關銃隊を編成し、同十一年八月第四・第八・第十二中隊を廢止す。

尙ほこれより先き明治三十一年八月三十日、かねて京都府天田郡福知山町に新築中の兵營が落成したので、大阪城内の屯營を出發、熱烈なる福知山地方官民の歡呼の聲に迎へられつ、新兵營に入り、十月一日盛大なる移轉式を舉行した。



## 二、わが聯隊の軍旗

四

武勳赫々たるわが軍旗 顧みればわが聯隊の編成成り、宮中正殿において畏くも 明治天皇親しくわが聯隊に軍旗を授け賜ひしよりすてに四十餘星霜、この間わが軍旗は日清・日露の役に出征し日清戦争には懸軍長驅・海城まで進んだに拘らず、いまだ聯隊の威武を發揮しない中に平和克復し、惜しくも海城の守備を撤して凱旋したが、ついで日露戦争起るや、三十七年五月五日屯營を發して征途に上り、爾來硝煙の間に樞風沐雨の艱苦を嘗め、柘木城・遼陽・沙河・三塊石山等の激戦に中央軍として全軍の中堅となり、常に敵の十字火をうけて奮戦し、殊に遼陽の會戦においては、桂聯隊長の戦死をはじめ、將校殆ど全滅下士卒の大部分をも失つたが、尙ほ屈せず敵陣に蕩進する中、たたく敵軍が軍旗の御紋章に中つてその一片を破碎し、また一弾は旗竿を擦過し、旗帛には十數彈の命中を見るに至つた。すてにして聯大隊長 悉く斃れ、江上大尉聯隊の指揮を取り、戦機漸やく熟するや、残兵を糾合し、軍旗を先頭に突撃喇叭を吹奏しつゝ、累々たる戦友の死屍を乗り越えて突進し、ついに先頭第一を以て敵壘に突入、旗手榊田少尉は軍旗を堡壘の中央に樹立して、天地も轟ろけとばかり「萬歳」を三唱した。斯くの如く遼陽占領に際りては、わが聯隊が全軍に先んじて敵壘に突入し、先

頭第一の榮譽を荷ひ、軍司令官から名譽の感状を授與されて、驍勇の名を擅にしたのであつた。

仰ぎみるわが軍旗は、いまや旗帛 悉く裂け散じ、御紋章の一部は破碎せられ、旗竿亦彈痕をとめ、周縁の總房が僅かに残つてゐるばかりで、硝煙に燻ぶり古色蒼然たるその威容を仰ぐもの、誰か肅然として襟を正さぬものがあらうか。武勳赫灼たるわが軍旗の下に集ふわれ等は、先輩の偉勳と功績とを想ひ、いよく奮勵努力、聯隊の名譽を發揮せねばならないのである。

軍旗拜受 かくも光輝あるわが軍旗は、明治十八年七月二十一日、宮中正殿において畏くも 明治天皇これを親授したまひしものである。これより先き軍旗授與の御沙汰を拜するや、聯隊長河野通行は、旗手少尉湯川惇一に護衛下士四名を附して、七月十九日上京せしめた。

當日午前十時 明治天皇には御正装にて出御、諸官列立の裡、式により式部官の 奉る軍旗を執らせたまひ高島大阪鎮臺司令官に授けさせられ、司令官恭しくこれを拜受して旗手に授く。

陛下には更に勅語を司令官に賜ひて後入御あらせらる。司令官は旗手を從へて退下、即日歸營の途に就き、鎮臺(現今の師)に歸還し、勅語は親封の上、監軍から鎮臺司令官に送られた。

同月二十六日午前六時、大阪城内練兵場において軍旗授與式を舉行せらる。この日は天氣清朗にして一點の雲翳なく、早曉からこの光景を拜觀せんと城内外は遠近より雲集する觀衆を以て充たされ、



中には前夜から同所に徹宵したものとさへあつた。聯隊は練兵場の中央に西面して整列、岡澤旅團長は河野聯隊長以下を従へて隊の中央に西面並列し、高島鎮臺司令官は、軍旗を奉持せる參謀官を従へて隊の正面に立つ。將士二千燦として誇らず、劍光帽影陽光に映じ紫總の旭旗翻翻として朝風にひるがへり、萬場莊嚴の氣に打たれて一咳の音もなき内、旅團長聯隊長を率ゐるて前面に進めば、司令官は恭しく左の勅語を奉讀して、軍旗を岡澤旅團長に授け、旅團長はこれを河野聯隊長に授く。

勅語

歩兵第二十聯隊編成成ルヲ告ク仍テ軍旗一旅ヲ授ク汝軍人等協力同心シテ益々威武ヲ宣揚シ以テ國家ヲ保護セヨ

と。聯隊長これに奉答して曰く

奉答

度シテ明勅ヲ奉ズ臣等死力ヲ竭シ誓テ國家ヲ保護モン

と。聯隊長は軍旗を旗手に授け、旅團長聯隊長皆乗馬して聯隊に面し、軍旗に對して捧銃の敬禮を行はしめ、終つて分列式を施行す。陽光照々として場内に満ち、儀一層の壯觀を極めたのは、まことにわが聯隊をして志氣の奮ふところを決せしむるの感があつた。

爾後聯隊においては、毎年七月二十一日をもつて軍旗拜受紀念日となし、盛大なる祝典を催して大正十三年に及んだ。然るに七月二十一日は時恰も盛夏に際し、且つ第二期檢閲の時期なので、同年からはこの日に式典のみを擧げ、別に櫻花爛熳の好季たる四月二十一日を以つて軍旗祝日とし、各種の競技や餘興等を行ひ、官民を招いて宴を張り、また一般に開放して營内および餘興の觀覽を許し、もつてその歡興を俱にし、軍旗の榮譽を偲ぶと同時に、軍隊と地方民との接近を計ることに努めてゐる。



## 第二章 皇室とわが聯隊

### 一、明治天皇

臨幸と御親閲 明治二十年二月十五日 明治天皇 昭憲皇太后兩陛下には、御同列を以つてわが聯隊に行幸啓あらせられ、直ちに大阪城東練兵場に於いて觀兵式を御親閲遊ばされ、翌十六日茨木地方における諸兵聯合野外演習を襄覽の上、御機嫌うるはしく還幸啓あらせらる。その後二十四年五月十三日 明治天皇には、當時御來朝の露國皇太子ニコラス親王と、御同列をもつて神戸に御臨幸あらせられ、聯隊は儀仗として服務申し上げた。

御大喪と聯隊 然るに明治四十五年七月二十日、突如として聖上御不例の趣發表せられ、國民の驚愕一方ならず、ひたすら御平癒を祈り奉つた效もなく、同月三十日午前零時四十三分つひに崩御あらせらる。將卒一同恐懼措くところを知らず、聯隊長は即時部下一同を代表して電報をもつて天機並びに御機嫌を奉伺し、將校集會所において御眞影奉拜式を行ふ。翌三十一日から五日間廢朝仰せ出されたが、かねての 聖訓を體し、練兵・教育のことは一日も懈らなかつたのである。

越えて九月十三日東京青山練兵場(今の明治)において、御大葬儀を執行あらせらる。につき、聯隊からは聯隊長以下各級代表者軍旗を奉じて上京、參列の光榮に浴す。爾餘の諸員は當日午後八時、靈柩宮城御發引の時刻を期し、營庭に神籬を設置して遙拜式を舉行し、ついで十五日は京都桃山において御埋棺式御執行につき、その時刻たる午前七時、聯隊は再び營庭に整列して遙拜式を施行し、永きお訣れを告げ奉つたのである。

### 二、昭憲皇太后御大喪

明治天皇御登遐の後いまだ幾何もなく、國民の哀悼尙ほ胸に新たなる大正三年四月十一日午前二時十分 皇太后陛下には青山御所において崩御遊ばさる。

畏くも陛下には御仁慈の御心いと御深くわたらせられ、特に陸海軍人を愛撫したまひ、日清・日露兩役中の如き、御手づから捲かせられし繻帶を野戰病院に下賜せられ、わが聯隊將卒中にもその恩賜品を拜受して感涙に咽んだものも少からず 陛下崩御の報に接しあだかも慈母を喪つたやうに哀哭したのであつた。廢朝五日間謹慎して追悼の誠を捧げ、また五月二十二日御大葬儀執行に付、聯隊長杉村勇次郎以下七名上京參列の光榮に浴す。



### 三、大正 天皇

**行啓と御親閱** 明治四十年六月六日 先帝陛下いまだ東宮にましませし頃、當聯隊に行啓遊ばされ、將校集會所において御少憩の後、將校の擊劍並に倉庫等裏覽の上、御機嫌うるはしく還啓あらせらる。

**御即位禮と大禮觀兵式** 明治天皇崩御あらせらるゝや、四十五年七月三十日、皇太子嘉仁親王殿下には即時御踐祚あり、天壤無窮の皇位に即かせたまひ、「大正」と改元あらせられ、翌三十一日陸海軍人に對し特に優渥なる 勅諭を賜ふ。

越えて大正四年十一月十日、京都御所において御即位の大典を挙げさせらる。よつて當日午後二時聯隊は重複從隊に集合、京都方向に面して遙拜の上、勅諭を捧讀し、同三時三十分聯隊長の發聲をもつて『萬歲』を三唱し、寶祚の無窮を祈り奉つた。

十六日には大饗第一日の御儀を行はせられ、曹長同相當官以上に對しては饗饌を賜ひ、下士卒一同に對しては酒饌料の御下賜があつた。又十二月二日東京青山練兵場（今の明治）において、大禮觀兵式舉行につき、聯隊からは杉村聯隊長以下七十九名をもつて代表隊を編成し、軍旗を奉じて上京參列の

光榮に浴した。この日特に優渥なる 勅語を賜はり、參列者一同には酒肴料を下賜せられた。

**御内帑の下賜** これより先き大正四年三月十日、陛下には陸海軍將校御獎學の恩召をもつて、御内帑金一萬圓を御下賜あらせられ、師團司令部を経て金六十六圓を當將校團にも配當せられた。將校一同感激の至りに堪へず、右恩賜金をもつて有益なる圖書を購入して文庫に備へ付け、將來いよく學術の研鑽に力め、もつて 聖旨に副ひ奉らんことを期したのである。

**御大喪と聯隊** 大正十五年十二月 聖上御病篤しとの趣 御發表あり、將卒一同痛心措く能はず。十二月十七日には聯隊内にある鎮國神社前に集合して御病氣御平癒を衷心より祈願し奉つたが、その効もなく二十五日午前一時二十五分遂に葉山後用邸に於て崩御あらせらる。聯隊は 明治天皇御大喪の當時に做ひ哀悼謹慎の意を表し奉つた。

越えて二月七日東京新宿御苑に於て御大葬儀執り行はせらるゝにつき、聯隊からは聯隊長以下各階級代表者十三名軍旗を奉じて上京、御儀式に參列す。爾餘の將卒は當日午後十一時輜車宮城御發引の時刻を期して營庭にて遙拜式を舉行し、翌八日午前八時覆練兵場に於て 大正天皇の御遺影を奉拜し聖徳を偲び永き御訣れを告げ奉つたのである。



#### 四、今上天皇陛下

御成年式 大正八年五月七日、皇太子裕仁親王殿下御成年式御舉行につき、聯隊は重複縦隊に集合、東京方向に面して遙拜式を行ひ、謹んで殿下の御成年を壽ぎ奉ると、もに、皇室の御繁榮を祈り奉つたのである。

御即位禮と大禮觀兵式 大正十五年十二月二十五日皇太子裕仁親王殿下御踐祚、即日「昭和」と御改元あらせらる。昭和元年十二月二十八日朝見式御舉行、ついで陸海軍人に優渥なる勅語を賜はり同三年十一月十日、京都皇宮において御即位の大典を擧げさせらる。依つて當日午後二時聯隊は第一覆練兵場に集合、御眞影の奉拜式及、勅語の捧讀式を舉行、ついで京都方向に面して營庭に集合、正三時を期し聯隊長の發聲を以て萬歳を三唱し、紫宸殿に對して遙拜を行ひ寶祚の無窮を祈り奉つた。

又十六日大禮第一日に當り、曹長同相當官以上に對しては御饗饌の御沙汰あり、福知山饗饌場たる第一覆練兵場に於て饗饌を賜はり、下士卒一同に對しては酒饌料の御下賜があつた。

更に十一月十七日より十一月二十二日まで伊勢神宮御親謁の儀に際し、伊勢行在所儀仗衛兵として遠藤岩永兩大隊長以下二百五十三名軍旗を奉じて宇治山田市に到り、御警衛の大任に就き無事その任務を盡したのである。

十二月二日東京代々木練兵場に於て大禮大觀兵式舉行あらせらる、につき、聯隊長高田大佐以下七十六名代表部隊を編成し、軍旗を捧持して盛儀に列するの光榮に浴した。

御眞影の下賜 左の通り御眞影を下賜せられ、それ／＼奉戴式を舉行す。

今上陛下御眞影 昭和三年十月十七月下賜

皇后陛下御眞影 昭和三年十月十七日下賜

#### 五、各宮殿下の御來營

能久親王殿下御來營 明治十八年八月七日、北白川宮能久親王殿下には、大阪府下水害後の狀況御視察のため、大阪鎮臺へ御來營、高島鎮臺司令官に令旨を賜はり、さきに府下出水の際における聯隊の勤勞を嘉賞せられ、將校以下に酒饌料を下し給はつた。この日觀兵式を舉行し、銃槍試合を御覽に供す。

越えて同二十七年九月二十四日能久親王殿下には、再び當練隊に御來隊あらせられ、出師準備・武



装等の御檢閲、竝に兵器・兵舎等御覽の上御歸還遊ばさる。

熾仁親王殿下御來營 明治二十年五月十五日、明治天皇 昭憲皇太后には、御同列をもつて當

聯隊に行幸啓あらせられたことは前に述べた通りであるが、この日有栖川宮熾仁親王殿下にも當聯隊兵營に御來營あらせられ、親しく各兵舎を御巡視遊ばされた。

茂麿王殿下御宿泊 昭和四年五月三日聯隊が滿洲守備中、山階宮茂麿王殿下には、陸軍士官學校

生徒として滿洲御見學に際し、將校集會所に御一泊遊ばさる。

李鍵公子御宿泊 李鍵公子には陸軍士官學校生徒として滿洲御見學に際し、昭和五年五月二十五日

御來隊將校集會所に御一泊遊ばさる。

### 六、侍從武官の御差遣

明治二十五年四月四日、侍從武官歩兵少佐米田虎雄來營、士氣の振興および衛生の景況等を實視して歸還せらる。

明治二十二年二月四日、侍從武官佐々木大佐來營、畏き思召を傳達せられ、營内を巡視して歸還せらる。

明治三十四年二月二十一日、侍從武官渡邊少佐來營、中隊教練・新兵各個教練・被服倉庫・兵舎・將校の擊劍および學科等を視察せられ、終つて優渥なる 聖慮を傳達せらる。

大正七年七月二十三日、當時召集中であつた豫後備役將校以下の教育狀況視察のため、侍從武官尾藤少將を御差遣あり、次の 聖旨を傳達せしめらる。

天皇陛下におかせられましたは、今回第十師團下における勤務演習召集の趣聞召され、その狀況實視のため、茲に本職を御差遣あらせられました。尙ほ本演習に關係せる將校以下演習勤務者に對し、酷暑の候殊に御苦勞に思召され給ふことを、謹んで御傳へ致します。

この有りがたき御慮を拜した將卒は、たゞ感激に咽び、一意奉公の念を堅くするのみであつた。

大正七年八月十一日 動員部隊狀況視察のため侍從武官陸軍少將大内義一を差遣はさる。

大正十二年七月四日 演習召集者狀況視察のため侍從武官陸軍歩兵少佐大島陸太郎を差遣はさる。

昭和五年二月二十二日 天皇皇后兩陛下に於かせられては、侍從武官陸軍少將瀨川章友を差遣はし滿洲駐劄中に於けるも當聯隊の狀況を實視せしめられ、優渥なる 聖旨を賜はり、且特別の思召を以て將校以下に酒肴料と、傷病者に御菓子料とを下賜せらる。將校以下感涙にむせび骨をもとほす滿洲



の寒さもものともせず、益々奮勵努力 聖旨に副ひ 率り、滿洲駐劄の大任を完うせんことを期したのであつた。

### 第三章 日清戦役

#### 一、わが軍の連戦連捷

明治二十七年八月一日、清國(今の中 華民國)に對する宣戰の詔勅が發布せらるゝや、駐清公使小村壽太郎は國旗を撤して北京を引き揚げ、同時に動員令は續々として各師團に下り、大元帥陛下には御躬ら軍國のことに當らせたまふべく、九月十九日大本營を廣島に進めさせられ、又第一軍の編成成りて山縣大將(有)軍司令官に任せらる。

九月十五日大本營廣島に着す。この日野津中將の率ゐる第五師團は、敵將左寶貴が五萬の大兵を率ゐる據れる平壤の總攻撃を行ひ血戰二日、翌十六日つひにこれを潰亂せしめ、またその翌十七日伊東中將の率ゐるわが聯合艦隊は、黃海において敵の主力艦隊を破り、稀世の大勝を博して大同江に凱旋する等、陸海の捷報相ついでいたり、海上權は全くわが有に歸した。

ついで十月十七日山縣司令官は自ら第一軍の全部を提げて九連城を衝き、一舉にこれを陥れ、大山大將又第二軍を率ゐるて、遼東半島花園河口に上陸し、第一師團長山地中將は、十一月三日金州城を



圍んで、一撃の下にこれを攻略、併せて大連灣を占領した。越えて十七日早天、第二軍は全力を擧げて旅順要塞の總攻撃にかゝり、海軍の掩護射撃の下に、これ亦僅々一日にして、その全砲を奪取するにいたつた。

一方第一軍方面にあつては、往々連山關・岫巖・柞木城を抜き、十二月十二日續紛たる飛雪を冒して、第三師團は海城を攻略し、翌二十八年一月十九日、第二軍司令官大山大將は、臨時山東作戰軍を編成、これを提げて先づ摩天嶺を奪取し、ついで威海衛の諸砲臺を陥れた。こゝにおいてわが聯合艦隊は、四月二日から六日にわたり、威海衛の敵艦隊を夜襲して殆どその戰鬥力を奪つたので、十二日敵の提督丁汝昌は殘艦をわれに獻じて自殺した。

これより先き一月十日、乃木少將は蓋平を屠り、山地中將は太平山の敵を掃ひ、こゝに第一・第二軍の連絡を通じ、更に三月四日、第三・第五兩師團は、協力して牛莊城を挾撃、猛烈なる市街戰の後つひにこれを占領し、乃木少將は更に長驅して、同月七日營口を陥れた。

### 二、動員と出征

動員令下る　かくてわが軍第一期作戰は終り、これからいよいよ第二期作戰に入り、諸軍を營口に

集中して直隸原野に一大決戰を試み、長驅して北京を衝き、清國をして城下の盟ひをなさしめんとするるのである。この時にあたり近衛師團と、もに、北京突撃の急先鋒たらしむべく、わが第四師團(當時第八旅團に屬す)に動員を令せられた。

即ちわが聯隊が動員令に接したのは、明治二十七年十一月二十六日、將卒思はずも歡呼の聲を揚げた。爾後殆ど晝夜兼行動員事務を進め、十二月二日之を完結して、全く出師準備を整へたのみならず、従來の村田單發銃を新式の村田連發銃と交換し、新銃の銃器に心いよく躍り、一日千秋の思ひをもつて出征の命を待ち、捷報のいたる毎にわが將卒は腕を扼し脾肉を歎じつ、五閱月の長きに及んだが、二十八年四月一日、待ちに待つた出征の命に接した。

征途に上る　即日出發の準備を整へ、熱誠溢るゝ國民の歡呼に送られつゝ、勇躍して屯營を出發しまづ廣島に集合した。世はいつしか春立ちそめ、霞のひまに野もせの千草漸く色めきわたり、やがて櫻も咲くべきを、故國の春に背きわが聯隊は勇ましく征途に上つたのである。殊に聯隊の屬する第二軍が、懸軍長驅、敵の首都北京を衝くべく出動してゐることは、自づと軍の行動によつて窺知されてゐたから、將卒の士氣はさながら冲天の概があつた。かくて十二日宇品出帆、十七日大連灣に投錨、第二軍の戰鬥序列に入る。當時における聯隊の重なる幹部は、左の通りであつた。



聯隊長大佐飯田俊助、聯隊副官大尉三浦忠行、聯隊旗手少尉能勢藤次郎、第一大隊長少佐安村範雄、第二大隊長少佐松井吉統、第三大隊長少佐佐治爲治

柳樹屯上陸 しかるに時あだかも敵の北洋艦隊全滅し、蓋平、牛莊その他の要害相ついで陥り、清國の戰意漸く衰へ來るの色があつたが、突如休戰の命あり、聯隊は船中であつて後命を待つこととなつた。ついで再び命令が下り

「講和條約批准交換のため更に休戰を繼續する」

といふのであつた。動員下令後五ヶ月を骨肉の歎に送り、漸く出征していまや敵地を眼前にしなから、圖らざりき一彈を放たずして早くも講和成立をみんとは、將卒一同腕を撫して無念がつたのであつた。併し船内の起居は、惡疫蔓延の虞れがあるので、聯隊は二十二日柳樹屯に上陸して、一旦貔子窩附近に駐軍、五月十四日から更に宋家屯・陳家中附近に移り宿營した。

### 三、占領地守備と凱旋

平和克復と占領地守備 これより先き清國芝罘において、日清兩國間に講和條約の批准交換を終り、明治二十八年五月十三日をもつて平和克復の 詔勅を發布せられ、また陸海軍人に對して特に優

渥なる 勅諭を賜ふ。

かくて國を擧げて戰捷に喜悅し、津々浦々まで 皇室の御稜威を仰ぎ、國軍の武勇を稱へつゝある時、突如として露獨佛の三國から干涉を加へられ、幾多生靈をもつて購ひ得たる遼東半島を、東洋平和といふ美名を以て清國に還附するの已むなきに至り、五月十日之に關する 大詔が渙發せられ、わが國民は天を仰ぎ地に伏し、切齒扼腕してこれを清國に還附したのである。しかし二個師團を半島守備のため駐屯せしむることとなり、こゝに師團は第二軍の戰鬪序列を解かれ、占領地總督佐久間中將の指揮下に入り、海城に北進して第五師團と交代すべき命をうけ、五月二十九日宿營地出發、まづ第一大隊を營口に前進せしめて同地の守備隊と交代させ、第二大隊(第五中隊は破臺子・大石橋)・第三大隊は、六月八日目的地に到着して第五師團と交代し、附近一帶の守備に任じた。

凱旋 爾來駐屯すること約半歲、かねて日清兩國間に行はれてゐた半島還附に關する商議が進捗し、十一月十八日佐久間總督は半島撤去の命を受領し、ついで聯隊も凱旋を命ぜられ、逐次宿營地を引揚げて、二十九年一月二十六日柳樹屯から乗船、同月二十九日和田岬上陸、鐵道輸送をもつて大阪に凱旋し即時復員を終つた。この出征中戰病死または負傷後病死したものは、少尉島信太郎以下二百四十一名であつた。



### 第四章 日露戰役

#### 一、開戦の理由

日清戦争の結果、遼東半島は一たびわが領有に歸したが、露獨佛三國の懲慝に基いて、これを清國に還附したことは、前章に述べた通りである。しかるに明治三十年の秋、獨逸はいはゆる宣教師事件に藉口して、膠州灣を占領し、露國も亦その輩に倣ひ、軍艦を旅順口に進めてこれを占領した。

元來この旅順口は渤海の關門に位し、天險まれにみる軍事上の要地で、かつてわが軍が、幾千百の屍を積み血を流して、日章旗を樹てたところである。それを彼れ露國が、東洋平和の美言の下に清國に還附せしめたのは、實は射ら代つてこれを占領せんがために外ならなかつたのである。彼が清廷を脅迫し、わが國の面目を蹂躪して、旅順口を軍事的に占領したのは、實に明治三十三年三月二十七日であつた。

殊に同年五月北京附近に義和團の變起るや、露國は機乗ずべしとなし、名を草賊の征討に假り、先づ黒龍江・西伯利亞の二軍團を滿洲に出動させ、尙續々大軍を派遣して、七月十四日から公然滿洲に

侵入し各方面から逐次糧食の歩を進め、同年十一月には早くも滿洲の三省を確實に占領したのみならず、尙ほこれに慊らずして、竿頭一步を進め、韓國に向つても侵略の策を弄するに至つた。

かくの如きは、明かに清國との公約を破棄し、また列國に對する保證を無視せる不信の行爲であるばかりでなく、直接わが帝國の存在を脅威するものであるから、帝國政府は之を默視する能はず、まづ至誠を披瀝して露國政府との間に交渉を開き、眞の東洋平和を求むるため和衷協商の道を講じたけれども、彼は誠意をもつてわれを遇せず、半歳の久しきに亙つて徒らに交渉を遷延せしめ、その間にますます陸海の軍備を充實し、つひには韓國の境上に臨み陽にわれを威嚇するやうな行動に出たから、國民の公憤は勃然として發し、國論沸騰、政府に開戦を促し、風雲の徂徠すこぶる急であつたが、彼我の妥協つひに成らず、此上は干戈を以て曲直を分つの外なきに至り、翌三十七年二月八日、わが驅逐艇が旅順港の敵艦を夜襲したのを第一戦として、日露兩國は砲火相見ゆること、なつたのである。

#### 二、動員と出征

舞鶴守備と海岸監視 日露の風雲急を告ぐるや、三十七年二月五日、第十師團長(當時聯隊は第十師團歩兵第二十旅團



すに屬)より電令あり、舞鶴要塞警急配備のため、丸山少佐を長として四個中隊を編成、軍旗に對し告別の後、二月六日午前七時出發せしめた。これは露領と一衣帯水なる裏日本の要地に、何時敵軍が襲來するやも知れぬからであつた。いまだ動員の下令なくして、戰雲いよく急、將士の意氣全營に横溢したのは當然である。

しかるに同日午後更に師團長から電命あり、二宮中尉を長とする下士以下九名を小濱灣泊村高地へ、また岡村中尉を長とする下士以下九名を宮津灣日置村高地へいづれも海岸監視哨として服務せしむべく、七日午前七時共に出發せしめた。八日第三大隊殘留員全部を舞鶴へ派遣し、臨時混成派遣隊と交代せしむ。舞鶴要塞警急配備派遣隊は三月八日その任務を解かれて歸營し、また兩岸監視哨も四月廿五日交代の上歸營した。

動員下令 これより先き三十七年四月十六日午前十一時、聯隊は待ちに待つたる動員令に接した。この一報一たび傳はるや、營内には期せずして歡呼の聲が起り、光景壯絶を極めた。聯隊長桂大佐は、即時將校同相當官一同を將校集會所に召集して、各官の戰時職務を命課し、將卒いづれも勇躍しつ、晝夜兼行出征準備にとりか、つた。同月二十七日動員早くも完結し、三十日練兵場において武装検査の後、勅語を奉讀し、終つて聯隊行軍を行ひ、堀村・蛇ヶ鼻から吳服町を北進、和久市から本

村に出て歸營したが、日射病患者一名を出したのみで、全隊の士氣太だ旺盛であつた。

征途に上る 南尖嶼上陸 かくて五月五日、勇ましき端午の節句をもつて、いよく長驅遠征の途に上ること、なつた、この日福知山町を始め附近各町村の有志等は、聯隊の首途を壯んならしむべく、縁門を作り彩旗を連ね、煙火を打ち揚げ、尙ほ沿道堵をなし、熱誠溢る、歡呼の聲を擧げて送別の意を表し、出征將卒の意氣まさに天を衝くの概があつた。同夜は柏原町に宿營、ついで三田・西ノ宮に各一泊して八日神戸に到着、九日第一・第二大隊、十日聯隊本部および第三大隊の順序に乗船して兵庫港を解纜した。

海上恙なく十九日清國盛京省南尖嶼に上陸し、大孤山上陸軍の前衛となる。この時における前面の敵情は、大孤山附近にあつた敵は柘木城方面に退却し、岫巖には微弱なる騎兵があるらしく、九連城に破れし敵の大部は連山關・摩天嶺の間にあつて防禦工事を施し、その一部は懸陽邊門および寨馬集附近を固守してゐた。尙出征の重なる野戰隊幹部は、左の通りであつた。

聯隊長大佐桂眞澄、聯隊副官中尉宇治虎雄、聯隊旗手少尉山名秀太郎、第一大隊長少佐森駿三郎、第二大隊長少佐今井兼吉、第三大隊長少佐佐藤彦人、

曹家屯の偵察戰 聯隊最初の戰闘 さて聯隊は豫定の如く、五月二十日午前七時二十分王家屯南方



に集合、同三十分第一・第三大隊の順序をもつて出發し別に第十中隊を先頭に行進せしめ、土城子へて賈家屯にいたり、岫巖方面に對して警戒せしむ。また大孤山を準備してゐた第二大隊には、聯隊が同地通過の際合すべきを命じた。午後七時第一大隊は隨家瓦房附近に、第三大隊は紅家堡子附近に宿營しようとしてゐるところへ敵の騎兵約百二十、曹家屯方向から前進し來るを發見、直に諸隊に警戒を傳へて、これに對應する準備隊形をなし、第三大隊長は第十二中隊から小旗少尉の指揮する一隊を派遣してその偵察に任せしめた。しかるに同八時二十分、敵は第九中隊に向つて襲撃して來たので、同中隊は急射撃をもつてこれを撃退した。また先に第七中隊から派遣された森下特務曹長の指揮する偵察隊は、長家堡子で敵に遭遇してこれを潰亂せしめ、敵の騎兵大尉一名を捕虜とした。聯隊最初の戦闘に幸先よしとばかり、一同快哉を叫んだのであつた。この日の戦闘における聯隊の損害は、戦死二等卒小谷爲吉、負傷一等卒山内彌吉の兩名であつた、これは聯隊最初の死傷者で、敵騎敗走後土人の報告により、馮家屯に潜伏せる敵兵を拿捕すべく奮闘中、敵弾に殞れたのである。

### 三、岫巖附近の戦闘

溝蓮河附近の戦闘 六月三日敵の騎兵約五百砲六七門は、午前七時ごろ溝蓮河南方高地に現はれ、

わが陣地を砲撃した。森少佐は第一大隊(二中)を指揮し増援として賈家屯に向つて出發、桂聯隊長は賈家屯西方陣地に達し、直に全隊の指揮を執るに至つた。午前八時三十分敵の騎兵約五十、溝蓮河に進入し來り、その後方には約五百の騎兵が續行するのを確めた。同九時十一分、第十二中隊および楠田小隊によつて火蓋は切られ、猛烈なる一齊射撃を注いだので、敵は潰亂して溝蓮河南方高地に退却し、一部は踏みとゞまつて徒歩戦に出て、さがしくも頑強に抵抗をつづけた。そこで、第九中隊および第十一中隊の一小隊は、第十二中隊に延伸増加して、ますます敵に火力をそゝいだから、敵は混亂して、溝蓮河南方高地に姿を潜めた。依つて第九中隊及び第十一中隊の一小隊は何家堡西方高地に進出して追撃に移り、逐次前進中、何川溝西方高地に潜匿せる敵砲兵から不意に猛射をうけたので、散兵を悉く後方に隠蔽し、第九中隊および第十一中隊の一小隊を陣地の右翼に位置せしめ、戦闘の推移を窺つてゐた。敵は優勢を恃んで漸次攻勢に出て、十時五十分には敵騎悉く下馬して戦線に就き、何家堡西方高地に進み來り、敵の砲兵亦更に陣地を進めて蓮溝家東端に現はれ、漸次敵の銃砲火は猛烈となり、聯隊の苦戦刻々に加はり、死傷相づくに至つた。午後七時三十分、暮色全く戰場を蔽ふや、彼我自から射撃をやめ、戦闘隊形のまま、その地に露營した。明くれば四日午前四時、東天漸く白むころ敵陣をみるに、間として守兵なきもの、やうであつたから、直に偵察せしめたところが果せ



るかな敵は夜暗に乗じて退却し一兵をも止めなかつた。夜來警戒を嚴にし、本日こそは一戦の下に彼を潰滅せしめんと氣負ひこみしわが將卒は、あまり敵の脆さにたゞ呆然として苦笑するばかりであつた。命により暫く後方に退き休憩した。昨日來の戦鬪における聯隊の損害は、戦死中尉中川和三郎外卒一名、負傷少尉榎田寛一以下七名であつた。

**岫巖の占領** 越えて六月八日聯隊は丸井少將の指揮下に入り岫巖攻撃に参加した。これより先き獨立第十師團は六月五日大孤山を發し、六日土城子に到着したが、當時敵は日に南下し、將さに第二軍と衝突せんとする状況にあつたから、岫巖の攻略は一日も緩うすることを許さない形勢になつた。

六月七日丸井支隊は溝蕪河附近に集中し、淺田支隊は沙里附近に位置し、大孤山上陸軍の主力は土城子附近に集合してゐた。第一大隊は丸井先進部隊に屬し、その他は師團長の直轄となり、八日諸隊は豫定の通り行動を開始し、先進部隊は早くも老岑附近の敵を撃攘し、ついで裡廟溝南方の高地を略し、淺田支隊の到着をまつて、九日拂曉前面の敵を攻撃し、難なく敵陣を占領して岫巖城に入つた。敵は析木城および蓋平方向に退却した。この間第一・第二大隊は肖家堡にとゞまり或は斥候を出して敵狀を偵察し、或は宿營地の警戒に任じなどして、友軍の活動を援けつゝあつた。

#### 四、分水嶺附近の戦鬪

わが前面の敵は依然として分水嶺を占領し、ますます防禦工事を嚴にして之を固守したので、師團は近衛師團と協力して、この敵を包圍攻撃するに決し、近衛師團の淺田支隊は正面から同録田支隊はその左翼に連なつて大桑皮谷方面から、またわが丸井支隊は主力をもつて敵の背後に迫り、東條支隊は専ら左翼に策動して、分水嶺の攻撃を開始した。乃ち第一大隊は丸井支隊に屬し、二十五日早朝岫巖出發、析木城街道を分水嶺に向つて前進し、第二大隊は後備大隊と代り岫巖に來つて宿營、第三大隊は二十六日夜半師團長直轄の下に、析木城街道を王家堡子に向つて前進した。

**分水嶺の占領** 二十六日わが丸井支隊は、接官所に向つて前進を起したが、午後二時ごろから左側即ち東條支隊の正面に當つて、漸次砲聲が熾んになつたので、これと連絡をとることに努めた、併し四道崗一帶の分水山脈は、さながら屏風を立てたやうで、容易に連絡を通ずることが出來ず、同二時三十分漸く接官所に到着した。二十七日支隊は一部隊をして接官所附近で、東條支隊と協力して側迂回の運動を掩護させ、他の主力は分水嶺の後背部に迂回すべく、夜半運動を起し午前六時漸く三道溝西方地區に達した。依つて同七時から戦鬪を開始し、激戦の後十時半敵を驅逐して、支隊の一部は



松陀子西方附近に進出した。支隊主力亦ついて前進しよとしたが、黄昏となつたので三道溝附近に停止し、又第三大隊の属した師團主力は日没ごろ分水嶺一帯の陣地を占領した。この戦闘において滋川特務曹長以下五名の負傷者を出した。

七月一日聯隊は大梨樹の宿營地を發して岫巖に到着、爾後折木城攻撃開始まで十九日間をこゝに過した。是より先七月二日師團は新に編成された野津大將の第四軍戰闘序列に入つた。

### 五、折木城附近の戦闘

**牧牛河へ進出** 分水嶺の天嶮を失つた敵は折木城にいたる間更に據守すべき地點がないので、當時敵の根據地であつた蓋平も、もはや支へがたき運命に陥つてゐた。聯隊は丸井少將の麾下に入つて折木城方面に前進し、牛心山方面の守備に服することとなつた。時あだかも満洲の雨期に入り、連日霖雨うちつゞき、泥濘膝を没し、大部隊の行進にはすこぶる困難を感じたが、七月二十日午前四時折からの大雨を冒して岫巖を發し、同夜は王家堡子附近に宿營。翌二十一日早朝、今井少佐は部下二中隊を率ゐて南馬峪附近にいたつて前哨となり、聯隊は午前八時三十分黄家堡子に達した時、佐藤少佐の報告により一面山村附近には約二中隊の敵があり、その兩側高地の展望哨からは絶えず銃火を送り、

また三家子附近および花紅峪に優勢なる敵兵が屯在して居るらしきを知り、更に敵情偵察の必要を認め、直に第十中隊の一小隊を古賀中隊に増加せしめ、古賀大尉の指揮をもつて盤嶺通路方面を偵察せしめた。午後二時半古賀・植田の兩中隊は交戦しつゝ、前進し、古賀中隊は四方山腹、植田中隊は本道上において牧牛河北方約千メートルの線を占領し、前面の敵と對峙しつゝ、日没となる。この日降雨激しく、加ふるに濃霧のため敵の兵力および死傷數等を確認し得なかつたのは遺憾であつた。

**盤嶺附近の戦闘** 壯烈なる山上の肉弾戰 二十二日聯隊は丸井少將の麾下を離れて支隊となり、午前八時三十分南馬峪南方の守備線を發し、黒嶺北方高地に向つて前進し、一部隊をもつて三家子および吉洞峪方向に對し、支隊の運動を掩護させ、且つ前方を搜索させることとした。命により今井大隊は、第五・第六・第十・第十一中隊(一小)をもつて、盤嶺通路を占領して攻撃に移つた。すてにして第三・第一大隊も南馬峪に到着したので、今井少佐は直ちに攻撃前進を命じたけれども、第五中隊の先頭が牛心山北方に達した時、一面山方面の敵から一斉射撃をうけた。敵は巧に地形を利用して隠蔽射撃を行ふため、意の如く偵察することが出来ない。零時四十五分右翼隊たる第六中隊の方面にも亦一斉射撃が起り、左翼隊たる第十一中隊は前進路嶮惡のため攻撃に困難を感じてゐる中に、第五中隊の二小隊は本道の西方二百八十一高地を占領し、當面の敵に當りながら古賀中隊と連絡を通ずること



が出来た。これに勢を得た第十一中隊は、第五中隊の左翼に散開して、一面山の敵と對戦した。敵の陣地は斷崖の上であり、その兵力は約三百で、有利な地物を利用してわれを瞰射し、わが隊は死傷漸く續出するに至つた、しかもわが射撃は地形に禍ひされて、十分に效力を發揮することが出来なため、奮戦二時間に及んだけれども敵は頑として動かず、苦戦をつゞくる中、つひに俣野少尉の戦死を見るに至つた。やがて第六中隊及第十中隊の一小隊が、獅子奮迅の勢ひをもつて突撃し、二五五高地を略取した。さすがの敵も左側から崩れて全般に動搖を示したので、機を逸せず第五・第十一中隊は一齊に突撃に移り、一面山南麓の稜線に進出した。今井少佐はもはや損害を顧慮して、この上時刻を推移するに忍びず、伍長一瀬文蔵をして十六名の決死隊を率ゐしめ、敵の右翼一面山の絶頂に向つて、肉弾突撃を敢行せしめた。敵は山稜の地區に據つて猛射をつづけ、さすが決死の勇士も容易に進みかねたので、今井少佐は突嗟に平野少尉(藏)に命じて、第十一中隊の二分隊を率ゐる續進せしめ、兩隊は互に呼應しながら岩石を傳ふて辛くも絶頂に達し、喊聲と共に敵中に突入してついにこれを潰亂せしめ、山上に日章旗を押し樹てた。各隊これをみて大いに奮起し、一齊に進撃を始めたから、敵は勢に呑まれて大いに動搖し、つひに全線列を亂して北方に退却した。時に午後六時。第六・第八中隊は直に追撃に移り、敵を福家堡子以西に撃攘して、同六時四十分全く敵陣を占領した。この戦闘

において敵の遺棄せる死體は將校三・下士以下七十七名に及び、下士以下八名を捕虜とした。もつて激戦の程度を知るに十分であらう。尙小銃四二、小銃彈一五九八發、その他多數の武器を鹵獲した。聯隊の損害は、戦死少尉俣野延次郎以下十名、負傷下士以下二十三名。

**石頭塞附近の戦闘** 二十四日聯隊は、主力をもつて黒峪に前進すべき命をうけたので、まづ石頭塞東方高地にある敵(歩兵約一聯隊砲四門)を驅逐するに決し、七月二十五日午前六時、二大隊は正面の敵に向つて攻撃を開始し、敵亦これに應戦して戦闘の幕は開かれた。然るに敵が正面のみを顧慮して、右側背の配備薄弱なるを確めた第一大隊は、標高一九八高地一帶の地區を占領して突如攻撃を開始した。不意の射撃に敵は周章狼狽、わづかに數分間の抵抗を試みたのみで、脆くも析木城方向に退却した。聯隊は直に追撃に移り、師團所命の黒峪西方高地に開進し、午前八時三十分難なく之を占領、第一大隊を右翼守備隊、第三大隊を左翼守備隊、第二大隊を豫備隊として黒峪に宿營、同夜は至嚴の警戒中に経過し、二十六日午後一時三十分各隊出發、第三大隊は大道峪の東方をへて要屯に前進し、その他の部隊は花紅峪から羊拉峪に前進、第三大隊は無事要屯に達したが、本隊の進路は險峻にして到底駄馬の通過を許さなかつたので、一時花紅峪に停止して宿營した。二十七日第一大隊を第一線として、午前三時三十分出發、黒峪西方高地に向つて前進、ゆくゆく第一・第二中隊は珠現屯南方高地で約一大隊



の敵歩兵を撃攘し、翌二十八日午前十一時蔡家溝に着し、同地附近に村落露營を行ふ。

柞木城の占領 か、る間に第二軍は二道溝・温家溝・高刊の線に進出して、柞木城攻撃の戦機漸く熟し、三十日各隊何れも運動を起した。聯隊は師團豫備隊となつて、王家堡子に入り村落露營す。三十一日午後四時更に旅團豫備隊となり、逐次前進して三角山西南約三百米の地點に露營した。この夜第三大隊は、三角山西南約二千米の無名部落東方鞍部に獨立下士哨を出して東方凹地を警戒し、第二大隊は露營地西方鞍部に下士哨を出し、第三大隊からは風紀衛兵として、一分隊を旅團司令部に派遣した。この露營地は水薪に乏しく、炊爨上非常な困難を感じ、加ふるにこの日炎熱やくが如く、將卒の疲憊その極に達した。しかるに敵は前日來陣地防禦の物々しかりしにも似ず、わが軍の威容を望むや、旗を巻いて遠く海城方面に退却を開始したので、直に追撃に移り、聯隊は(第一大隊及第二大隊)丸井少將の麾下に屬し、第一大隊は師團豫備隊となり、ゆくゆく敵を急迫して、その夜は排路屯・梨樹溝附近に宿營、三日も尙この地に滞在して守備警戒に努めた。

海城の占領 しかるに前日來海城の敵は動搖し、また同地の火災は今尙やまず、敵の大部は海城以北に退却しつゝあるもの、如く思はれたので、聯隊長は海城占領先登第一の功績を收むべく、第三大隊隊長佐藤少佐に、部下約二中隊を授け、將校斥候として同地に向はしめた。同隊は勇躍して海城に向

つたけれども、同隊が午後三時海城に到着した時には、すでに同地は歩兵第三十三聯隊の占領するところとなり、日章旗の翻揚たるを見る。惜しや長蛇を逸して、海城占領の名譽は他に譲らざるを得なかつたのである。五日柞木城附近の戦鬪に對し 優詔を賜はつた。

### 六、遼陽の會戰

先頭第一の名譽 わが聯隊の殊勳 遼陽は鴨綠江の水源に蟠屈する長白山脈と、方二十哩にわたる遼河平原との交界線に接する要地で、敵將クロバトキン任をうけて滿洲に入るや、こゝをもつて第一期作戦の主陣地と定め、わが軍をこゝに誘導して、一舉に撃滅するの計畫を樹て、いまやこの地に集結したる敵の兵力は、その數實に十六萬、砲亦六百門と算せられた。すてにして兩期も去つたので、わが大山總司令官は馬を海城に進めて三軍を統べ、八月二十四日をもつていよいよ遼陽總攻撃の命を下した。黒木軍まづ運動を起し、ついて野津・奥兩軍も起ち、激戦旬日、多大の犠牲を拂つた後九月四日、全く遼陽およびその附近を攻略した。この戦鬪においてわが聯隊は、過半を失つたが大いに奮戦苦闘し、先頭第一を以て旭旗を遼陽城頭に翻へしたことは、わが聯隊史上特筆大書すべきことである。



太平溝附近の戦闘 桂聯隊長斃る さて遼陽南面の重關たる鞍山站を抜くには、まづその左翼太平溝高地を突破せねばならないので聯隊は命により二十六日夜半出發同地北方三三七高地を占領すべく進撃した。漸次隊を進めて午前二時五十分、第一大隊が同高地東方約千メートルの高地を占領するに及び、桂聯隊長は同地點に到つて敵状態を偵察したが、三三七高地の敵の兵力は必ずしも優勢ならず、且ついまだわが軍の進撃を知つてゐないやうであつたから、寧ろ奇襲をもつて占領するを得策となし、第二中隊をして同高地に通ずる鞍部の高地脈を前進せしめた。中隊の尖兵小隊が漸く三三七高地を攀登しようとする時、突如右側背高地から敵兵約三十の猛射をうけた。小隊は直にこれに交射し、敵兵七八名を斃したが、地形不利のためまづ尖兵長蘆原中尉傷つき、死傷續出するに至つたので、やむなく原位置に復歸した。午前五時天明と、もに三三七高地を望見するに、敵の歩兵約二中隊がこれに據つてゐることを確めた。そこで直に射撃を開始し、わが砲兵亦後方千メートルの陣地から熾んに砲火を送り、敵に動搖の色みゆるや、機を逸せず第一・第二中隊をして掩護射撃をはじめ、豫備隊たる第八中隊に命じ、一五八高地の稜線を前進して巧に敵に接近せしめ、近距離に至つて急射撃を浴せしめたので、敵は大に驚き對角石に向つて退却した。佐藤大隊および第七中隊も奮進して、午前七時十五分つひにこれを占領し、林中尉の一分隊をして該高地線の西北端を占領せしめ、主力を三三七高地の西側

に集結して占領を確實にした。同八時桂聯隊長は第一線たる三三七高地において、第一大隊長森少佐と、もに敵情を偵察しつゝ、あつたが、たまく對角石からの敵砲彈が脚下に爆發し、森少佐は戦死し、聯隊長亦重傷を蒙つて起たず。佐藤少佐一時聯隊長を代理し、住田大尉第一大隊長を代理して尙も戦闘を繼續す。聯隊長の負傷は下腹部貫通砲創の重傷で、第二野戦病院に收容中、二十七日午前五時五十分つひに死す。大佐の瞑せんとするや

「遼陽を見ないのが残念である。諸子予に代つてこれを努めよ、わが二十聯隊の名を汚す勿れ」の一言であつた。この壯烈極まる聯隊長最期の一言を傳へ聞いた我聯隊の將士は、いづれも悲憤の涙を呑み、この仇を復せずんば已まずと誓つたのであつた。ついで今井少佐代つて聯隊長代理となり、前衛豫備隊から第一線に來着、午後零時三十分、わが砲兵中隊は三三七高地の東側に布陣し、對角石の敵を猛撃するや、敵はわづかに數發を應射したのみで、倉皇花麥屯に退却した。更に命により第一大隊をして三三七高地を守備せしめ、聯隊本部および第二大隊は太平溝に移つて各夜間の位置に就いた。この日の戦闘における聯隊の損害は、戦死 少佐森駿三郎以下七名、負傷 大佐桂眞澄(二十七日以下四十一名)であつた。

喻家勾附近の激戦 出征以來の苦戦に陥る いまや遼陽一帯の地は、各方面とも酣戦中で、わが



前面においては歩兵約一聯隊・砲八門を有する敵が、喻家勾東南方高地に據り、二層の散兵壕を構築してこれを堅守し、且つ同部落東方高地の敵は、熾んに歩砲火を雨下し、ためにわが右翼歩第四〇は甚しき苦戦に陥り、わづかに停つて射撃を交ふる情況にあつたので、聯隊は三十日喻家勾を攻撃するに決し、第三大隊は歩第四〇に連繫して本道より東に、第二大隊は本道を右翼として第三大隊に連なり、第一大隊を豫備隊として運動を起し、同時に第三大隊は第九中隊を左翼に散開猛進せしめ、午前七時右翼歩第四〇と連繫して、孤家子北方高地線を占領した。また第二大隊は第七・第八中隊を展開して、早飯屯西方高地の敵と銃火を交へ、豫備隊たる第一大隊は巧みに蔭蔽して前進し、喻家勾南方約千五百米の地點に達した。午前九時天方將校斥候の報告により、方家屯東側高地には十門以上の敵砲あり、また早飯屯西方高地以西の地域には一連の堡壘あり、これに歩兵が占據してゐることを知つた。

かゝる間に右翼の戦闘は刻々に激烈となり、もはや前面の敵情を顧慮する餘裕なきまでに至つたが、この時わが聯隊長は

貴官は歩兵第二十聯隊及び歩兵第三十九聯隊第一大隊を以て喻家勾に向つて強襲すべし

といふ師團命令を受領した。そこで午前十一時四十分、間隔を置ける中隊縦隊の側面隊形をもつて、

高粱を押し分けつゝ奮進した。敵の銃砲火はいよく猛烈を極め、聯隊の死傷相つぎ、午後一時三十分喻家勾南方千米の地點に達した時の如き、死屍累々として横たはり、一望悲惨の光景につゝ、まればるた。しかも同一時五十分には聯隊は、喻家勾に向つて突撃を實行すべき旅團命令に接した。そこで直ちに第一大隊に命じ、天方少尉の偵察した突進路を驀進せしめ、同二時三十分辛うじて同村の北端および東南の一線を占領したが、大隊長代理納大尉負傷し、住田大尉代つてその指揮を執るの苦境に瀕した。

この時第二大隊は、第三大隊から苦戦中との通報に接し、第五・第六中隊を喻家勾東南に、第七中隊を同北端に散開せしめてこれを援け、第三大隊は佐藤少佐傷つき、江上大尉代つて大隊を指揮し、喻家勾南方標高四〇附近において、歩第四〇の左に連なり、早飯屯西方高地の敵と對戦してゐたが、歩第四〇が敵砲に苦しめられて、全く前進を阻止されたので、一層の苦戦に陥つた。かくて喻家勾の北端および東南の一角をわれに占領された敵は、漸やく動搖して同高地から退却し、早飯屯西南方高地に據つて依然激烈な抵抗をつづけた。そこで聯隊は喻家勾を堅守し、逆襲に備へるため防禦工事を施してゐるところへ、午後五時五十分、敵の歩兵約一中隊喻家勾東方高地に増加し、午後八時ごろまで猛烈な掃射をつづけてゐた。



この日の戦闘は、聯隊にとつて實に苦戦であつた。敵弾を遮蔽すべき一の地物もない平坦開闢地を前進し、殊に兩翼に連接した他部隊の前進が遅れ、聯隊ひとり凸出したため、三面から敵の集注火を蒙り、慘澹たる情景を現出したのであつた。この戦闘における聯隊の損害は、戦死下士卒七名、負傷少佐佐藤彦人以下百九十一名。

**遼陽の陥落** 先頭第一の殊勳 かくて戦機はいよいよ熟し、聯隊は第一線となり、後備旅團の右翼に連り、遼陽南門に向つて攻撃すべき師團命令に基き、九月三日午前四時四十分、第一大隊(第二中隊)は本道より右に、第二大隊は第一大隊の左に連り、折からの濃霧に蔽はれつ、各隊蕭々として前進した。第一大隊は第三中隊をして、八裸樹西方約千メートルの獨立家屋占領の目的をもつて行進せしめ、第四中隊をその左に、第一中隊をその右に展開し、第二大隊は第五中隊を右に、第六・第七中隊を順次左方に展開す。(第三大隊は師團)午前五時三十分、曉霧を衝いて第一大隊の右翼中隊が、徐家屯東方丘阜に達した時、敵兵一中隊の猛射をうけてこゝに戦闘は開始せられ、高粱畑を一進一止、各隊は互に連繫しつ、敵の銃砲火を冒して前進した。殊に聯隊の前進地は、この日も亦平坦砥の如く、且つ高粱をもつて阻害せられ、行進困難を極む敵は玉皇廟壘壘から機關砲を併用して猛射し、死傷頻出するに至つたが、各隊は互に相激勵して、敵前約六百メートルの地點に進み猛烈に應戦した。しかし敵の

射撃はいよいよ劇烈を極め、わが散兵線は漸やく稀薄となつたので、第二大隊は第八中隊を、第五中隊の線に伍間増加せしめて躍進を命じ、敵前四百メートルの地點に達した時、第一大隊も亦勇躍して前進同地點に達したので、一時沈静した散兵線は再び英氣を挽回した。

しかしこの時における全般の敵情は、高粱のため十分偵知することが出来なかつたので、八木下聯隊長は自ら散兵線近く進出して敵情偵察中、これを認知した敵は一齊に猛射を注ぎ、ために聯隊長は重傷を負ふて倒れ、これに代つた今井少佐亦忽ち傷き、第三大隊長代理の江上大尉代つて聯隊の指揮をとり、第三大隊長は古賀大尉これに代り、一時戦線に沈痛の氣が漲つた。併し師團の豫備であつた第三大隊の増加を得て、士氣再び振ふ。この機をもつて決戦準備の射撃を開始したが、全正面の敵情は毫も變化なく、われは豫備隊全部を散兵線に用盡したに拘らず、敵は依然として頑強に抵抗し、戦闘はいよいよ苦境に陥るのみであつた。午後六時四十分には、増加隊たる第十聯隊山畑少佐の指揮する一大隊半が第一線に來援し、加ふるに第二軍方面の敵は潰走中との情報を得て、散兵線は忽ち活氣に溢れ、砲兵亦再び砲撃を開始するに至つた。

かくて聯隊は苦戦の中に長時間を過したが、戦機正に熟し、聯隊長代理江上大尉は旅團長の命により、自ら軍旗中隊を率ゐて散兵線に突進し、目標を玉皇廟東側の角面堡にとり、突撃喇叭を吹奏し



て各隊一時に勇躍猛進、吶喊の聲は天地を震撼せしめた。敵は尙ほ頑固に抵抗したが、火力次第に衰へやがて動搖を始めたので、聯隊は急激の如き敵陣下を奮進し、累々たる戦友の死屍を乗り越え、先頭第一に敵壘に突入して、旗手楠田少尉の捧持する軍旗を壘上高く押し樹て、丸井旅團長の發聲をもつて 天皇陛下萬歳を三唱した。

見よ夕陽を浴びて翻翻たるわが軍旗の威容と、先頭第一の榮譽を贏ち得たるわが將卒の勇姿とを。あ、この一瞬の情景こそ、實にわが聯隊史上に不朽の華を添へるものでなくて何であらう。時に午後七時五十分。

敵はしきりに北方に潰走中であつたから、第三大隊は直ちにこれを急追して、午後九時三十分遼陽城小南門に達した時、敵の歩兵約一中隊城壁に據つて抵抗するに會つたが、物ともせず猛然城門内に突入してこれを北方に潰走せしめ、一部をもつて東南角まで追撃し、大隊長代理古賀大尉は主力を南門入口に集結して、國旗を城頭に樹立し、遼陽城の占領を確實ならしめ、飽くまで先頭第一の榮譽を荷ふに至つたのである。

この日わが聯隊の攻撃正面は、一望開闊、全然據るべき地物無く、殊に敵は半永久の堡壘を構築し、壕前には鹿柴・狼狽・鐵條網・地雷等の副防禦を設け、小銃機關砲を併用して、死物狂ひにわれ

を射撃したので、午前八時聯隊長まづ傷き、これに代つた今井少佐亦ついで倒れ、散兵線における各幹部は殆んど死傷し、射撃に堪へ得る健全なる兵卒は僅少となり、負傷者も苦痛を忍んで射撃を繼續するの狀態に至つた。聯隊の指揮はつひに大尉(江上)に及び、損害の最も甚だしかつた中隊の如きは上等兵が中隊の指揮を執るに至り、聯隊は實に全員の過半を失つたのである。また突撃の際敵弾は殆んど軍旗に集中し、ために一弾は旗頭の御紋章に命中して一片面を毀ち、一弾は旗竿を擦過し、旗帛には十數彈の命中をみるに至つた。本日の戦闘における聯隊の損害は、戦死 大尉阪口英一以下二百八十五名、負傷 聯隊長中佐八木下純以下六百五十九名に及んだ。

占領後の聯隊 功に依り特に城内に宿營せしめらる。かくて敵はつひに遼陽の守りを失ひ、全軍崩雪の如く奉天街道を北に退却を始めたが、この時第三大隊長は敵を追ふて太子河右岸を占領すべき旅團命令をうけたので、四日午前四時半、第十一中隊を前衛として小南門・東北門をへて太子河に向ひ、第十中隊の一小隊をして城壁外から東北門外太子河に向はしめ、第九中隊の一部をして城壁内を東北に向はしめ、主力は午前五時三十分、東北門外太子河左岸に達したが、橋梁は退却に臨み、悉く敵が破壊燒却して現存するものなく、渡船場にも亦一の舟筏さへ残つてゐなかつたので、第三大隊長は勇敢にして水泳に長ぜる山田上等兵以下七名を選抜して對岸に渡らしめ、附近を搜索中、旅團長の



命令により小南門外に復歸して聯隊に合した。しかるに五日午前十一時、師團長から左の如く光榮に餘る命令を受領す。

命令

歩兵第二十聯隊ハ遼陽攻撃ニ於テ全軍ノ爲ニ最大ノ名譽ヲ得タル爲メ特ニ遼陽守備ノ名義ヲ以テ本日ヨリ城内ニ宿營セシムル事トナレリ、由テ即刻設營隊(長將)ヲ城内巡檢衙門ニアル總司令部派遣の歩兵少佐小山秋作ノ許ニ差出ス可シ

よつて櫛田少尉を設營のため派遣し、午後六時各隊宿營地出發、同七時遼陽城内東北隅附近に宿營した。他部隊がいまだ追撃戰に從事中、特に聯隊が遼陽城内に宿營を許されたのも、全くその勳功によるもので、故桂聯隊長以下この一戰に斃れし幾百の英靈、もつて瞑すべしである。ついでエミツワシ・孤楡樹附近に宿營、近在の守備に任じた。この戰鬪終りを告ぐるや、九月六日優渥なる勅語を賜ひ、十月二十九日聯隊は、野津軍司令官から次の感狀を授與せらる。

感狀

歩兵第二十聯隊

遼陽攻撃ノ際九月三日玉皇廟附近ノ最モ堅固ニ防備シタル敵ニ對シ苦戰一日上長官悉ク負傷

シ死傷續出其ノ兵力ノ半ヲ失ヒ特ニ第二大隊ノ如キハ將校盡ク死傷スルニ至ルモ能ク奮戰シ全聯隊ノ秩序整然トシテ敢テ亂レズ以テ突擊ノ機會ヲ得セシメ更ニ歩兵第十聯隊ノ増加ヲ得テ猛然タル突擊ヲ實行シ終ニ敵ノ堅壘ヲ陷レ續テ敵ヲ追擊シ遼陽城門ノ守兵ヲ驅逐シ全軍ニ先チ遼陽城ニ進入シ其南門ヲ占領シタルハ實ニ赫々タル武功トス仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス

明治三十七年九月二十日

第四軍司令官 伯爵 野津 道 貫

七、沙河の會戰と對陣

敵軍怒濤の如く襲來す わが第一線危急に瀕す。さて遼陽の敗報一たび露本國に達するや、クロバトキンに對する非難の聲が起つたので、彼はわれと再度の決戰を試み、一舉に遼陽を復し、長驅して旅順を孤立から救ひ、從來の戰局を一轉せしめ、もつてその名譽を回復せんものと、敗殘の兵を糾合する傍ら、しきりに新銳を増加するに努めたので、その兵力は遼陽戰當時よりも遙かに優る程になつた。こゝにおいて敵は攻勢をとるに決し、渾河を渡つて先づわが第一軍の右翼を襲ひ、その第一線を突破して、怒濤の如く殺到して來た兵力は、實に二十二萬、大砲七百五十門と稱せられた。かくと



知つた我軍は敵を渾河以北に邀撃し、むしろ機先を制してその鋭鋒を挫くべく、全軍一齊に活動を起したのである。

時は十月七日、滿洲初冬の風漸やく寒く、黄葉地に委して山野霜白く、滿目うたゝ肅條の感を深からしめたが、全軍の士氣大いに昂り、征衣爽颯、戦はずして既に敵を呑むの概があつた。この日聯隊は、丸井旅團長指揮の下にタラブジフを出發し、西英子附近に至つて宿營。第一大隊は烟臺に到り、歩第四〇の前哨と交代し、第九中隊は師團司令部宿營地たる羅大臺に宿營した。翼八日丸井支隊は、師團の右翼隊となり、東部韓家伯嶺子から下臺子停車場にわたる間を守備し、第一大隊は前日の位置にあつて師團の總豫備隊となる。聯隊は右翼隊守備區域の一部を守り、第一軍と連絡し、九日には師團長の直轄となり、第三大、大紅土崖子に進み、第三大隊は右翼隊の指揮下に入り、拂曉守備地を撤して周家達連溝南方畑地に至つた。

三塊石山の戦鬪　かくて十月十一日午前八時聯隊は、大營官屯東北高地守備の任を解かれて聯隊長の指揮下に復し、小營官屯に集合した。そして午前十時四十分、歩第三九は第一線となり、聯隊は第二線となつて、拒山子方向に前進す。この途中敵の大部隊が、寺山方向より前進し來るの報告に接し、旅團は小營官屯北方高地に據つてこの敵を拒止するに決し、歩第三九は左翼に、聯隊は右翼に並

列して、同高地を占領することを命ぜられ、第二・第三大隊を第一線とし、第一大隊を豫備隊として同高地を占領した。この時右翼にあつた岡崎旅團は、孤家子東北方寺山高地の敵砲兵から、盛んに砲撃をうけてゐたが、午後二時旅團長から

「旅團は前面の敵を攻撃せんとす。歩兵第三十七聯隊は第一線となり土門子金家堡子の線に展開し、歩兵第二十聯隊は第二線となり、小營官屯北方高地西麓に集合すべし」

との命令をうけ、ついで同四時再び「第一大隊を第一線の右翼に増加すべし」といふ命をうけたので、第一大隊は直ちに前進、敵の銃砲火を浴びつ、大堡南方約二百米の地點に達した。この時敵は三塊石山南方畑地に現はれ、猛烈なる射撃を開始したので、第三中隊を左翼に増加し、更に躍進して大堡東方約三百米の畑地に達し、日没と、もに射撃を中止し塹壕を築いて停止す。第二・第三大隊も逐次躍進して、拒子山東方約三百米の地點に達した。この時安村聯隊と連絡のため派遣した將校斥候の報告によれば

「三塊石山附近には敵の大集團あり、何時逆襲し來るやも計られず。安村聯隊は危殆の位置にあり」

といふのであつた。そこで直ちに第三大隊を、安村聯隊の後方百米の地點まで前進せしめた。また



午後八時三十分、第二大隊(第七中隊を砲兵)を孤家子に向つて前進させ、第三大隊を更に安村聯隊の後方から孤家子に向つて前進せしめ、ついで、各隊は午後九時三十分ともに孤家子に到着した。そして第三大隊を第一線、第二大隊を豫備隊として右翼後に置き、右翼岡崎旅團と連繫して、三塊石山の夜襲を決行するの準備を整へた。

抑もこの三塊石山は、その山麓周圍一里に滿たぬ小丘阜に過ぎないが、敵はこゝに數層の防禦工事を施し、且つ附近村落一帯にも作業を加へ、防備きはめて強固であつたから、これを奪取するのは容易のことではなかつた。かゝる間に夜は漸やく闇け、やがて咫尺暗澹たる午前一時、一團の烽火を合圖として、各隊齊しく運動を起し、第一・第三大隊は各々一中隊を豫備とし、その他を第一線として二列横隊に集合し、まづ目標を三塊石山東方高地に定めて前進したが、途中左翼前方に銃聲が聞えたので、漸次その方向に轉進した。この時師團長から、岡崎旅團を増援すべき命令があつたが、すでに第一・第三大隊(第九中隊)は前進を起して敵と戦團中であつたから、豫備隊たる第二大隊(第七中隊)と第九中隊を江上少佐の指揮に屬して、岡崎旅團の方面に派遣し、その他は依然歩三九と連繫して、旅團長の指揮下に屬し夜襲の實行に入つた。

壯烈なる大夜襲戰 肉弾相うつ大混戰 かくて午前三時五分、第一・第三大隊は三塊石山南方約

七八百米の地點に達した時、旅團長から、聯隊は兵力を集結して第二線となり、目下前進中なる歩第三九の後方に續行すべきを命ぜられ、兩大隊は一線の重複縦隊に集合して前進す。しかるに第一線たる歩第三九は優勢なる敵火に阻まれ、すこぶる苦戰に陥つたので、旅團長より、一個大隊を歩第三九の右翼に増加し、第三大隊は敵の左側背を攻撃することを命ぜられ、各々所定の地點に向つて猛進した。しかし夜闇咫尺を辨せず、諸隊混亂して收拾の途なく、しかも時機漸やく迫れるため、各隊長は附近にある部隊を糾合して自己の指揮下に收め、午前三時三十分辛くも三塊石山南側村落に達す。やがてわが襲來を知つた敵は勇敢に防戦し、或は土壁に據り或は銃劍を揮ひ、死守してわが軍を邀へ撃つたので、銃火に交ふるに白兵相搏ち、叫喚叱咤の聲は三塊石山を壓し、彼我の辨別も殆んどさだかならず、いたるところ混戰亂闘を演じ、悽慘の狀言語を絶するものがあつた。かゝるところに第一大隊長代理住田大尉は、村落燒討の奇計をめぐらし、附近民家に火を放つたので焔々たる火光戰場を照し、彼我の辨別明らかなるに及び、戦闘いよゝ、激烈となり、兩軍ともに死傷算なく、戦ひはいつ果つべしとも見えなかつたが、やがて第三大隊の主力および第一大隊の一部、並びに歩第三九の一部は相呼應して突撃に移り、午前五時東天漸やく白むころ、三塊石山を占領するに至つた。しかし敵は尙ほ附近高地に據つて、再び猛烈に抵抗をつづけた。



敗兵の掃討 かくて天全く明け展望自由となるや、山下東北方の塹壕中にある敵の歩兵約四百は、山頂にあるわが部隊に向つて猛烈に射撃し、こゝに山上山下の戦闘が開始せられたが、敵は忽ち屍體の山を築き、塹壕に密集して斃れたもの約二百に達し、つひに混亂しつゝ、退却した。われはこれを追ふて、三塊石山北方約百五十米の地點に到つた時、午前六時三十分ごろ双臺子附近にある敵砲兵は、熾んにわれを砲撃し、同時に附近の岩石中に潜遁してゐた敵兵は、不意を狙つて亂射し、われに多少の損害を生じたが、これ等は悉く殲したまたは虜とした。午前十時にいたり敵は漸やく北方に退却し、村落にある敵の掃討亦終り、正午ごろ三塊石山南側に集合、諸隊の整理を行つた。

この間第二大隊(隊缺)および第九中隊は、歩第三〇と協同して第一線となり、蔘家屯東方高地に進んでこれを占領し、更にその東北方の獨立高地に防禦工事を施し、頑強に抵抗する敵兵に對して第五・第八中隊を第一線とし、第六・第九中隊を豫備として對戰午後七時に至る。また第二大隊はその夜後備第十一旅團と、もに當面の敵に向つて夜襲し、高地中腹に達した時、諸方面から激烈な射撃を受けて、敵と最も近く對峙したものの、如きは、互に石を投じて戰つたほどであつた。しかるに暫くして後備旅團が背進したので、第八中隊は微力これを支ふことが出来ず、已むなく舊守備地まで後退した。この報に接した第二大隊長は、直ちに第六中隊を第一線に増加し、守備を堅うして夜を徹し

たのである。

元來この三塊石山は敵にとり最も樞要の地であつたから、敵は歐露第三十七師團の新銳をもつてこれを守り、特に山頂を固めたのは、全露軍中勇名かくれなき歴山第三世名譽聯隊紅帽兵の精銳であつたから、之を占領するに多大の犠牲を要したのも無理はなかつた。しかし敵の損害も亦相當に大きく遺棄された屍體だけでも八百餘、俘虜は二百餘名に上つた。生擒した捕虜將校中、クロバトキン將軍が全軍に與へた訓令を懐中してゐるものがあつたが、一言一句實に血と涙とをもつて綴られ、眞に聲涙ともに下るの感あり、その決心の牢乎たると、もに、作戰上の苦心もそゞろに窺知せられ、思はず襟を正しうせしむるものがあつた。即ち敵決して怯懦なるに非ず、わが軍餘りに驍勇絶倫なりしが故である。この戦闘における聯隊の損害は、戦死 大尉杉山宗助以下九十名、負傷 大尉大谷廣以下二百七十六名であつた。

沙河左岸の占領 沙河會戰の終局 かくて十月十三日にいたり、敵にとつては最も重要な據點であつた沙河左岸の楊城塞高地を攻畧した。この戦闘は前後一晝夜にわたる苦戦であつたが、聯隊は殆んどこれに與らなかつた。初め聯隊は師團の豫備隊であつたが、間もなく第一中隊は、砲兵掩護のため双臺子東端に出て、聯隊は第二線となつて紅葉山に向ひ、歩第一三と協同して中部團山子東北約二百



米の地點に達し、他の友軍と、もに西部團山子北側の高地を占領した。

爾後陣地にあつて戦後の整理をなす中、いつしか銃砲聲は次第に遠く稀となり、やがて全く熄んで、ここに沙河の戦鬪は終局を告げ、朔風ひとり猛威を振り、滿洲の山野は再び元の滿目荒涼に返つた。激戦旬日、初め滔天の勢ひをもつて南下した敵も、わが一撃に會つて攻勢の意氣挫け、戦線數里を退いてわづかに餘喘を保つに對し、われは守勢より起つてこれを邀撃し、戦線數里を進めて武威を張り、ここに兩軍は沙河を挟んで相對峙するに至つた。かくて敵將クロバトキン南下の企畫は、もろくも一場の夢と化し、壯圖徒らに潰え去つたのであつた。この戦鬪後、滿洲軍は優詔を拜す。

**沙河の對陣** さて沙河の會戦後、も前哨の衝突、偵察隊の接觸等は殆んど毎日絶ゆることなく、その後敵はますます増援を得て日毎に陣容を整へ、延長十里の間陣地の防備を嚴にし、各種の重砲を配備して着々頽勢を恢復し、や、もすれば優勢を恃んで攻勢に出でんとする狀あり、ここにおいてわが軍は、戦後の整理を待ち追撃に移らうとした最初の計畫を改め、寧ろ對抗持久の策をとるに決し、聯隊は蛇山子およびその附近に停止して日夜防禦工事に従ひ、塹壕を増設し交通壕を開き、要所には機關砲を配備し掩蓋を設くるなど、いつしか半永久の設堡陣地を完成するに至つた。敵との距離遠きも千八百米、近きは僅かに三四百米、敵の銃砲火は絶えずわが陣地に送られたが、われは自重して應

ぜず、専ら彈藥の節約に努めた。

かゝる間にいつしか滿洲は嚴冬の候となり、沙河の流れは全く氷結して、氷上車輛を通ずるやうになり、寒威いよく、凜烈を極めたが、附近の民家は悉く兵燹に災されて、雨露と寒氣とを凌ぐ術もなかつたから、散兵線の直後に、十五人乃至二十人を收容し得る密室を作つた。この密室は前後左右に交在し、一鼓直に火線につき得る便があり、また煖を執るべき設備も殆ど完備し、日用の諸物品も事缺かぬ程度に準備せらるゝに至つた。

この對陣中、内地からは多數の補充兵が續々として送られ、從來の缺員を充たした上、各聯隊とも三四百名位の過剩を生ずるに至つた。よつて是等の訓練に努め、射撃は前面を徘徊する敵を目標として實彈をもつて行ひ、歩哨斥候等の動作も敵前に實習させ、防禦工事作業の如きも彈丸雨下の下に教授したので、その成績大いにみるべきものあり、就役わづかに半歳の補充兵も、對陣の末期にはその技倆實力、現役兵に比し遜色なきまでに至つた。

十一月二十三日新聯隊長前田大佐(喜)を迎ふ。遼陽戰に桂聯隊長を失つて以來、實に四代目の聯隊長である。またこの對陣中、三十七年の天長節、三十八年の新年および紀元節を迎へたことは、忘れがたき想ひ出である。



## 八、奉天大會戰

五四

戰機動くか、る間にいつしか滿洲の曠野にも、再び春が訪づれて来た。長鞭馬を驅ればわづかに半日の行程なる奉天城を目睫の間に望みながら、日露兩軍は沙河・渾河を挾んで對陣することこゝに五ヶ月、その戦線は東撫順より西長灘に及び、蜿蜒數十里の間互に壘を高うし柴を密にし、滿を持して容易に放たず、ひたすら機を窺ふうち、戦機漸く動き、春風に嘶く軍馬の聲に勇士の血躍つて、戦雲日にく濃密となつて来た。

時は三十八年二月二十五日、鴨綠江軍、黒木軍まづ馬を進めて牽制運動を起し、敵の後方部隊がわが策戦通り東方に移動するを確むるや、二十七・八日全線一齊に蹶起して砲撃を開始し、こゝに奉天會戰の幕は切つて落されたのである。わが第四軍は全軍の中堅となり、敵の南正面を突破せんと、前面の堅壘を目がけて攻撃を起したが、わが師團の前面には萬寶山・柳匠屯の險要あり、敵はその堅牢なる陣地に據つてわれを瞰射し、頑強に前進を拒止するので、先づこれを突破せねばならなかつた。すてにして牽制の目的を達し、戦機最も熟した三月一日午前十一時、聯隊は蛇山子南側畑地に集合、柳匠屯および萬寶山攻撃の準備を整へた。午後四時第三大隊長は二個中隊を率ゐ、小東勾を守備

して、隣接部隊との連絡をとり、敵狀地形を偵察して、聯隊の前進に資すべしとの命により、進んで小東勾にいたる。この時敵の砲兵は、塔山と萬寶山との間六ヶ所に現はれてわれを砲撃し、その歩兵約一聯隊は前家屯附近に集合しつゝ、あるもの、如く、聯隊はこの日蛇山子に村落露營す。

**萬寶山の攻撃** 狀況悲惨を極む。その翌二日の拂曉を期しわが歩兵第二十旅團は、友軍歩兵第八旅團の柳匠屯攻撃に連繫して前面萬寶山の攻撃に着手することとなり、零時三十分から萬寶山に向つて前進を起した。折しも飛雪繽紛として展望を妨げ前進にはさぶる困難を感じたが、一方敵からの瞰下を遮り、敵に接近するには却て好都合であつた。まづ第二大隊から攻撃前進に移り、第三大隊これにつづき、漸次敵線に迫り、午後一時二十分第十一・第十二中隊を第一線に増加し、一中隊を聯隊豫備隊として前進、午後二時敵の前進陣地を占領す。午後二時三十分第一線は前進して、敵前約二百米の地點に達したが、敵は堅固なる陣地に據り、猛烈な歩砲火をもつて頑強に抵抗したので、聯隊の死傷は頻々として生じた。午後五時三十分敵の歩兵約一中隊、わが中央凸出部に逆襲して来た。この時谷口機關砲小隊および第六中隊の一部は。敵の退却した陣地を占領してゐたが、忽ち猛烈なる敵砲の集中點となり、第六中隊は殆ど全滅し、谷口機關砲小隊はその半員を失ふに至つた。しかしこれにも屈せずこの地を死守し、來襲部隊に猛射を注ぎ、死屍三十餘を遺してこれを退走せしめた。その



後も敵はしばし逆襲に轉じようと努めたが、機關砲隊と第六中隊の残兵はよく奮闘して、毎時これを阻止した。午後五時三十分今橋旅團長負傷し、わが前田聯隊長旅團の指揮を執り、成富第三大隊長聯隊の指揮を執り、古賀大尉第三大隊長代理となる。

この時における聯隊の占領陣地は、敵を距る近きは百四五十米、遠きも六七百米を下らず、しかも敵は堅固なる陣地に各種の副防禦を設け、且つ要所に機關砲を備へて頑強に抵抗するので、到底歩兵のみの攻撃をもつてしては、奏功の期しがたきを思ひ、まづ敵の副防禦および機關砲を撃滅すべく、わが陣地の最凸出部に迫撃砲四門を据付け、敵の角面堡に痛撃を加へた。その效力著しく、鐵條網若干を破壊し、少からず敵の士氣を阻喪せしめた。午後七時ごろ敵は闇中光弾および燎火を焚き、その散兵壕からわれを亂射し、同時に胡老屯方向からは。わが左翼に向ひしばし小企圖の逆襲を試みたが、わが第一線部隊は機關砲隊と協力して、悉くこれを撃退し、戰鬥隊形のまま、夜を徹した。

この日の戰鬥において、激戰の割合にわが死傷の少かつたのは、朝來南風激しくして頼りに雪を飛ばし、敵眼を遮蔽して容易に前進することが出来たのと、且つ各中隊の一部をして「ズック」袋を携行せしめ、攻撃陣地を構成せしめたからであつた。

明くれば三日午前四時、工兵第一中隊は二の宮中尉の指揮の下に敵彈下にあつてわが前面の角面堡副防禦物の破壊作業を行ひ、最も勇敢に動作し、約八十米の破壊口を作つた。そこで江上少佐は四中隊を率ゐる午前七時十分敵の角面堡に突撃しようとしたが、右隣接部隊はいまだ前進の模様がなく、且つ敵は胡老屯・柳匠屯等から熾んに砲火を集中し。わが死傷算なく、獨立攻撃の不利を思はしめたので、突撃を中止して一先づその位置に停止し、しばらく交戦をつけたが、敵の機關銃および銃砲火はいよゝゝ猛烈となり、死傷ますます増加するのみなので、監視兵を残して他は稜線の後方に退いた。二三兩日における聯隊の損害は、戦死 中尉加瀬澤喜之作以下百十三名、負傷 大尉寺尾佐喜馬以下四百〇二名。

その後七日まで小東勾西北方約千米の地點に陣し、この間夜戰二回あり、翌八日各大隊は全線威嚇射撃を行ふ。敵は沈黙して應射しないので、將校斥候を派して敵情を搜索せしめ、境田將校斥候はその角面堡を占領し、午前五時聯隊長は。自ら二個中隊を率ゐて敵の第一線を占領した。これより先きわが前面の敵は、午前一時ごろから退却を始め、同三時ごろ全く退却したものの、如く、午前六時第二大隊はその將校斥候をもつて胡老屯を占領し、また第一大隊は同七時四十分、敵の抵抗をうくることなくして確實に萬寶山を占領した。この時突如滿洲軍に 優詔降下し、全線の士氣大いに振ふ。



九日十日の激戦 かくて九日わが師團は追撃を續行して、高力堡・三家子をへて舊店方面に前進すべく、聯隊は第二・第一・第三大隊の順序をもつて行進を起し、午前十時三十分國公塞北方畑地に開進した。この日南風烈しく、砂塵を飛揚して濛々咫尺を辨せず、殆ど面を向けがたく、殊に聯隊は二日から七日夜に至る間第一線にあつて最も近く敵と對戦し、殆ど睡眠をとらざること一週日、ために將卒一同疲憊その極に達し、行軍の困難なること言語に絶した。

午前十時三十分、聯隊は渾河左岸七間房に向つて前進すべき師團命令に接し、第一大隊長は第四中隊の二小隊を中谷大尉に指揮せしめて前衛とし、ゆくゆく渾河の偵察に勉め、進んで七間房高地を占領した時、更に旅團命令をうけ、第二大隊および殘餘の第一大隊・工兵一中隊を率ゐて渾河右岸高地を攻略すべく、第七中隊を先頭として順次渾河の渡渉を始むるや、七間房西北方から猛烈な敵の射撃をうけたが、これを驅逐して午前八時全く渡河を終り、激戦の後つひに同高地を占領した。しかし敵は谷を隔て、約五十米にある高地線に據り、頑強に抵抗し、しばく逆襲に轉ぜんとし、對峙しつゝ夜に入る。

十日午前一時敵は、歩兵約三大隊および機關砲數門をもつて、亂泥凹子東方高地線を占領し、猛烈なる射撃を行ひ、且つしばく逆襲を企てたが、毎にこれを壓してその企圖を挫折せしめた。かゝる

ところに午前三時三十分、敵にや、動搖の色あるに乘じ、聯隊長は自ら三個中隊を提げ、軍旗を奉じて敵の左翼背に向ひ勇敢なる突撃を行つた。敵はこれに辟易して退却を開始したので、全線直に突撃に出て、つひに敵陣地を全く占領した。時に午前五時三十分、聯隊は逃ぐるを追ふて更に英打堡高地を占領し、壯烈なる追撃射撃を加へて、敵に多大の損害を與へた。

ついで午前九時二十分聯隊は、第三大隊・第十・第十一中隊を第一線として運動を起し、亂泥凹子西北方約三千米の無名部落南方森林に達した時、同部落に據る約二中隊の敵歩兵の射撃をうけたので、大隊長は第十一中隊をしてこれを攻撃せしめた。第十一中隊は直に攻撃を開始し、やがて喊聲とともに突撃を敢行し、敵を潰走せしめた。聯隊は更に進んで趙家勾西南方高地および王家勾東南方高地を占領した。この時敵の歩兵約二中隊は、同高地北方約五千米の高地からわれを射撃したので、わが第一線部隊および砲兵はこれを猛撃して敗退せしめ、午後四時聯隊は全く王家勾西南方高地を占領し、同五時引きつゞき追撃に移り、午後六時大窪北方高地を占領して、こゝに部隊の整理を行ひ、同十一時三十分魚鱗堡北方の無名部落に到つて一時休止した。

奉天つひに陥落 かくて連戦十餘日、わが軍の攻撃は各方面とも着々として功を奏し、敵はわが第四軍の正面からの攻撃にまづその主力を挫かれ、第三軍の迂回運動によりてその退路を扼され、さす



かに敵將クロバトキンの智謀をもつてしてもつひにわが軍の籌策を覆し得ず、三月十日恨みを呑んで全軍に退却を命じ、倉皇として自ら北方に退いた。首將すでに此の如し、部下の潰裂離散は言はずもがなで、この一戦敵の投降者二萬と註せられたことによつても、如何に彼が大攻撃をうけたかを、知ることが出来るであらう。

この戦鬪において聯隊の捕獲した俘虜および戦利品は、俘虜將校三・下士卒百七十二、馬匹六十三、戦利品小銃六十七、地圖四十八・車輛三十三その他で、また聯隊の損害は、戦死 特務曹長高見岩太郎以下三十七名、負傷 少佐江上喜三郎以下百〇一名であつた。

尙ほ聯隊は三月十一日午前零時五十分魚鱗堡に到着、鐵道線路から東方二千米の間を奉天に面して警戒す。第一大隊は午前四時三十分、同地を發して鐵道線路に向ひ、途中暗夜のためしばしば道を失し、難行軍をつゞけて午前六時三十分、漸やく鐵道附近に達した。また第三大隊は午前五時ごろ二臺子西方約三千米の無名部落に至り守備に服し、爾後聯隊は二臺子・大連花泊・沙河子を経て新屯に至つて滞在す。三月十三日滿洲軍は、再び 優詔を拜す。

奉天戦後の駐軍 奉天の一戦に致命的の打撃をうけた敵軍は、徒らに北方に潰走し、昌圖以南は全くわが有に歸し、戦局はいよゝわれに有利となつた、聯隊は敵を追ふて三月二十日新屯に到着し、

爾後四月二十三日にいたる一ヶ月餘を、第一線勤務に服し、ひたすら敵の南下に備ふる防禦工事に努めた。二十三日敵の歩兵約四五大隊、騎兵約四中隊昌圖に進入し、昌圖以北において交戦中との報に接し、久しく脾胃を歎いた聯隊は、勇躍しつゝ、二十四日午前一時四十五分、第二大隊を前衛として吉林街道を前進し、威遠堡門に到着した時、敵兵退却の報を得、空しく同地に停止して警戒に任じ、二十七日更に馮家屯に宿營、支隊の豫備隊となつた。ついで八社に移り、第一線となり警戒に従事す。六月十三日から趙家臺に駐屯中、たま／＼同二十六日軍の前進隊は、優勢なる敵の壓迫をうけ、本陣地退却中との報に接し、直ちに宿營地を發して、馬家勾・西郎勾に赴き、敵情偵察の後趙家臺に歸す。八月六日から双城子に、十一月十八日から火蘭屯に駐軍す。

### 九、平和克復と凱旋

平和克復 か、る間に日露兩國の媾和使節は、米國大統領ルーズベルトの斡旋により、ポーツマスに相會して、平和條約を議するに至つた。この噂が戦線に傳はるや、一意敵軍を壓迫して、これに最後の脅懾を加へ、彼をして城下の盟ひをなさしめずば已まじと誓つたわが將卒は、大いに切齒扼腕したのであつたが、つひに噂は事實となつて、九月十三日兩軍の委員は沙河子に會して休戰條約を協定



六二一  
し、同十六日正午をもつて全軍に休戦を令せられ、同時に特に陸海軍人に對して優渥なる勅諭を下し賜はつた。

凱旋 平和克復の後、尙ほ聯隊は火蘭屯附近に滞在すること三ヶ月、出征後第二回目の新春を滿洲に迎へ、三十九年一月十八日をもつて、いよく凱旋の途に就く。この日聯隊は、想ひ出多き火蘭屯の宿營地を發し、途中中固に一泊、鐵嶺にとゞまること四日、二十三・四の兩日汽車輸送をもつて金州に入り、ついて柳樹屯に到着、二十六日午前十一時二十分旅順丸に乗船、正午同地出帆一路神戸に向ふ。海上恙なく二十九日午前十一時三十分兵庫港着、逐次和田岬に上陸し、三十日から二月二日まで、各隊いづれも屯營に凱旋を終り、二月四日をもつて復員を完結し、こゝに全く平時の状態に復した。

顧みれば三十七年五月五日屯營出發以來まさに一年十ヶ月、懸軍深く朔北の野に入り、雨に沐し風に櫛り、旺盛たる士氣は一難を経る毎に一倍し來り、よく歩兵第二十聯隊の榮譽を全軍に輝かしたのであつたが、しかもこの名譽を贏ち得たる一面には、勇士を矢石の間に失ひたること多く、出征以來聯隊長を換ゆること實に四代、聯隊死傷者の總數三千百九十二名に及び、郷黨の歡呼を浴びて營門を入るに當り、往路を共にせる戰友の健在せるもの果して幾人なるかを思ひ、さすがに今昔の感切なるものがあつた。

凱旋大觀兵式 越えて四月三十日、大元帥陛下には全國各師團の代表隊を東京青山練兵場(今の明苑)に召され、凱旋軍の威容を親しく閲し給ふ。聯隊からは聯隊附中佐山畑釜次郎以下百四十二名をもつて代表隊を編成し、軍旗を奉じて上京、參列の光榮に浴す。この日隊列に入るもの、武勳赫灼たる舊滿洲軍の代表者三萬一千餘名、將校以下悉く改正軍裝を着し、壯觀言ふばかりなく、儀一層の莊重を加へた。

### 一〇、個人感狀の勇士

わが聯隊が出征以來各地に轉戦し、よく平素訓練の實績を擧げ、いたる所に武功を顯揚して、精銳の譽れを得たことは、すでに上來述べ來つた通りである。これ元より陛下の御稜威によること勿論であるが、またわが將卒に軍人精神が横溢してゐた結果である。こゝに日露役における個人感狀を掲けてもつて修養の資に供する。

感 狀

陸軍歩兵大尉 住 田 陽



大尉ハ大孤山上陸以來各地ノ戦闘ニ於テ武功ヲ奏シ、九月三日遼陽附近ノ戦闘ニハ、大隊長代理トシテ所屬聯隊第一大隊ヲ指揮シテ已ニ殊功アリ。續イテ沙河會戰十月十二日、三塊石山附近ノ戦闘ニ於テ、師團ノ三塊石山ヲ占領スルヤ、敗殘ノ敵兵防禦編成ヲ爲セル三塊石村ヲ防守シ、抵抗最モ頑強ヲ極ム。當時大尉ノ所屬隊ハ、旅團長聯隊長相次デ死傷シ、諸隊ハ混淆シ、指揮ノ統一或ル瞬間ハ殆ド困難ナリキ。此ノ時ニ方リ大尉ハ家屋防禦ノ敵ヲ攻撃スベキ命ヲ受ケ、決然起テ此ノ混亂セル諸部隊ヨリ一ノ決死隊ヲ編成シ直ニ之ガ攻撃ニ從事シ、終ニ村落ニ火ヲ放テ敵ノ決死突圍シテ猛進シ來ルヤ、機ニ應ジテ之ニ當リ、其ノ二百餘名ヲ緘滅シ、敵ノ一中佐以下百餘名ヲ捕獲セリ。而シテ茲ニ全ク三塊石山ノ占領確實トナリ、爾後ノ作戰ニ大ナル功益ヲ得タルハ、以上大尉ノ處置能ク機宜ニ適シ、其ノ勇敢ナル動作與テ大ニ力アリトス。仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス。

明治三十七年十月二十五日

感 狀

第四軍司令官 伯爵 野 津 道 貫

陸軍歩兵大尉 中 谷 定 之 丞

大尉ハ九月三日遼陽ノ戦闘ニ於テ、大隊長以下將校准士官ノ幹部ヲ失ヒタル第二大隊ヲ指揮シテ勇戰シ、終ニ最後ノ目的ヲ達成シテ既ニ殊功アリ。次デ沙河會戰十月十二日三塊石山ノ戦闘ニ際シ、同山及同村ニ據リテ頑強ニ抵抗スル敵ニ對シ、師團ノ敵陣ニ突入スルヤ、暗夜諸隊ノ混淆ヲ生ズ。時ニ大尉ハ機敏ニ附近ノ諸隊ヲ糾合シ、自ラ之ヲ指揮シテ三塊石山東北部ヲ占領シ、以テ敵ノ逆襲ニ備ヘ一部ヲ以テ敵ヲ追撃シ、之ヲ當時ノ大隊長代理住田大尉ニ報告シ、同大尉ヲシテ此ノ方面ノ顧慮ナク、三塊石村ニ在ル敵ノ掃蕩ニ從事セシメタリ。其ノ動作ノ機敏ニシテ其ノ處置ノ機宜ニ適シタルノミナラズ、大尉ノ功績ハ當夜ノ戰鬥目的ヲ達スルニ與テ大ニ力アリトス。仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス。

明治三十七年十月二十五日

感 狀

第四軍司令官 伯爵 野 津 道 貫

第五中隊 陸軍歩兵上等兵 大 槻 藤 吉

遼陽攻撃ノ際第二十聯隊ハ、敵ノ堅固ニ防備セル正面ニ肉薄シ、激戰終日聯隊長以下多大ノ死傷者ヲ出シ、特ニ第二大隊ハ最モ苦戰ヲ極ム。時ニ上等兵ハ撰バレテ大隊長ノ傳令トナリ、彈丸雨



注危険悲惨ノ場裡ニ奔走シテ能ク其任務ヲ達成シ、其負傷スル事二回而モ屈セズ、泰然トシテ任  
務ヲ續行シ從容トシテ其負傷ヲ意ニ介セザルガ如シ。而シテ三たび敵彈ヲ受ケ遂ニ其任務ニ斃  
ル。當時戰場ノ情況ハ實ニ危険ニシテ、傳令ノ任務ハ決シテ容易ノ業ニアラズ。上等兵ノ如キ勇  
敢豪邁ノ者ニシテ、始メテ其任務ヲ全フスルヲ得タリ。其壯烈敢爲ノ動作ハ實ニ他ノ鑑トナス  
ニ足ル。仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス。

明治三十七年九月二十日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

感 狀

第七中隊 陸軍歩兵伍長 上田濱三郎

遼陽攻撃ノ際九月三日、歩兵第二十聯隊ハ堅固ナル敵壘ノ正面ニ肉迫シ、激戰終日聯隊長以下將  
校ノ大部ハ前後死傷シ、伍長ノ附屬シタル中隊長以下古參下士ニ至ルマデ盡ク斃レ、伍  
長自ラ中隊ノ指揮ヲ執ルニ至ル。伍長ハ此ノ苦戰危急ノ際ニ在テ奮戰激闘能ク其中隊ヲ指揮シ、  
其秩序ヲ保持シ鼓勵叱咤其ノ部下ヲ督勵シ、終ニ亦重傷ヲ負フ。時ニ戰闘ハ危急ヲ告ゲ、彈藥  
各自僅ニ十五發ヲ餘スノミ。伍長ハ其ノ身ヲ顧ルニ暇ナク、中隊ノ指揮ヲ詳細ニ上等兵岡本卯

之助ニ命ジ、或ハ起チ或ハ匍匐シ其ノ狀ヲ具サニ旅團長丸井少將ニ告ゲ、彈藥補充トナリ新銳兵  
ノ増加トナリ、終ニ最後ノ勝利ヲ完フスルヲ得セシメタリ。當時伍長ノ動作ハ實ニ壯烈ニシテ、  
其處置機宜ニ適シ其功實ニ偉大ナリトス。仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス。

明治三十七年九月二十日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

感 狀

第七中隊 陸軍歩兵上等兵 岡本卯之助

遼陽攻撃ノ際九月三日、歩兵第二十聯隊ハ堅固ニ防備シタル敵ノ正面ニ向テ肉迫シ、激戰終日聯  
隊長以下將校ノ大部ヲ失ヒ、特ニ上等兵ノ附屬シタル第二大隊ハ躍進毎ニ將校盡ク斃レ、又其  
中隊ハ下級幹部ニ至ル迄盡ク死傷シ死屍累累鮮血野ヲ染メ其光景慘澹ヲ極ム。時ニ上等兵ハ此  
苦戰ノ場裡ニ在テ、不屈不撓叱咤鼓勵自ラ代テ中隊ノ殘員ヲ指揮シ、奮戰激闘能ク其ノ秩序ヲ維  
持シ、終ニ他中隊及ビ新銳ナル増加隊ト共ニ最後ノ突撃ヲ決行シ、一上等兵ノ身ヲ以テ其ノ中隊  
ヲシテ戰闘ノ勝利ヲ完カラシム。其動作壯烈勇敢、其功績偉大ニシテ、實ニ軍人ノ模範ト爲スニ  
足ル。仍テ茲ニ感狀ヲ附與ス。



明治三十七年九月二十日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

六八

感 状

第十中隊 陸軍歩兵上等兵 山田吉次郎  
上等兵ハ遼陽攻撃ノ際九月三日、分隊長トシテ能ク戦ヒ、翌四日追撃隊ニ加ハリ部下六名ヲ率キテ裸體太子河ヲ渡リ、迎水寺ノ東端ヲ占領シ、菲菜園子附近ノ敵ト對戦シ、且ツ東京陵方向ヲ捜索シ長時間該地ヲ占領シ、我追撃部隊ノ動作ニ大ナル便益ヲ與ヘタリ其功偉トス。仍テ茲ニ感状ヲ附與ス

明治三十七年九月二十日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

感 状

第一中隊 陸軍歩兵二等卒 小林 条 吉  
沙河會戰十月十二日三塊石山ノ夜戰ニ於テ、三塊石山ハ陥落セルモ其ノ麓ニ在ル三塊石村ニハ、敵ノ家屋防禦ヲ爲シ容易ニ陥落セズ。彼我相接シ一土壁ヲ間シテ相對シ劍尖相摩シ、死傷從テ

續出ス。茲ニ於テ大隊長ハ、時期ノ猶豫スベカラザルヲ察シ、同村ノ一側ヨリ土壁内ニ進入セシム、先ヅ第一ニ進ムモノ直ニ斃レ、第二ニ進ムモノ亦斃ル。時ニ二等卒ハ躍リ進ンテ直ニ土壁ヲ攀登シ、迎へ來ル敵四名ヲ斃シ續テ敵ヲ亂射シ、之ガ爲メ後方部隊ハ其ノ間ニ乘ジ續々進入シ、終ニ敵ヲ潰亂セシムルヲ得タリ。是ニ二等卒ノ勇敢ナル動作與テ大ニカアルモノト認ム。仍テ茲ニ感状ヲ附與ス。

明治三十七年十月二十五日

第四軍司令官 伯爵 野津道貫

一一、陣 中 美 談

使命を全うして斃る

第一中隊 上等兵 岡本榮次郎(京都府南桑田郡西別院村)

遼陽總攻撃の際、大隊長の傳令として各中隊に命令を傳へての歸途、破裂した一砲彈の破片に下顎を打ち破られた。流る、血潮に屈せず、尙ほ數百米を韋駄天のやうに走つて、大隊長代理住田大尉に

六九



復命しようとしたが、下顎の負傷のために言語を發することが出來ず、手眞似をもつて筆紙を請ひ、復命を記し終ると、もに瞑目した。眞に上等兵の如きは、斃れて後已むといふべきである。

七〇

命を重んじ死を輕んず

第二中隊上等兵

原田梅太郎(京都府北桑田郡周山村)

決死の斥候募集！ 大隊長は悲痛な、しかも昂然たる態度で斯ういつて隊中を見廻した。これは分水嶺の戦闘の時、その左側支隊たる第一大隊が、奮戦の後塔嶺高地を占領したが、尙ほその前面拉木房北側の高地に多數の敵が占據し、頑強にわが前進を拒止したので、大隊長は敵情を知らうとして、すでに幾度か斥候を出したけれども、悉く敵の狙撃に會つて目的を達することが出來ず、いまや大隊長は決然として最後の斥候を求めたのであつた。

「大隊長殿行きます！ 原田をやつて下さい」

といつて躍り出たのは上等兵であつた。原田上等兵は彈雨を浴びつゝ、前進し、栃木城街道から蔡家溝の谷地を偵察し、尙ほ拉木房北側高地を偵察して、敵の兵力を具さに報告したのである。上等兵の如きは實に、命を重んじ死を輕んずる眞の勇士といふべきであらう。

剛勇無類の一騎打

第三中隊上等兵

津田金之助(兵庫縣多紀郡日置村)

三十七年八月二十六日の夜、鞍山站攻撃の際、津田上等兵は擇ばれて尖兵斥候長となり、マホアサン北方二七〇高地の麓まで進んだ、この高地は岩石の重疊した絶壁で、白晝と雖も容易に登りがたいところであるが、上等兵はよく部下を戒めて、暗中を摸索しつゝ、漸やく頂上に達しようとした時、俄然敵の下士哨に發見せられ、敵は岩石を抛下しつゝ、いて亂射し、甚だ危険に陥つたが、急射撃をもつてこれを後方に報告し置き、上等兵は部下を勵まして高地上に突進した。この時敵の二名が上等兵目かけて突きかゝつて來たので、瞬く間に先づ一人を斃し、更に一人と壯烈なる格闘を交へ、一騎打の後見事にこれをも斃した。身には數ヶ所の劍創を負ふたが上等兵は少しも屈せず、つひに残りの敵を悉く驅逐してしまつた。實に津田上等兵は鬼神も三舎を避くるの勇士であつた。

死する時は今

第五中隊軍曹

福井新太郎(京都府南桑田郡龜岡町)

福井軍曹は資性極めて豪直で、よく部下を愛した。奉天會戰の三十八年二月二日午前四時、中隊の



一部は前哨線にある村落房身の守備中、三面から数倍の敵の急射をうけて見る間に味方の死傷續出し、掩堡の維持至難となつたので、援兵増加の急に迫つたが、敵彈雨の如く注ぎ近よるすべもなかつた。しかし兵力を増加せねば、掩堡にある味方は全滅する外ないので、中隊長の命をうけた軍曹は大音を上げ

「軍人の死する時は今だ。我と思はんものは俺について来い」

と叫びつゝ、自ら先頭に走り出て、彈雨を冒して掩堡の散兵に加はつた。部下分隊およびその附近にあつた兵卒は、これに勵まされて掩堡内に増加し、僅か五六米の近くまで突進して來た敵を撃退して掩堡を維持することが出來た。しかし惜いかなこの勇敢なる軍曹は、幾干もなく天柱山の一戦に、華々しい戦死を遂げた。

軍歌を唄ひつゝ、死す

第四中隊上等兵 黒田 富三郎(兵庫縣朝來郡竹田村)

黒田上等兵は大膽不敵の勇士である、いつも彈丸雨飛の中にあつて、朗々と軍歌を唄ひつゝ、戦闘に従事するので、戦友はいづれもその剛膽に舌を巻たいものである。聯隊が最も苦戦した三塊石山大夜

襲の折、彼は巧妙に敵の退路を扼し、一人よく五六人の敵を殲して奮戦中、上官の危急をみて之を助けんと駆け寄る利那、背後に忍び寄つた敵の銃剣に突き倒され、その敵はまた即座にわが一下士の劍尖に斃れた。上等兵は重傷のため再び起ちがたきを知るや、大聲進軍の譜を唄つたが、哀れその聲の消えた時は彼の息を引取つた時であつた。

奇智敵を欺く

第四中隊一等卒 小紫 竹次郎(兵庫縣加東郡福田村)

沙河の對陣中、附近の地形と敵情とを偵察すべくしばく斥候が派遣されたけれども、敵に狙撃されていつも成功しなかつた。この時小紫一等卒は、他の二名と、もに選ばれて斥候となり、苦心慘澹敵の前哨線を潜り抜けて沙河に達し、漸く目的を遂げて歸還中、敵六名と遭遇したので、一等卒は戦友に警告すると、もに、忽ち敵の一人を殲したので、その悲鳴を聞いた他の五名は、一等卒を虜にすべく一齊に向つて來た。一等卒は暫く格闘をつくる内、大腿部および腹部に深傷をうけ、もはやこれまでと思ひながら、咄嗟に思案を定め、敵の足下に倒れて死んだ振をした。敵はいろく探ぐる様子であつたが、全く死んだものと思ひ、負傷した僚友を携へて去つた。咄嗟の奇智により虎口を逃



れた一等卒は深傷の苦痛を忍びつゝ、匍匐して前哨に歸還し、詳さに敵情を報告した。

七四

機敏よく勝を制す

第五中隊伍長 光眞 奎太郎 (兵庫縣加東郡社村)

沙河の對陣中、第五中隊は柳匠屯の敵情を偵察すべき任務をもつて、夜十二時房身を發し、伍長は斥候長となり二名の兵卒を率ゐ、潜行して歩哨線内に入り村端に達した時、たま／＼敵の歩哨交代兵四名の前進して來るに出會つた。そこは折悪しく一面の平地で身を隠すべき何の地物もなかつた。伍長は『寧ろ機先を制して勝を得ん』と思ひ大喝一聲『誰れか!』と誰何した。突然のことに驚いた敵が、周章狼狽逃ぐるところを撃つて、二名を斃した。窮迫の境にあつて、却つて勝を制す。沈着機敏にして剛氣果斷の士でなければ、爲し能はざるところである。

兩眼を失ひよく使命を果す

第六中隊上等兵 城生 與市 (京都府與謝郡東大浦村)

遼陽の役、敵の最後の抵抗線であつた遼陽城南方の陣地を攻撃するに當り、敵彈のためわが散兵線は刻々に稀薄となり、すこぶる苦戦に陥つた。この時貴志第六中隊長は、命令を部下小隊に傳へようとしたが彼我銃砲の響きが混亂して、容易にその命令を達することが出来なかつた。これをみた城生上等兵は、奮然身を挺してこの任に當り、直ちに走り出て散兵線に向ふ途中、敵彈面部に中り兩眼の明を失し、尙ほ左手に創痕をうけ、全身鮮血に染まつて倒れた。俄旨の彼は前進に困つたが、深傷に屈せず大呼して小隊長を索め、命令を傳達し終つた。しかも尙ほこの事を復命せんと苦痛を忍び匍匐して歸り、出血多量のため屢々昏睡に陥りかけたけれども、更に勇氣を勵まし、見えぬ目ながら中隊長を尋ぬる中、彈丸再び腰部を貫通し、さすがの勇士もつひに絶命した。壯烈鬼神を泣かしむとは、蓋し上等兵の如きを言ふのであらう。

七五



# 第五章 聯隊雜俎

## 一、特別大演習

第一回 明治二十三年度陸海軍聯合大演習 三月三十一日から三日間、名古屋附近および伊勢灣附近において、陸海軍聯合大演習を施行せらる。これ聯隊が大元帥陛下御統監の大演習に参加した嚆矢であつて、兩軍の編成は左の如くであつた(當時聯隊は第(四師團に屬す))。

東軍 司令官 陸軍中將 黒川 通 軌(第三師團、近衛歩兵第一旅團、軍艦高雄以下七隻)

西軍 司令官 陸軍中將 高島 鞆之助(第四師團、近衛歩兵第二旅團、軍艦高千穂以下六隻) 四月二日演習終了後 勅語を賜ひ、翌三日名古屋城北練兵場において、参加諸部隊の觀兵式を舉行せられ、五日歸營す。

尙ほこれより先き明治二十年二月十六日、大阪屯在の各隊をもつて混成旅團を編成し、攝津國島下郡道祖本村附近で、第七旅團長今井兼利指揮の下に假設的演習を行ひ、天覽に供し奉つた。謂はゆる天覽演習がこれで、明治天皇には、皇后陛下(昭憲皇太后陛下)御同列を以て、具さに況戦

を御覽あらせられた。

第二回 同三十一年度 十一月十五日から三日間、攝河泉地方において施行せらる。今回は講評を行はれず、十八日の觀兵式も、雨天のため御取止めとなつた。兩軍の編成左の如し。

北軍 司令官 陸軍中將 佐久間 左馬太(第三師團、第九師團) 南軍 司令官 陸軍中將 奥 保 鞆(第四師團、第十師團)

第三回 同三十六年度 十一月十三日から三日間、兵庫縣下において施行せらる、兩軍の編成左の如し。

南軍 司令官 陸軍中將 黒木 爲 楨(第十師團、第十一師團) 北軍 司令官 陸軍中將 奥 保 鞆(第五師團を基幹とし若干部隊を附す)

演習終了後、十六日午前姫路城北練兵場において觀兵式を舉行せられ、終つて將校同相當官以上には宴を賜ひ、下士卒一同には酒饌料を賜ふ。

第四回同四十三年度十一月十三日から四日間、三備地方において、施行せらる、兩軍の編成左の如し。

東軍 司令官 陸軍中將 西 寛二郎(第十師團、後備旅團)



西軍 司令官 陸軍大將 貞愛親王(第五師團第十七師團)  
 十七日午前岡山練兵場において觀兵式を舉行せられ、終つて同市下石井煙草專賣局敷地において、將校同相當官には宴を賜ひ參加下士卒には酒肴料を賜ふ。  
 第五回 大正三年度 十一月十五日から三日間、攝河泉地方において施行せらる、兩軍の編成左の如し。

北軍 司令官 陸軍大將 大島 義昌(第四師團第十師團)  
 南軍 司令官 陸軍大將 淺田 信興(第十一師團第十七師團)  
 演習終了後優渥なる 勅語を賜ひ、尙ほ觀兵式後宴を賜はること、前の如くであつた。  
 第六回 同八年度 十一月十一日から四日間、攝播地方において施行せらる、兩軍の編成左の如し。  
 東軍 司令官 陸軍大將 柴五郎(第四師團第十師團)  
 西軍 司令官 陸軍大將 秋山 好古(第十一師團第十七師團)  
 演習終了後 勅語を賜ひ、十五日午前大阪城東練兵場において大觀兵式を施行せられ、飛行機も參加す。從來大演習後の賜餐は、山海の珍味を以てした洋食であつたが、本年から赤飯冷酒に改められた聖旨のほど畏き極みである。

二、特命檢閲

特命檢閲は 勅命により特命檢閲使によつて、實施せられ、その結果は親しく檢閲使から闕下に復奏せらるゝのである。わが聯隊創設以來、特命檢閲を受くること左の如くである。

一、明治二十三年十二月	檢閲使	陸軍中將	三好重臣
二、同 二十五年十一月	同	陸軍中將	三好重臣
三、同 三十九年十月	同	陸軍大將	黒木爲楨
四、同 四十年八月	同	陸軍大將	貞愛親王
五、同 四十三年六月	同	陸軍大將	子爵大島久直
六、大正六年六月	同	陸軍大將	載仁親王

三、派遣と轉出

臺灣派遣 臺灣守備のため左の通り派遣す。  
 一、明治三十一年十月一日、歩兵大尉能勢藤次郎以下百八名を派遣す。



二、同三十二年六月二十日、堤中尉以下二百十五名屯營出發渡臺し、同三十四年七月二十七日無事任を終へて歸還す。

三、三十四年七月三日、歩兵中尉有岡太一郎以下二百二十六名屯營出發、臺灣守備に赴く。しかるに同隊より分遣中の樟湖庄分遣隊は、三十五年八月一日土匪のために襲撃せられ、隊長少尉藤原又十郎、一等卒田端宇平・酒井勝次郎・岩本安藏および看護卒松山利雄等戦死し、その他重軽傷者九名を出した。

四、同三十九年四月四日、境田中尉以下七十四名屯營出發臺灣に派遣す。

支那派遣 左の通り支那に派遣す。

一、明治三十四年六月十五日、當第十師團編成の北支駐屯歩兵第五大隊要員として、住田大尉以下百六十九名屯營出發、天津に駐屯して任に服し、翌三十五年十二月四日無事任を終つて歸還す、  
二、同三十四年十一月十三日、清國駐屯軍補充として、三十三年兵四十名天津へ向ひ出發、  
三、大正十二年九月七日、天津駐屯中隊要員として中隊長以下百四十四名天津に向ひ出發。

滿洲守備 第一回 明治四十年十月から同四十二年九月にいたる二年間、師團は南滿洲に駐節を命ぜられ、聯隊は同年十月八日午前九時營庭に整列告別式を施行し、屯營出發鐵道輸送をもつて廣島に

集合、十一日宇品において琴平丸に乗船、即日同港出帆十四日大連港に到着、二日間同地に滞在の後、十八日大連出發鐵道輸送をもつて鐵嶺に着し、爾後同地附近に駐屯して守備に服す。同地方はかつて日露戦役の末期ごろ、當時第四軍に屬せし我聯隊の奮戦せし想ひ出の地で、今昔の感切なるものがあつた。從て駐屯中將卒ともに精勵、軍紀・風紀の維持に努め、よく責務を遂行し、四十二年九月十七日任を終へて宿營地出發、内地歸還の途に就き、十月四日無事屯營に到着した。

第二回 昭和四年四月から二ヶ年間聯隊は再び南滿洲駐節を命ぜられ、四月十三日早朝營庭に整列告別式を舉行し鎮國神社に武運の長久を祈り、熱誠なる福知山町民の激勵を受けて屯營出發、直に大阪に到り十四日御用船江崎丸に乗船、十八日柳樹屯沖に到着、翌十九日柳樹屯駐屯の第二大隊は軍旗に分れを告げて上陸、御用船は直ちに大連に廻航し一日滞在の後鐵道輸送を以て二十日午後三時遼陽に到着す。爾後聯隊主力は遼陽に、第二大隊のみは柳樹屯に分屯することとなつた。然るに關東軍の配置變更に伴ひ昭和五年七月二十二日第二大隊は柳樹屯を引き揚げ遼陽に移駐し、茲に全聯隊軍旗の下に集ひ守備の任に服したのである。

願れば遼陽は二十有五年の昔、當聯隊が將卒の大半を失ひしに拘らず、惡戰苦闘の末遂に遼陽城一番のりをした地で、戦後幾何もなく第一回滿洲守備として此地を通過し、鐵嶺に二ヶ年間駐まつて



思ひを舊戰場に馳せたのであるが、今又第二回の守備として此度は全滿洲中一番思出の深い遼陽に駐軍すること、なつたのも、地下に眠れる先輩が聯隊を導き、長へに我軍旗を守護せんとする至誠の然らしむる所ではなからうか。

されば駐節間激戦の地たる玉皇廟に、當年の苦戦と先輩の功績を追憶し、記念碑を建て、永久に之を傳ふることにしたのも、欽仰の情洵に禁じ難きものがあつたからである。

又柳樹屯は日清戦役の際我聯隊の上陸した地で、日露戦役には當地から乗船して凱旋の途に就き、次で第一回滿洲守備のため再び此所に来つて最初の駐屯部隊となり、今回又々最後の駐節部隊として第二大隊が此地に駐屯したのは、重ね々因縁深き地であるから、此所にも駐節記念碑を建て、とはに忘れぬ記念を残したのである。

かくて駐節二ヶ年無事その任を竭し、昭和六年四月歩兵第十六聯隊と交代の上四月十八日遼陽出發大連を経て二十四日大阪港着二十六日官民の歓迎を受けつ、屯營に歸着した。

**朝鮮聯隊へ轉出** 朝鮮新設聯隊編成のためその要員として、左の通り轉出す。

大正九年四月三日、歩兵第八十聯隊へ二等卒二百十五名轉出。

大正九年八月十日、臨時朝鮮派遣隊の第六大隊第三中隊長大尉福富孝彦以下百五十六名、および同

派遣隊の第四大隊第三中隊長大尉鈴木純三以下百五十六名は、いづれも朝鮮團に轉出す。

大正十年四月二十四日、歩兵第七十六聯隊の要員として、曹長西浦要三以下四十三名轉出す。

#### 四、鎮國神社の由來

將校集會所の山續きに鎮國神社が建てられてある。これは第二十二代 聯隊長山田勝康が現代輕佻詭激の風を憂へ、敬神崇祖の念を高め、世の風潮を質素剛健に趣かしめ様とする心願の一端として、自ら發起人となり淨財を蒐めて大正十四年九月工を起し、同年十一月二十五日工を竣へたのである。天照皇大神・應神天皇・明治天皇の三柱の神を祀り、四圍には松樹、櫻樹を植ゑ交ぜてあり、參拜するもの自ら襟を正るのである。爾來例年櫻花爛漫の候たる四月二十一日を卜して例祭を催すことになつて居る。



## わが聯隊の環境

### 一、福知山城趾

仁者は山を樂しみ、智者は水を樂しむといふ言葉がある。けだし山は鬱蒼として藏するところ多く、水は周匝にして至らぬところがなからであらう。人の性格が、これを圍繞する大自然の感化をうけることの少くないのは、更めて言ふまでもないところである。いま光輝ある歩兵第二十聯隊史を叙し終つて、まさに筆を擱かんとするに方り、しばらく餘白を藉りて郷土の昔を語るのも、必ずしも徒爾ではないと思ふ。

福知山城趾は、わが兵營の東北にあたり、古來三丹名城の一に擧げられ、山陰の要鎮として永く譽れを残したものである。その沿革を釋ぬるに、天正十二年豊臣秀吉の命により、羽柴秀勝これを築城し、補臣梶原家次工事の監督をして竣工したものである。その後文祿元年秀勝病死するや小野木公郷移り來つてこれを領し三萬石に封ぜられた。しかるに慶長五年の役に、公郷戦ひ利なくして戦死したので、有馬立藩頭の居城となり、後岡部・稻葉・松平の諸侯をへて朽木伊豫守植昌に及び、明治維新

に至つたのである。この間代々三萬二千石を領してゐた。これより先き福知山の地は、往昔宗部卿の領地で、すでに城廓も築かれ舊くは横山と呼び、市街を木村または南の岡ともいつたのである。またその後天文年間に、荒木山城守義村は横山の搔上城に居城したといふことと、それは今の八幡社の傍らに當り、更に鹽見頼氏が補築して居城にしたといふことも、記録に見えてゐる。尙ほ文祿時代の福知山城のことは、『丹州三家物語』に委曲を盡してゐるから、左にその一節を掲ぐ。

關ヶ原表家康公の御利運になりし時、細川越中守忠興申上げけるは、小野木縫殿頭が居城福知山は、幸ひ某が在所へ歸る道なれば、通りがけに踏み潰し小野木が首を見可罷通にて候と申されければ、家康公も左様思召す所なり、忠興心任せたるべき旨仰せありければ、慶長五年十月十七日福知山の城を取り巻きて、只一揉みにと揉み立てける。去ぬる七月繻殿頭、田邊の城を攻めける故、その意趣甚だ深ければ、小野木の首を見るまでは、日夜わけじと下知せられける。(中)……この福知山の城、巽の方よりさし出し油崎に本城をとる。その下は蛇が鼻とて、東西引廻したる大河の内に堀をほり、峻しきこと幾尋といふ限りなし。しかるに萍有つて淺く見えければ、細川衆先手の人數われ先にと飛び入るほどに、若干の人數溺死せり。うしろ堅固の谿と見えたり。忠興これを見られて、蛇が鼻おもてをば開かんとて、南ノ丘より攻めける所に、忠興の舊友山岡道阿彌は



せ來り扱ひ入れければ、小野木、城を開きつ、乃ち剃髮洗衣となり、上方へ退きけるが忠興憤りなほ醒めず、又兵を追ひ懸けさせ、龜山にて捕へて壽全庵といふ寺にて、無敢腹を切らせたり。法名は松樹院殿國貞宗岳大居士と號せり。云々

これにある小野木縫殿頭といふのは、即ち公郷のこと、細川忠興の居城は當時宮津で、その夫人は明智光秀の女である。文武二道兼備の名將といはれた細川幽齋は、この忠興の父であつた。

### 二、鬼ヶ城山

兵營の北にあたり、高く聳えてゐる鬼ヶ城山は、また別に大江山或は與謝の大山ともいふ。山頂に立てば若狭・丹後を一眸の下に瞰下し、眺望すこぶる雄大である。むかし鬼が籠つてゐたといふのは、この山のことで「國盡し文」に「丹波・丹後の境なる鬼もやはらく敷島や」など、見えてゐるほどである。謡曲大江山に

いざ酒香まうよ、お肴は何々ぞ、頃しも秋の山の草、桔梗刈萱われもかう、紫苑といふは何やらん、鬼の醜草とは誰がつけし名なるぞ、げにまこと丹後丹波の境なる、鬼が城もほど近し、頼もしや頼もしや

とある酒香童子の栖家はこの山と言ひ傳へたものである。國司藤原保昌の在任中、源頼光等が鬼退治をしたといふ傳説は、三尺の童兒も知るところである。



年表

明治十七年

六月十日 第一大隊大坂城内に創設

同 十八年

五月十九日 聯隊編成

七月廿一日 軍旗拜受

八月七日 北白川宮能久親王殿下御來營

同 二十年

二月十五日 有栖川宮熾仁王殿下御來營

二月十六日 天覽演習

五月十七日 三大隊編成完了

同 二十三年

三月廿三日 陸海軍聯合大演習

十二月十五日 特命檢閲

同 二十五年

四月四日 侍從武官米田虎雄來營

十月十一日 特命檢閲

同 二十七年

八月一日 日清開戦

十一月廿六日 動員下令

同 二十八年

三月十六日 村田式連發銃交換

四月一日 出征の途に上る

同月廿一日 平和克復

十二月廿四日 凱旋歸營

同 三十一年

六月二十日 堤中尉以下臺灣へ出發

十月一日 兵營移轉式舉行

同月十日 侍從武官佐々木大佐巡視

同 三十四年

二月廿一日 侍從武官渡邊湊來營

六月十五日 伊田大尉以下北清へ出發

同 三十七年

二月十日 日露開戦

四月十六日 動員下令

五月五日 征途に上る

同月八日 侍從武官伊藤瀨平來營

同月九・十日 乗船出帆

同月十九日 大孤山上陸

六月三日 河家堡附近の戦闘

同月八日 岫巖戦闘

七月一日 第四軍の戦闘序列に入る

同月廿二日 盤嶺の戦闘

八月廿五日 より九月四日まで遼陽の戦闘

十月十二日 沙河會戦

同月廿九日 感狀受領

同 三十八年

三月二日 萬寶山攻撃

同月十日 奉天占領

同 三十九年

一月十八日 凱旋のため戦地出發

同月卅一日 屯營に凱旋

四月四日 境田中尉以下轉出

同月三十日 凱旋觀兵式參列

十月五日・七日 特命檢閲

同 四十年

六月六日 東宮殿下(大正天皇行啓)

八月廿三日・廿五日 特命檢閲

十月十一日 滿洲守備のため出發、十八日柳樹屯着

同 四十三年

六月三日・七日 特命檢閲

十一月十三日・十六日 三備地方大演習參加

同 四十五年(大正元年)

九月十三日 明治天皇御大葬

大正三年

十一月十五日・十七日 攝河泉地方大演習參加

同 六年



六月廿三日―廿四日 特命檢閲  
 同 七 年  
 七月廿三日 尾藤侍從武官來營  
 同 八 年  
 五月七日 皇太子殿下御成年式  
 十一月十一日―十四日 特別大演習參加  
 同 九 年  
 四月三日 歩兵第八十聯隊要員の轉出  
 同 月 四 日 百五十七名朝鮮師團へ轉出  
 同 月 九 日 百五十七名朝鮮師團へ轉出  
 同 十 年  
 四月廿四日 四十四名朝鮮へ轉出  
 同 十 一 年  
 八月十五日 第四、八、十二中隊解散  
 同 十 二 年  
 七月十四日 侍從武官大島大佐來營  
 九月七日 北支那派遣中隊出發  
 同 十 三 年  
 一月十六日 皇太子殿下御成婚式

同 十 四 年  
 四月二十四日 中等學校以上に現役將校配屬  
 五月一日 第十師團を離れ第十六師團の隷下に  
 入る  
 五月二十三日 北丹震災救援  
 十一月二十五日 鎮國神社造營成る  
 同 十 五 年(昭和元年)  
 三月二十三日 皇太子殿下御寫眞下賜  
 十二月十七日 鎮國神社に 陛下の御平癒を祈願す  
 十二月二十五日 天皇陛下崩御  
 昭 和 二 年  
 二月七日 大正天皇御大葬  
 三月八日 丹後地方震災救援  
 同 三 年  
 十月十七日 御眞影下賜  
 十月十日 今上陛下御即位式  
 同 四 年  
 四月十三日 滿洲駐劄のため屯營出發  
 五月三日 山階官殿下御宿泊(滿洲)

同 五 年  
 二月二十二日 侍從武官瀨川少將來隊



# 在郷軍人の心得

## 第一章 總説

戦時に於ける帝國軍隊は現役軍人に在郷軍人を以て組成するのである。故に在郷軍人を最も良好の  
状態に維持し、且之をして常に官憲に密接の連絡を保持し、戦時の要求に應ぜしむるとは、軍の爲極  
めて緊要のことであり、在郷軍人に諸般の義務を課するは、畢竟之が爲である。在郷軍人が義務遂行  
の上に常に詳知して居らなければならぬことは、兵役法、兵役法施行令、同施行規則、陸軍武官服  
役令、同施行規則、陸軍召集規則、簡閱點呼執行規則、陸軍兵籍規則、その他であるが、これ等諸法  
規を悉く通讀記憶することは、多くの在郷軍人に取りて困難を感じることはある。本編は實にこれ等  
諸法規中より在郷軍人の日常知得し置くべき諸件を摘記し、之れに所要の注意を加へて、在郷軍人の  
便利を圖らんがため、主として、在郷下士兵卒の爲に、日常屢々遭遇する普通の心得を輯録したるも  
のである。

本編編輯の目的斯の如し。若し夫れ特種の問題に關しては、これのみに依りて處理し能はざる場合が  
多いのである。斯る場合には直に市區町村役場又は聯隊區司令部に就て指示を受くるか、或は帝國在



郷軍人會の支部、分會に就て教を受くることが肝要である。要するに在郷軍人たる者は、自ら一事を爲し、又は自己若くは家族の一身上の事務の起りたる場合は、直に其の事が軍人たる身分に關係を有し、何等かの手續を必要とするや否やを考慮し、若し必要ありと考へたるときは、遅緩なく之を處理せねばならぬ。此の如き心掛を以て之に當るならば、在郷軍人の本分を盡す上に於て遺漏なきを得るのである。本摘要中市長に或るは東京市、京都市、大阪市、名古屋市、横浜市に在りては區長に、町村長に或るは、町村長に準ずべき者にも該當するのである。

## 第二章 服 役

### 第一款 下士の服役

一、下士の服役は現役、豫備役及後備役である。その服役を終つた者で年齢四十年未満の者は年齢四十年に滿つる日迄引續き第一國民兵役に服し、年齢四十年以上四十五年未満の者は其の翌日を以て服役を免ぜられる。又下士にして服役中年齡四十五年に達する者は服役の期間に拘らず四十五年に達する年の三月三十一日を以て服役を免ぜられる。

二、下士の現役期限は左の通りである。

イ、憲兵科の下士は轉科前の服役年月を通算して六年。

ロ、歩、騎、砲、工、航空、輜重兵科の下士砲兵、工兵諸、經理部及衛生部の下士は前服役年を通算して四年、陸軍補充令第六十七條（航空兵科下士特別補充）の規定に依り下士に爲りたる者は任官年の十二月より起算して三年

ハ、砲、工兵諸工長は任官年の十二月から起算して三年

ニ、計手は計手に任ぜられた年の十二月から起算して二年

ホ、獸醫部下士は前服役年月を通算して五年

ヘ、軍樂部の下士は樂手補を命ぜられた年の十二月から起算して五年

ト、豫備役後備役の下士で再び現役に服した者並に歸休又は豫備役後備役の上等兵及之に同等級の兵卒で現役下士になつた者は再び現役に服した年又は現役下士に爲つた年の十二月から起算して二年（豫備役後備役者の現役下士志願に就ては第三章の一参照のこと）

チ、志願に依らずして兵卒から下士に任ぜられた者は徵集年の十二月一日（二期入營部隊にして後期入營者は六月一日）から起算して二年

三、下士の現役年限は左の通りである。

1、歩、騎、砲、工、航空、輜重兵科の隊附下士砲兵、工兵諸 四十年

2、其の他の下士 四十五年

四、下士にして現役期間満了した後再び現役を希望する者は、現役年限に滿つる日まで數次再服



役を志願することが出来る。

五、下士の豫備役期間の終期は任官の年から起算して九年目の三月三十一日である。陸軍補充令第八十條第一項第四號（航空兵科下士特別補充）に掲ぐる者の豫備役の終期は年齢三十五年に滿つる年の翌年三月三十一日である。

六、下士の後備役期間の終期は前の豫備役期間滿了の年から起算して十一年目の三月三十一日。陸軍補充令第八十條第一項第四號に掲ぐる者の後備役の終期は年齢四十八年を滿つる年の翌年三月三十一日である。

### 第二款 兵卒の服役

- 一、兵卒の服役は常備兵役（常備兵役は現役、豫備役に分つ）後備兵役、補充兵役（補充兵役は第一補充兵役、第二補充兵役に分つ）國民兵役（國民兵役は第一國民兵役、第二國民兵役に分つ）である。
  - 二、兵卒（憲兵及軍樂部を除く）の現役期間は二年であるが其の在營期間は左の通りである。
    - (イ) 青年訓練所の訓練又は之と同等以上の訓練を受け陸軍大臣の定むる檢定に合格した者て歩兵（戰車兵を除く）は一年六月其の他の陸軍兵（輜重輪卒、衛生部兵卒を除く）は一年十月二十日である。
- 檢定に合格するも在營間成績不良なれば一年十月二十日である。

(ロ) 現役兵て(イ)號の規定に依らない者の在營は一年十月二十日である。

(ハ) 輜重輪卒は一月二十六日、看護卒及磨工卒は一年六月、補助看護卒は三月である尙在營間品行方正、學術勤務の成績優秀なる者又は定員過剩を爲りたる者は其の在營を短縮される。

前に述べた現役期間は十二月一日から起算する。尤も二期入營部隊の後期入營兵は六月一日から起算する。

三、豫備役兵卒（憲兵科及軍樂隊を除く）の服役期間は現役終了後五年四月である。

四、後備役兵卒（憲兵科及軍樂隊を除く）の服役期間は豫備役終了後十年である。

五、補充兵役の服役期間は徵集年の十二月一日から起算して第一補充兵役第二補充兵役共に十二年四月である。

六、第一國民兵役は後備役を終つた者及び軍隊に於て教育を受けた補充兵て其の役を終つた者並に常備後備の役を免ぜられた者が滿四十歳迄之に服するのである。

第二國民兵役は滿十七歳から滿四十歳迄の男子で常備兵役、後備兵役、補充兵役及第一國民兵役でない者が之に服するのである。

七、憲兵上等兵及樂手補の服役期間は左の通りである。

一 現役 憲兵上等兵に在つては前の服役期間を通じて四年樂手補は之を命ぜられた年の十二月一日から起算して五年である。



- 二 豫備役 現役の期間を合して七年四月に滿つる日迄
- 三 後備兵役 前の服役を通じて十七年四月に滿つる日迄
- 八、下士兵卒の服役期間が滿ちた者でも戦時又は事變其の他必要の場合には服役を延長せられるのである。延長せられた期間は次に服すべき兵役の期間に之を通算する。
- 九、現役兵て入營前又は入營後六年未滿の懲役若しくは禁錮の刑に處せられた者の在營中刑の執行を受けた日數及在營中逃亡したる者の逃亡中の日數は現役期間に算入せられぬのである。
- 十、六年の懲役若しくは禁錮以上の刑に處せられた者は兵役に服することが出来ぬ故兵籍から除かれるのである。

### 第三章 再現役志願の手續

一、豫備役後備役軍曹伍長、二、三等計手、一、二、三等縫工長、一、二、三等靴工長及二、三等看護長、二、三等磨工長は現役滿期後二年以内に更に現役を志願することが出来る。

各兵科を除外兵科の豫備役後備役軍曹伍長にして六年以上現役に服したる者は現役滿期後二年以内に憲兵科の現役下士を志願することが出来る。

歸休又は豫備役上等兵及之に同等階級の兵卒にて下士適任證書を有する者は歸休を命ぜられ又は現役期間に滿ち退營したる後二年以内に現役下士を志願することが出来る。

前諸項に依つて現役下士を志願する者は左記様式の願書を本籍地市町村長及聯隊區司令官を経て服役せむとする部隊長に差出すのである。

(用紙適宜)

#### 現役下士志願ニ付御願

原所屬部隊	何兵第何聯(大)隊
現官任命(現等級ニ進級)	何年何月何日
退營年月日	何年何月何日
現役に服シタル年數	何年何ヶ月
現役滿期後の職業	何々
現役希望ノ部隊	何兵第何聯(大)隊
本籍地	何々
現住地	何々
	徵集年役種兵科部官等級
	氏名
右現役下士希望ニ付御採用被成下度此段及御願候也	
昭和 年 月 日	
何兵第何聯(大)隊長殿	右 氏 名印



第四章 服役上の届出

一、在郷軍人の身上異動に付ては、新法は戸籍法寄留法の届出を其儘利用することに於て、別に届出を要せざることにせられた。此の事は、當局の大英断であつて、在郷軍人の爲には非常に都合のよい事であるが、然し、在郷軍人が戸籍法や寄留法に依つて爲すべき届出、即ち出生、死亡、養子縁組、離縁、失踪、轉籍、廢家、絶家、廢絶家再興、分家、氏名族稱變更、國籍の得喪、戸籍の訂正寄留、寄留換、本籍地復歸等の届出を怠るに、召集其の他の事務に非常な蹉跌を生じ、折角の新制度も亦舊態に逆戻りをしなければならぬ。依つて在郷軍人は、在郷軍人の義務として、又一般公民の儀表として、是非共是等の届出を確實にせなければならぬ。

二、歸休兵、第一補充兵、及び豫備役後備役の下士兵卒は旅行滞在在郷軍人の他本籍地の市區町村を離れる場合には常に其の行先其の他必要なる事項を同一世帯の家族（戸主を含む）中家事を擔當する者に詳知させて軍衙の命を澁滞なく受領し得る如くして置かなければならぬ。世帯が本籍地市區町村に在る場合に其の世帯の在る市區町村を離れる場合にも同様に家事擔當者に自分の行先等を詳知させて置かなければならぬ。若し單身戸主の如き者で自分の行先を知らして置くべき家族がない者は軍衙の命あるべき之を傳達すべき者（成年の者に限る）を本籍地市區町村内に於て定め豫め連署を以て本籍地の市區町村長に届出置き且其の者に自分の居所を常に詳知させて置かなければならぬ。

三、歸休兵、第一補充兵、及び豫備役後備役の下士兵卒にして内地より帝國外の地（關東州及滿洲を除く）に旅行又は在留せんとする者は出發前左の様式に依り書面を以て本籍地の市區町村長を経て本籍地の聯隊區司令官に届出なければならぬ。

(用紙適宜)

外國旅行(在留)届

一、本籍地 府縣都市區町村字番地

二、現住地 何々

三、徵集年、役種、兵種、等級、 氏名

四、行先 何地

五、目的 何々(官廳ノ命ニ依ルモノハ其ノ官廳名ヲ記スベシ)

六、出發豫定期日及發航地 何年何月何日何地

七、歸朝豫定期 何年何月何日(不明)

右ノ通帝國外ノ地ニ旅行(在留)致スベク候ニ付及届出候也

昭和 年 月 日 本人 氏 名印

何聯隊司令官殿

右の届出を爲したる者出發豫定期日後十四日以内に出發せざるべき又は歸朝したるべきは其の後十四日以内に其の旨を本籍地、市區町村長を経て本籍地の聯隊區司令官に届出なければならぬ。又右



に掲げた在郷軍人は本籍地から旅行日数七日以上を要する帝国内の地又は航海に七日以上を要する水域に赴かうとするときも同様届出なければならぬ。

四、歸休兵、第一補充兵、及び豫備役又は豫備役の下士兵卒にして内地又は帝国外の地（關東州及滿洲を除く）より朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲に到り當該地域に在留する者は在留地到着後十四日以内に朝鮮に在りては警察署長、間島に在りては領事官、臺灣に在りては郡守市尹又は支廳長、關東州に在りては民政署長又は同支署長、滿洲に在りては警察署長又は領事官を経て師團長又は軍司令官に届出なければならぬ。其の届書の様式は外國在留届 出に準ずる、又右の者が朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲に在留し當該地域内で在留地を變更したるとき又は他の地域若は内地に到るときも同様届出を要する、若し其の在留地から外國に行くときは三に掲げた帝国外（旅行）在留届を出すのである。

五、歸休兵、第一補充兵、及び豫備役、後備役の下士兵卒にして所在不明の者あるときは憲兵又は警察官吏の證明書を添へて其の戸主（本人戸主なれば家族）より十四日以内に本籍地市町村長に届出べきである。所在不明の者歸郷若は所在分明したるときも亦同様である。但し證明書は要しない、其の届書の様式は左の如くである。但し此の届は口頭でも差支はない。

在郷軍人所在不明届（分明届）

（用紙適宜）

- 一、本籍地 府縣郡市町村字番地
  - 二、現住地 何々々
  - 三、役種、兵種、徵集年、等級 氏 名
  - 四、所在不明（分明）トナリタル年月日 何年何月何日
  - 五、所在不明ノ者ニ在リテハ其ノ事實ノ要旨 出漁遭難（何々々）
- 右所在不明（分明）ニ付及届出候也

昭和 年 月 日

何市區町村長殿

本籍地 府縣郡市區町村字番地

現住地 何々々

戸主氏 名 印

朝鮮、臺灣、關東州又は滿洲に在留する在郷軍人に付ては右の届出は朝鮮に在りては警察署長、間島に在りては領事官、臺灣に在りては郡守、市尹、支廳長、關東州に在りては民政署長同支署長、滿洲に在りては警察署長、領事官を経て師團長又は軍司令官に差出すのである。

六、在郷軍人（國民兵を除く）にして市町村長、助役、収入役又は之に準ずるもの又は帝國議會府縣會市町村會其他之に準ずるもの、議員になつた者は勤務演習簡點呼を免ぜらるゝのであるか



ら之に就きたるときは其の日より十四日以内に本籍地市長又は町村長及警察署長を経て本籍地所管の聯隊區司令官に届出べきである。其の職を退きたるときも亦同様である。又此等の者は願に依りて演習召集簡閱點呼を受ける事が出来るが其の場合の願書の差出先經由等は右に同じである。

七、在郷軍人在郷中傷痍疾病の爲永久服役に堪へないときは在職陸軍醫官の診断證書若は地方醫師の病況書を添へて本籍地市町村長を経て本籍地所管の聯隊區司令官に届出べきである。

八、豫備役後備役又は補充兵役に在る者にして左に掲たる者は其就職又は雇入の日より十四日以内に左記様式の届書を管海官廳又は管海官廳の事務を行ふ市町村長若は之に準ずる者(外國にありて)の證明を受け其旨を本籍地市町村長を経て本籍地所管の聯隊區司令官に届出べきである。其の退職し又は雇止したるときも亦同様である。

イ、船舶職員試験規定に依り遞信大臣の允當に認むる學校を卒業し又は海技免狀を有する者にて西洋型船舶の乗組員たる者。

ロ、船舶國籍證書を受有する船舶の乗組員中事務長、水夫長、水夫、舵夫、火夫長、火夫、油差、賄方たる者。

船舶乗組(船舶乗組解雇)届

船舶ノ名	何々丸	何々氏	名印
乗組ノ員	水夫長(舵夫等)		
乗組(解雇)ノ時	何々		
本籍地	何々		
右船舶ニ乗組(船舶乗組解雇セラレ)候ニ付及御届候也	徵集年役種官等級	氏	名
昭和 年 月 日		右 氏	
何聯隊區司令官殿			

(用紙適宜)

九、在郷軍人正當の事由なく本章に規定する届出(七の届出を除く)を怠りたるときは拘留又は料料五十圓以下の罰金に處せらるゝのである。又自己の居所を家事擔當者に詳知せしめざる爲軍衛の命令を通報するを得ざるに至らしめたときは、亦同様である。家事擔當者又は本人に代りて令狀を受けたる者正當の事由なく召集の命令を確實迅速に本人に通報(到着遅延の虞ある場合其の他必要の場合には電信等にて)せず又は令狀を交付するの處置を怠りたるときは拘留又は料料に處せらるゝのである。



### 第五章 召集及簡閱點呼

召集の種類は充員召集、臨時召集、國民兵召集、演習召集、教育召集及補缺召集である。之等の外に充員召集の演習を爲すの目的を以て充員召集の手續に準じ實施する演習召集がある即ち特別臨時演習召集である。

尙在郷軍人を點檢査閱教導する爲に簡閱點呼がある。

召集及簡閱點呼は通常令狀を以て命令せられるのである。

召集に應ずる者若は簡閱點呼に參會する者にして鐵道(鐵道附帯の連)を利用する場合には其の令狀と共に鐵道乗車證明書を市町村長から交付せらる、筈であるから令狀に(自何種)の記入を爲し(鉛筆を用ふ)鐵道乗車證明書に賃金の半額を乗車驛出札掛に渡し其の令狀には認印を受け乗車するこゝが出来。但右の鐵道乗車證明書を受けずして出發する者又は水火盜難の爲該證明書を失つた者は附近の市町村長に就き令狀又は憲兵警察官吏の證明を證憑として鐵道乗車證明書を請求するこゝが出来るのである。

召集に應ずる者にして日本郵船株式會社又は大阪商船株式會社の船舶に乗船する場合には召集令狀を示せば賃金の二割を減じ乗船するこゝが出来るのである。

在郷軍人故なく召集の期限に後れ平時にありて十日を過ぐる時は一年以下の禁錮、戰時又は事變の爲

め召集を受けたる場合に於て五日を遅れたる時は二年以下の禁錮に處せられるのである。

召集を免る、目的にて疾病を作為し身體を毀傷し其の他詐僞の行爲をした在郷軍人は三年以下の懲役に處せられるのである。

召集に應ずる者には部隊到着後該隊にて旅費を給せらる。但し前金渡を受けざれば召集に應ずるこゝの出來ぬ者は出發前現住の市町村長に請求して受領するこゝが出来るのである。

點呼に參會する者には旅費を給せられない。

總て届、願書に添附する醫師の診斷書には病名、原因、經過、現症、豫後、療法を詳記し特に到着地又は點呼場に到るこゝの出來ぬ者は其の理由を明にすべきものである。

但し已むを得ない事情がある場合には憲兵又は警察官吏の證明書を以て診斷書に代へる事が出来る。

召集に因つて召集せられた者の家族が生活をする事が出来ない場合には市長又は町村長及警察署長を経て召集の免除を召集事務長に願ひ出る事が出来る。併し乍ら此の願ひをする場合は一旦應召した後になければならぬので軍事救護法なごによりて救濟の出來ない場合に限るのであるから眞に急迫の場合でなければならぬのである。此の願ひの書式は左の通りである。

(用紙適宜)

#### 家事故障ノ爲召集免除願

召集部隊

何兵第何聯隊(大)隊

本籍地

府縣郡市區町村字番地



別紙の事故(別紙ニ何召集ニ應ジ家族自活シ能ハザル事實ヲ詳記スル事)有之候ニ付何召集免除許可相成度市町村長(憲兵警察官吏)ノ證明書相添へ及願出候也

昭和 年 月 日

何兵第何聯(大)隊長殿

右 氏

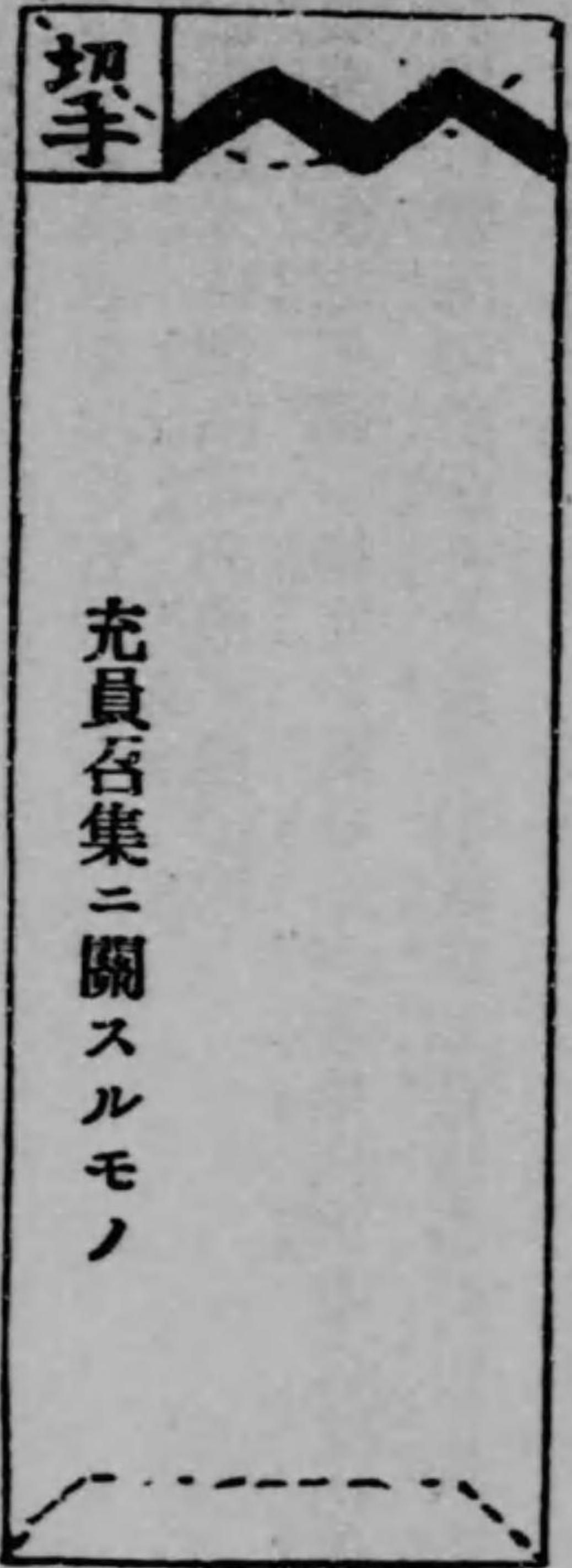
名 印

第一款 充員召集

- 一、充員召集とは動員實施に方り諸部隊の要員を充足する爲、在郷軍人を召集するもので、動員令に依つて實施されるのである。
- 二、召集令状は市町村長から本人又は家族(召集通報人又は其の家族)に交付せらるゝのである。令状交付を受けたる者は令状に添附してある受領證に受領の年月日を記入し捺印(本人に代つて受領したるものは記名捺印)して直に返付すべきである。正當の事由なくして此の規定に背く者は拘留又は科料に處せらるゝのである。
- 三、本人に代つて召集令状を受領した者は直に確實迅速なる方法で召集部隊到着地、及到着日時を(到着遅延の虞ある場合其他必要の場合には電信等を以て)本人に通報し且つ召集令状を速に本人又は科料に處せらるゝのである。

に交付するの手續をなすべきである。正當の事由なくして此の規定に背く者は拘留又は科料に處せらるゝのである。

封筒表面



葉書表面



備考 Mは一見明瞭なる太さとし著色は適宜とす。

充員召集 若は臨時召集の通報をする際の郵便物の封筒、端書には自分で右記の如く標示を記入し一般郵便物との區別を明瞭にすべきである。

四、本人召集令状を受領したるときは之を携へ其の令状に定められたる日時に所命の地に到着し召集事務所に届出づべきである。召集通報人より召集通報を受けたる者令状の交付を待たんが爲却て到着遅延の虞れある場合には令状の到着を待たず直に應召するをよしとする。

五、令状又は召集の通報を受けたる日時の關係上指定の日時に到着地に到るここの出来ぬ者は所在地の憲兵又は警察官吏に就て令状又は通報を受けたる日時及出發日時の證明書を受け到着の上召集



事務所に届出づべきである。此の規定に違反した者は拘留又は科料に處せらるゝのである。前項の場合に於て召集事務所閉鎖後なるこき又は集合事務所に到着すべきこきは直に召集部隊に到着すべきである。

六、召集に應ずる際携帯すべき物品は概ね左の通りである。

- 一、召集令状
- 一、軍隊手牒
- 一、適任證書
- 一、勳章記章
- 一、各種徽章
- 一、印形

一、風呂敷又は油紙其の他必要の物

七、應召員傷痍疾病の爲め指定の日に到着地に到るここの出来ぬ者は聯隊區司令官に宛てたる左記様式の届書に醫師の診斷書を添へて直に本籍地市町村長時に召集事務所へもに差出すべきである。

其一

何々ノ爲到着遅延届  
到着日時 何年何月何日午前(後)何時

(用紙適宜)

到着地 何々  
召集部隊 何兵第何聯(大)隊  
本籍地 府縣郡市區町村字番地  
徵集年役種官等級 氏名

右何々ノ爲到着期日ニ到リ難ク候ニ付醫師ノ診斷書(何々ノ證明書)相添へ及届出候也  
昭和 年 月 日 右 氏 名 印

何聯隊區司令官殿

其二

(用紙適宜)

到着 到着 延届  
到着日時 何年何月何日午前(後)何時  
到着地 何々  
召集部隊 何兵第何聯(大)隊  
本籍地 府縣郡市區町村字番地  
徵集年役種官等級 氏名

右應召途中何處ニテ疾病ニ罹リ(何々ニ依リ)召集期日ニ到着地ニ到リ難ク候ニ付醫師ノ診斷書(何々ノ證明書)相添へ及届出候也  
昭和 年 月 日 右 氏 名 印

何部隊長殿



八、應召員傳染病豫防の爲交通遮斷隔離又は停留を命ぜられ其の他止むを得ざる事故に因り指定の日時に到着地に到るここの出来ぬ者は聯隊區司令官に宛てたる届書を直に本籍地の市町村長(出後なるに召集事務所へも)に差出し且つ其の地市町村長、憲兵、警察官吏、船長又は驛長の證明書を受け到着の上召集事務所に差出すべきである。其の届書の様式は左の通りである。

(用紙適宜)

到着日時	何年何月何日午前(後)何時
到着地	何々
召集部隊	何兵第何聯(大)隊
本籍地	府縣都市區町村字番地
	徵集年役種官等級 氏 名
右應召途中何處ニテ傳染病豫防ノ爲何日間交通遮斷ヲ命ゼラレ(何々ノ事故ニ因リ)召集期日ニ到着地ニ到リ難ク候ニ付何々ノ證明書相添へ及届出候也	
昭和 年 月 日	
何部隊長殿	右 氏 名 印

九、犯罪所在不明等の爲め指定の日時に到着地に到るここの出来ぬ者あるときは令狀を受領したる者

より聯隊區司令官に宛てたる左記様式の届書に憲兵又は警察官吏の證明書及令狀を添へて直に本籍地の市町村長に差出すべきである。

(用紙適宜)

犯罪(所在不明)ノ爲不應召届	
到着日時	何年何月何日午前(後)何時
到着地	何々
召集部隊	何兵第何聯(大)隊
本籍地	府縣都市區町村字番地
	徵集年役種官等級 氏 名
右犯罪(所在不明)ノ爲到着地ニ到リ難ク候ニ付憲兵(警察官吏)ノ證明書相添へ及届出候也	
昭和 年 月 日	
何聯隊區司令官殿	右召集通報人 氏 名 印 (戸主又は家事擔當者)

七、八、九の届出を爲さざる者は拘留又は科料に處せらるゝのである。

十、諸種の事故(十一の場合を除く)に依り到着地に到るここの出来ぬ旨を届出たる者其の事故の止みたるときは直に左記様式に依つて本籍地市町村長に届出で直に應召し到着の上召集事務所に届出



つべきである。但し召集事務所閉鎖後なるときは又は集合所に集合すべきときは召集部隊に到着すべきである。

(用紙適宜)

到着遅延事故止届

到着日時 何年何月何日午前(後)何時

到着地 何々々

召集部隊 何兵第何聯(大)隊

本籍地 府縣郡市區町村字番地

徴集年役種官等級 氏

右召集ノ命令ヲ受ケ何々ノ事故ニ因リ未ダ應召致サズ候處今般事故止ミ候ニ付届出候也

昭和 年 月 日

右 氏

名 印

何市(町)(村)長殿

十一、非常事變に因り交通断絶し到着地に到着するこゝが出来ぬ場合には其の旨を最寄諸部隊及憲兵又は警察官吏員に届出て指揮を受くべきである。此の規定に違背する者は拘留又は科料に處せられるのである。

第二款 臨時召集及國民兵召集

一、臨時召集とは戦時若は事變の際必要ある場合に臨時在郷軍人を召集し若くは平時に於て警備其の他の必要に因り歸休兵又は服役第一年度の豫備兵を召集するを謂ふのである。

二、外國に居住又は旅行中の在郷軍人は戦時又は事變に際し必要の時期に臨時召集を命ぜらるゝのである。

三、臨時召集に付在郷軍人の心得は充員召集の場合に於ける心得に準ずるのである。

四、國民兵召集とは戦時又は事變の際國民兵を召集するを謂ふのである。

國民兵召集に付在郷軍人の心得は充員召集の場合に於ける心得に準ずるのであるが、尙其の時に方つて別に達せらるゝこゝがある。

第三款 演習召集

一、演習召集とは勤務演習の爲在郷軍人を召集するを謂ふのである。其の召集回数、標準、年次及日数は左の通りである。但し師團長特別の必要あるときは召集年次を適宜變更する事があるし又必要に際しては臨時に演習召集を命ぜらるゝ、等左表に依らざるこゝがある。



豫備役後備役上長官士官下士兵卒補充兵演習召集回数

標準年次及日數表

種	類		回数(役種ヲ通シ)	標準年次	日數
	後備役	豫備役			
各兵科上長官士官(幹部候補生出身ノ士官ヲ除ク)	後備役	豫備役	二回	第二、四年	
幹部候補生出身ノ士官(士官ニ任ゼラル、ノ資格ヲ有スル者ヲ含ム)	後備役	豫備役	三回	第二、第五、第九年	
各部士官(幹部候補生出身者ヲ除ク)	後備役	豫備役	二回	第二、四年	
各兵科特務曹長	後備役	豫備役	二回	第二、四年	
各兵科下士(幹部候補生出身者ヲ除ク)	後備役	豫備役	二回	第二、三年	

日年翌ノ年ルタリ入ニ役

二十一日

各部	衛生		各兵科兵卒(輜重輸卒ヲ除ク)	各部准士官下士(幹部候補生出身ノ下士ヲ除ク)		幹部候補生出身ノ下士	
	看護卒	及磨工卒		後備役	豫備役	後備役	豫備役
各兵第一補充兵	一回		二回		三回		
	第四年	第六年	第十年	第四、第十年	第二年、第四年	第二年、第五年	
徴集			算起リ				
年ノ			ス				
ヨリ			ス				
起算			ス				
二十一日			十四日				
二十四日			二十一日				

一、豫備役後備役ノ者ニシテ下士ヨリ准士官ニ、准士官ヨリ士官ニ任官又ハ進級シタル者ノ演習召集ハ任官又ハ進級年ヲ第一年起算スルモノトス

二、歩兵科兵卒(下士)ニシテ擔架術ヲ修業シタルモノニ在リテハ本表ニ依ラズ第三年(豫備役第二年)又ハ第九年(後備役第一年)ヲ標準年次トスルコトヲ得

三、豫備役後備役兵卒ニシテ演習召集中下士ニ任セラレタル者ノ召集回数ハ兵卒トシテノ召集回数ヲ通算スルモノトス

四、豫備役後備役准士官下士兵卒ニシテ士官勤務適任證書又ハ下士適任證書ヲ有スル者ノ演習召集ハ現官



等級相當ノ召集回数年次及日數ニ依ル  
 五、本表ノ外必要ナル演習等ノ爲召集シ又本表日數ノ範圍内ニ於テ各年次ノ召集日數ヲ彼此融通スルコトアルベシ  
 六、召集期間ハ時ヲ以テ計算ス

二、演習召集ノ召集部隊は本籍地所在の師管内にある部隊である。但し必要あるときは他の師管内にある部隊に召集せらるゝ事がある。寄留地に於て勤務演習に應ずるこゝの許可を受けたる者は寄留地所管の師團に召集せらるゝのである。

附表第二

所管内ノ部隊ニ召集スベキ者ノ召集部隊表			
區分	階級	召集部	隊
各兵科	上長官以下	當該兵科ノ各隊	
經理部	准士官以下	各隊	
衛生部	士官准士官以下	師團司令部所在地ノ各隊	
	下士官以下	各隊	

獸醫部	士官		師團司令部所在地ノ騎、砲、輜重兵隊
	准士官	以下	
	騎、砲、輜重兵隊		

一、師團長ハ演習召集ノ際特種ノ戰時職務ヲ有スル者ヲシテ之ニ適應スル勤務ヲ修得セシムル爲又ハ戰時充用上其ノ他必要アルトキハ師團内ノ他部隊ニ召集シ其ノ勤務ヲ修得セシムルコトヲ得  
 二、補助看護卒ノ召集部隊ハ衛戍病院所在地ノ部隊トス  
 三、獸醫部下士適任證書ヲ有スル者ノ召集部隊ハ獸醫部准士官以下ノモノト同シ

附表第三其一

電信隊又ハ飛行隊ニ於テ演習又ハ教育ノ爲召集スベキ者ノ召集部隊表			
部	隊	師	管
電信	第一聯隊	第一、第二、第三、第七、第八、第九、第十四、第十六師管	
電信	第二聯隊	第四、第五、第六、第十、第十一、第十二師管	
飛行	第一聯隊	第一、第三、第九、第十、第十四師管	
飛行	第二聯隊		
同	第七聯隊		



同	第三聯隊	第四、第十一、第十六師管
同	第四聯隊	第五、第六、第十二師管
同	第五聯隊	第一、第二、第七、第八師管

備考

- 一、電信隊ノ無線及電氣中隊ニ於テ教育ヲ受ケタル者ハ電信第一聯隊ニ之ヲ召集スルモノトス
- 二、飛行第七聯隊ニ召集スベキ者ハ同隊ニ於テ服役シタル者トス
- 三、第一師管ニ在リテハ飛行第七聯隊ニ召集スベキ者ヲ除クノ外總テ飛行第五聯隊ニ之ヲ召集スルモノトス

附表第三其二

自動車ニ關スル教育ヲ受ケタル者ノ演習ノ爲召集スベキ者ノ召集部隊表	
部	隊
近衛輜重兵大隊	第一、第十四師管
輜重兵第一大隊	第一、第二師管
同	第三師管
同	第四、第十師管

同	第五大隊	第五、第十一師管
同	第十四大隊	第七、第八、第十四師管
同	第十六大隊	第九、第十六師管
同	第十八大隊	第六、第十二師管

附表第三其三

他師管ニ在ル部隊ニ召集スベキ者ノ區分表

本籍	召集	師管	近衛師團第一師團	第二師團	第三師團	第四師團	第七師團	第十二師團	第十六師團
		師團		重砲兵		重砲兵		重砲兵	重砲兵
第六師團								山野戰重砲兵	
第五師團								重砲兵	
第三師團					重砲兵				
第二師團				重砲兵					







村長に於て三日以内到着期日延期の承認を與へることが出来るのである。到着期日の延期を願出た  
る後でも別に指令がなければ指定の日時に召集に應ずべきものである。

(用紙適宜)

演習召集到着期日延期願

(下士以上ニ在リ  
テハ役種編入年)

到着日時 何年何月何日午前(後)何時

到着地 何々々

召集部隊 何兵第何聯(大)隊

延期ノ事由 父某死亡(母某危篤等)

本籍地 府縣郡市區町村字番地

徵集年役種官等級 氏 名

右演習召集ヲ命ゼラレ候處何々ニ依リ到着期日ヲ延期相成リ度別紙醫師ノ診斷書(市町村長)  
(警察官吏)(何々)ノ證明書相添へ此段及御願候也

昭和 年 月 日

何聯隊區司令官殿

右 氏

名 印

五、應召員事故の爲指定の日時に到着地に到る事の出来ぬ者の手続は左の通りである。

1、傷疾、疾病の者は醫師の診斷書を添へて直に市町村長 可者は寄留地市町村長 を經て聯隊區司令官に

届出づべきである。

2、傳染病豫防の爲交通遮斷隔離又は停留を命ぜられ其の他止むを得ざる事故に因る者、犯罪又は  
所在不明等の者あるときは令状を受領したる者、非常事變に因り交通遮斷したるときは其の地の  
市町村長、憲兵、警察官吏、船長又は驛長の證明書を添へて聯隊區司令官に届出づべきである。  
應召員出發後事故發生して前項の届出を爲す場合には召集部隊長に宛て届出づべきである。

前二號の届出を爲したる後尙事故止まず期日以内 演習召集に在つては召集期日後五  
來ぬ者は令状を返附すべきである。 日、教育召集に在りては十日以内 に到着地に到るここの出

六、以上掲ぐるものを除く外演習召集に就ての心得は充員召集の場合に於ける心得に準ずるのであ  
る。

七、本籍地以外の聯隊區に寄留する者は願に依り寄留地師管内の軍隊にて演習召集を受けることが出  
來るのである。

前項の願出を爲す者は左記様式の願書を毎年十一月三十日迄に寄留地市區町村長を經て寄留地所管  
の聯隊區司令官に差出し許可を受くべきである。

(用紙適宜)

寄留地演習召集應召願

寄留地 府縣郡市區町村字番地



寄留年月日 何年何月何日

本籍地 何々

徵集年(下士以上ニ在リ)役種官等級 氏

右何年度寄留地ニ於テ演習召集ニ應召致度候ニ付許可相成度及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏

名 印

何聯隊區司令官殿

前項の願出期日後に寄留し寄留地に於て勤務演習を爲さむとするものは情を具し市區町村長より寄留に關する證明を受け寄留の日より十四日以内に出願することが出来る、其の願出手續は前項と同様である。但し此の願は許可せられざることがある。前二項の許可を得たる者本籍地に復歸し又は寄留換を爲したる爲め其の許可の取消を爲さむとするものは寄留地所管の聯隊區司令官に左の書式に依つて願出ることが出来る。此の場合には本籍地の勤務演習に應召せしめ得る者に限り許可せらるゝことがある。

(用紙適宜)

寄留地演習召集應召許可取消願

寄留地 府縣都市町村字番地

本籍地 何々

徵集年(下士以上ニ在リ)役種官等級 氏

取消ノ事由 寄留換(本籍地復歸)

右寄留地ニ於ケル何年度演習召集應召許可取消相成度及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏

名 印

何聯隊區司令官殿

寄留地に於て勤務演習を爲すことの許可を得たる者は本籍地に復歸し又は寄留換を爲すも許可の取消を許されたる場合を除くの外其の許可を受けたる地に於て演習召集を受くべきものである。八、避くべからざる事故の爲演習召集の延期を願はむとする者は其の事實を證明し本籍地市區町村長を経て本籍地所管の聯隊區司令官に願出て許可を受くべきである。但し其の願書には本籍地市區町村長又は關係ある官公署の長の證明書を添附する必要がある。其の様式は左の通りである。

(用紙適宜)

演習召集延期願

本籍地 府縣都市區町村字番地

徵集年(下士以上ニ在リ)役種官等級 氏

名



右何年度演習召集ニ召集セラルベキ處(演習召集ヲ命ゼラレ候處)別紙(左記)理由ニ依リ何年月日ヨリ何年月日ニ至ル間召集ノ延期許可相成度別紙市町村長(何々長)ノ證明書相添へ此段及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏

名 印

何聯隊區司令官殿

注 意

- 一、召集令状受領後ナルトキハ召集部隊(必要アルトキハ到着地ヲモ)到着日時ヲ明示スベシ
- 二、寄留ノ應召を許可セラレタル者ナルトキハ其ノ旨ヲ明示シ且本籍地市町村長ニ代ヘ寄留地市町村長ノ證明書ヲ添付スベシ

### 海外居住者の召集

九、在郷軍人(國民兵を除く)にして朝鮮臺灣關東州又は滿洲に在留する者は其の地に於て充員召集及勤務演習を行ふのである。其の願届に關する心得は本籍地に於けると同様である。演習の爲召集すべき者にて所管區域内に召集する部隊なきものに對しては當分の内演習召集を行はない。又僻陬の地に居住するものに對しては演習召集を行はない。こゝがある。海外在留者の在留地變更、旅行滞在、在留地復歸に關する願届に要する召集通報人は其地在留者

を以て定むべきで總て十四日以内に届出を必要とする。

演習召集に關し内地に於ける聯隊區司令官の事務を執る者は朝鮮に在りては師團長、臺灣に在りては軍司令官、關東州又は滿洲(關島を)に在りては關東軍司令官、間島に在りては第十九師團長である。又内地の市區町村長に相當する者は朝鮮に在りては警察署長、臺灣に在りては郡守、市尹及支廳長、關東州にありては民政署長又は民政支署長、滿洲(關島を)に在りては警察署長又は領事官(領事官の職務を含む)間島に在りては領事官(領事官の職務を含む)である。

### 第四款 教育召集及補缺召集

- 一、教育召集は教育の爲未だ教育せざる第一補充兵を召集するのである。目下は歩兵、戰車兵、野(山)砲兵、野戰重砲兵、重砲兵、高射砲兵、工兵、鐵道兵、電信兵中の人員を限り服役の初年から翌年の三月迄の間に於て九十日間之を召集するを謂ふのである。但し歩兵で青年訓練所の訓練又は之ニ同等以上ニ認むる訓練を終了し陸軍大臣の定むる檢定に合格したる者又は成績特に優秀なる者の召集日数は七十五日に短縮される。
- 二、補缺召集は平時に於て兵員の補缺を要する時臨時歸休兵を召集するを謂ふのである。
- 三、教育召集及補缺召集に關する心得は充員召集に關する心得に準ずるのである。但し應召員中事故に依り歸郷を命ぜられたる者又は召集解除を命ぜられたる者及事故の爲到着地に到るこゝの出來ぬ



者に就いては演習召集の場合の手續に準ずるのである。

### 第五款 簡閱點呼

一、簡閱點呼とは豫備役後備役の下士兵卒歸休兵及補充兵を參會せしめて其の一般の狀態特に軍人精神の保持及軍事思想普及の程度健康狀態並に服役上の義務履行の確否等を査閲し所要の教訓を與へ在郷軍人に其の本分を全うせしむる如く指導するを謂ふのである。

此の點呼に參會すべき回数及年次は別段の規定ある場合を除くの外は左の區分によるのである。

一、豫備役後備役下士（志願によらずして任官したる者及幹部候補生出身の者を除く）に在りては任官年の翌年より起算し、又兵卒及志願によらずして下士に任官したる者に在りては徵集年の翌年より起算して十二年に滿つる間通常一年置きに之を行ふ。

二、幹部候補生出身の下士は入營年の翌年より起算して十二年に滿つる間通常一年置きに之を行ふ。但し二月入營の者は入營年より起算す。

三、豫備役後備役兵卒及第一補充兵（未だ教育せざる者を除く）に在りては其の服役間を通じ通常一年置きに五回す。

四、未だ教育せざる第一補充兵（戰時輸卒隊に於て勤務したる補充兵役輻重輸卒、各兵科兵卒にして教育在隊三ヶ月に滿たずして現役より補充兵役に轉じたる者及教育召集應召者にして教育終了前召

集を解除せられたる者を含む）に在りては其の服役間を通じ四回し通常二年置きす。

幹部候補生にして豫備役士官に任ぜられる資格を具へた者は簡閱點呼に之を參會させることはないのである。

充員召集、臨時召集、又は教育召集及補充召集の解除、歸休、現役、又は就職滿期等に依り陸軍各隊官衙學校より歸郷したる者及演習召集に召集せらるべき者は其の年の簡閱點呼に參會したるものを見做されるのである。

傷痍疾病其の他の事故に依つて點呼に參會しない者は規定回数範圍内で適宜の年簡閱點呼に參會せしめ得るのである。

二、簡閱點呼に參會するものは左の諸點に注意すべきである。

イ、令狀、軍隊手牒、補充兵證書及奉公袋を携ふるべきこと。

ロ、軍服所持者は成るべく之を着用すること。其の他の者に在りては質素にして且端正を害せざる程度に於て敏活なる動作に便利なる服裝を爲すこと特に靴其他運動に便なる履物を穿つが宜しい。

ハ、定められたる時刻より若干時前に參集すること。遅刻したときは更に他の點呼場に參會を命ぜらるることがある。

ニ、簡閱點呼執行官の意圖命令に違反し若くは上官に禮を失した時は陸軍刑法又は陸軍懲罰令に



依つて處分せらるゝことがある。

ホ、參會の爲往復途中双點呼場に於ては服装の何たるを問はず上官に對して敬禮をなすべきてある。

三、寄留地に於て簡閱點呼を受けむとする者は寄留地に於て勤務演習を受くる場合に準じ毎年三月三十一日迄に寄留地所管の聯隊區司令官に願出許可を受くべきである。其の願書の様式は左の通りである。

(用紙適宜)

寄留地簡閱點呼參會願

寄留地 府縣郡市區町村字番地

本籍 何々

徵集年(下士ニ在リテ) 役種兵種官等級 氏 名

右本年寄留地ニ於テ簡閱點呼ニ參會致度候間御許可相成度及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏 名印

何聯隊區司令官殿

前項の願出期日後に寄留地に於て簡閱點呼を受けんとするものは情を具して本籍地及寄留地の點呼執行期日の各二十日(本聯隊區内にて受けせんまで)前迄に願出づること出来る。但し此願は許可せられざるこ

がある。

四、事故の爲參會するこの出來ぬ者の届出に關しては演習召集の場合の規定に準ずるのである。但し其の届書は參會日時迄に市區町村長に差出すのである。

五、直系尊屬妻子の死亡、重態又は同一戸籍内の者の死亡及天災等に依る不參の願出は演習召集到着期日延期の願出と同じである。其の様式は左の通りである。

(用紙適宜)

簡閱點呼不參願

參會日時 何年何月何日午前何時

點呼場 何々

不參ノ事由 父某死亡(母某危篤等)

本籍地 府縣郡市區町村字番地

役種兵種官等級 氏 名

右簡閱點呼ヲ命ゼラレ候處何々ニ依リ不參許可相成度別紙醫師ノ診斷書(何々ノ證明書)相添へ此段及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏 名印

何聯隊區司令官殿



又事故に依り參會期日の變更を願出づる者は情を具し且參會期日及希望する變更期日を明記し市町村長を経て聯隊區司令官に願出るのである。其の様式は左の通りである。

(用紙適宜)

簡閱點呼參會期日變更願

本籍地(寄留地) 府縣郡市區町村字番地

參會ヲ命ゼラレタル點呼場 何 月 何 日

希望スル參會點呼場 何 月 何 日

役種兵種官等級 氏 名

右簡閱點呼參會ヲ命ゼラレ候處別紙(左記)理由ニ依リ右記希望ノ如ク參會期日ノ變更許可相成度此段及願出候也

昭和 年 月 日

右 氏

名 印

何聯隊區司令官殿

注意 一、希望スル參會日次及點呼場ニ數種アル時ハ之ヲ列記スルモ妨ケナシ

六、正當の事由なくして點呼に參會せざる者は五十圓以下の罰金又は拘留若は科料に處せらるゝので

ある。

七、この外、寄留地に於ける總ての心得は、寄留地にて勤務演習を爲す者の心得に準じるのである。

八、朝鮮臺灣關東州に在留する者の簡閱點呼に就いての心得は演習召集に於ける海外在留者と同じである。



昭和六年十月二十五日印刷  
昭和六年十月二十八日發行

不	許
複	製

發行所

東京市牛込區原町三丁目八番地

編輯兼 帝國在鄉軍人會本部

發行者 右代表者 小原正忠

東京市牛込區原町三丁目八番地

印刷者 藤井好祐

東京市牛込區原町三丁目八番地

印刷所 帝國在鄉軍人會本部印刷所

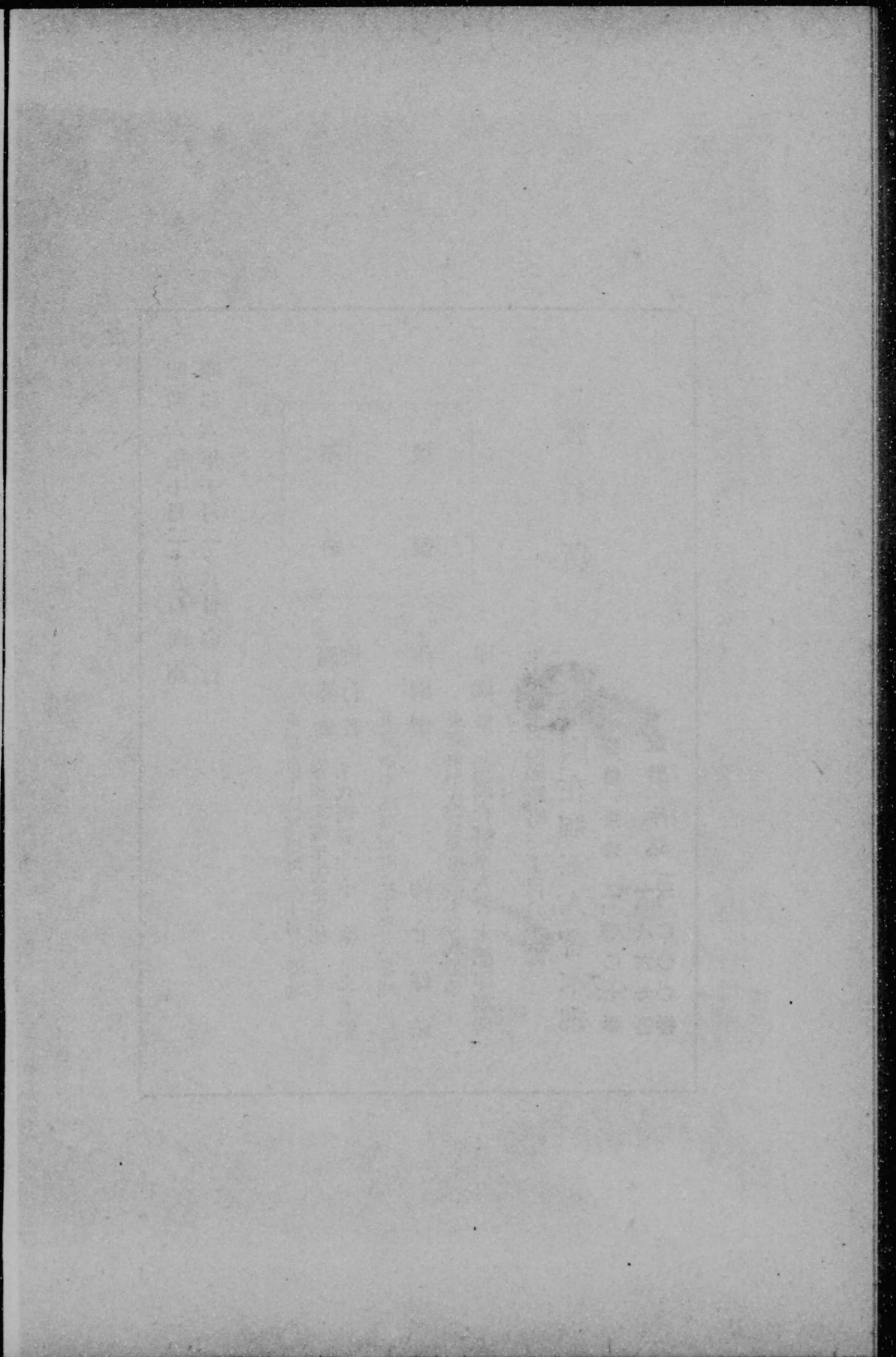
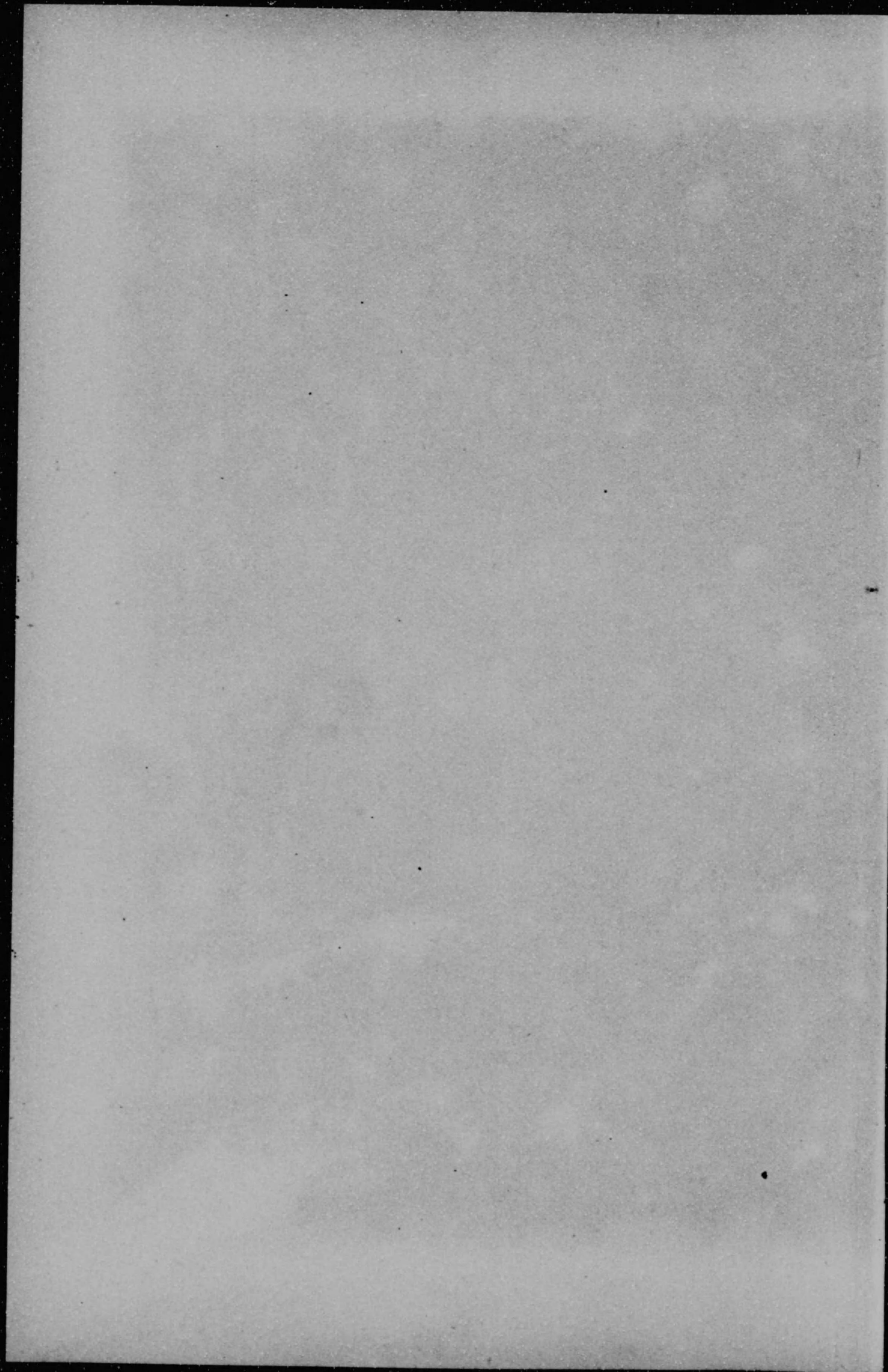
東京市牛込區原町三丁目八番地

帝國在鄉軍人會本部

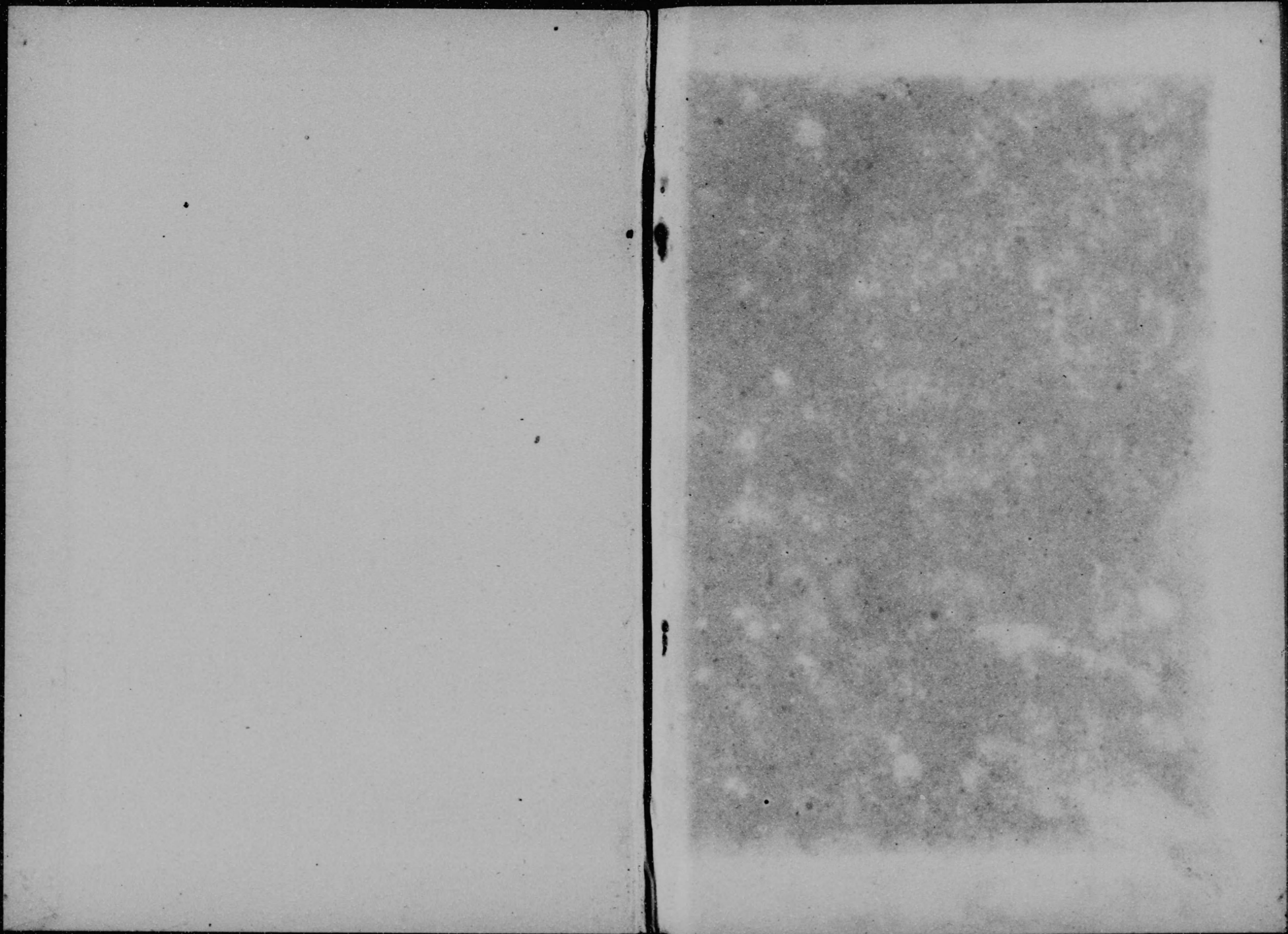
振替 東京 二、〇〇七番

電話 牛込 三一、〇八六〇七番











松本庄太郎